

図版番号	出土地点	器種	区分	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損分類	整理番号
第83図247	II M25	磨製石斧	IV	不明	5.10	3.40	1.05	31.04	A	560
第83図248	S K 59	磨製石斧	IV	不明	5.30	1.70	0.71	11.17	A	542
第83図249	II N 01	磨製石斧	IV	不明	8.00	3.80	1.70		A	562
第83図250	23号坑	磨製石斧	III b	不明	10.50	4.50	2.34		A	548
第83図251	S K 30	磨製石斧	III	蛇紋岩		6.80	3.10		A	546
第83図252	S B 05	磨製石斧	III b	不明		6.60	3.40		B	531
第83図253	II N 01	磨製石斧	III a	安山岩	12.50	6.50	3.06		A	563
第83図254	II N 01	磨製石斧	III a	輝綠岩		5.60	2.60		B	561
第84図255	S B 16	磨製石斧	IV	不明	8.30	4.90	2.43		A	539
第84図256	S B 19	磨製石斧	その他	輝綠岩	7.50	4.90	2.20		A	538
第84図257	III K 10	磨製石斧	IV	不明		6.70	3.18		B	586
第84図258	23号坑	磨製石斧	VI	輝綠岩		7.40	4.95		B	552
第84図259	II T 13	石錐	I a	安山岩	14.90	13.70	2.20	680.00	A	631
第84図260	S R 12	石錐	I a	不明	12.80	7.80	1.93	288.27	A	606
第84図261	S B 10	石錐	II	安山岩	12.00	9.60	2.94	458.64	A	600
第84図262	II N 10	石錐	I a	砂山	10.20	10.20	3.31	456.54	A	623
第84図263	S K 67	石錐	I a	安山岩	11.30	8.80	2.00	305.67	A	610
第84図264	S B 08	石錐	I c	安山岩	10.10	9.60	2.09	304.84	A	599
第84図265	II N 07	石錐	I a	安山岩	10.00	8.80	2.40	282.05	A	622
第84図266	S B 10	石錐	I c	安山岩	6.92	6.70	1.78	105.25	A	603
第84図267	S B 10	石錐	I a	安山岩	6.60	5.30	1.95	117.17	A	601
第84図268	S B 12	石錐	I a	安山岩	7.70	3.90	1.45	60.63	A	604
第84図269	S B 16	石錐	I a	安山岩	7.50	5.80	1.69	112.34	A	602
第84図270	II T 14	石錐	I a	安山岩	7.60	5.50	1.37	94.42	A	627
第84図271	S K 44	石錐	I a	安山岩	7.30	6.00	1.58	106.29	A	609
第84図272	II M 10	石錐	I b	安山岩	9.00	6.20	1.10	164.50	A	617
第85図273	II T 21	特殊磨石	II	安山岩		5.00	4.40		B	839
第85図274	II O 01	特殊磨石	I	安山岩		3.90			B	831
第85図275	S B 08	特殊磨石	II	安山岩		5.60	3.80		B	815
第85図276	II T 14	特殊磨石	I	安山岩		6.10	5.00		B	830
第85図277	II N 15	特殊磨石	I	安山岩		7.40	4.50		B	843
第85図278	S B 05	特殊磨石	II	花崗岩		8.10	4.70		B	813
第85図279	II O 20	特殊磨石	I	安山岩		5.00	7.00		B, H	827
第85図280	II T 04	特殊磨石	I	安山岩	19.30	7.50	5.00	930.00	A	828
第85図281	2号-I-4	特殊磨石	III	安山岩	21.30	7.10	5.50	1250.00	A	752
第85図281	II O 16	特殊磨石	III	安山岩	18.60	6.50	6.20	940.00	A	741
第85図283	S K 33	特殊磨石	III	安山岩		11.50	5.10		B	819
第85図284	II M 10	特殊磨石	III	安山岩	11.10	7.70	4.70	560.00	A	829
第85図285	S B 10	特殊磨石	III	安山岩	10.00	6.80	4.09	380.00	A	816
第85図286	II N 06	特殊磨石	I	安山岩	10.50	5.70	3.80	374.00	A	841
第85図287	II N 14	特殊磨石	I	安山岩	12.50	7.00	5.30	662.37	A	842
第85図288	II N 01	特殊磨石	I	安山岩		6.50	5.20		B	833
第85図289	II M 10	特殊磨石	I	安山岩	11.80	7.40	5.00	569.50	A	840
第85図290	S K 63	特殊磨石	I	安山岩	13.40	11.60	4.19	520.00	A	832
第85図291	II N 12	特殊磨石	II	安山岩	11.30	6.50	3.40	390.00	A	834
第85図292	II O 21	特殊磨石	II	安山岩	10.30	7.70	4.10	380.00	A	835
第86図293	S B 08	凹石	I d	花崗岩	8.50	7.10	3.80	340.00	A	772
第86図294	S B 13	凹石	I d	花崗岩		8.10	5.20		B	774
第86図295	S B 08	凹石	I a	花崗岩	8.60	7.50	4.80	440.00	A	771
第86図296	II N 06	凹石	I a	砂岩		9.30	3.20		B	794
第86図297	23号坑	凹石	II d	安山岩	11.80	10.80	7.00	1100.00	A	806
第86図298	II N 01	凹石	I a	安山岩	16.20	6.00	3.70	560.00	A	791
第86図299	II T 05	凹石	I b	安山岩	16.40	5.80	3.60	550.00	A	797
第86図300	II M 10	凹石	I b	緑色片岩		5.64	3.11		B	789
第86図301	II O 15	凹石	III	安山岩		6.02	3.65		B	844
第86図302	33号坑	凹石	II b	花崗岩	11.20	7.80	5.00	610.00	A	770
第86図303	S B 08	凹石	II b	安山岩	11.50	8.50	4.90	680.00	A	769
第86図304	II N 06	磨石	II a	安山岩	10.50	8.60	4.40	560.00	A	793
第86図305	S B 13	凹石	III	安山岩	11.40	9.90	5.50	850.00	A	773
第86図306	S B 13	凹石	III	花崗岩	8.70	7.40	4.10	380.00	A	778
第86図307	III K 10	凹石	II b	安山岩	16.80	9.50	4.70	660.00	A	808
第86図308	II T 14	凹石	II d	安山岩	9.80	9.30	3.80	480.00	A	799
第86図309	S B 13	凹石	II b	安山岩		7.80	6.00		B	775
第86図310	S B 12	磨石	I c	花崗岩	7.70	6.70	3.20	250.00	A	674

図版番号	出土地点	器種	区分	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損分類	整理番号
第86図311	S B 16	磨石	I c	花崗岩	10.10	7.10	4.10	490.00	A	693
第86図312	III K 10	磨石	I a	花崗岩	9.90	9.90	4.60	500.00	A	677
第86図313	S B 11	磨石	I a	安山岩	10.90	9.90	4.50	640.00	A	776
第86図314	S B 13	凹石	II d	安山岩	12.60	7.70	5.10	790.00	A	777
第86図315	S B 12	磨石	I a	花崗岩	7.10	7.00	3.10	230.00	A	648
第87図316	33号坑	磨石	I a	安山岩	8.80	8.00	4.90	480.00	A	660
第87図317	S B 14	磨石	I a	花崗岩	9.50	8.30	4.40	400.00	A	652
第87図318	S B 14	磨石	I a	花崗岩		8.10	5.90		B	651
第87図319	S B 13	磨石	I a	花崗岩	11.00	8.00	4.70	610.00	A	649
第87図320	II N 20	磨石	I a	安山岩	12.70	8.90	8.00	1020.00	A	672
第87図321	S B 09	磨石	I b	安山岩	11.10	8.30	4.10	460.00	A	641
第87図322	S B 10	磨石	I a	安山岩	11.70	8.10	6.00	760.00	A	645
第87図323	S B 10	磨石	I a	安山岩			3.50		B	642
第87図324	S B 08	磨石	I a	安山岩	9.70	9.30	6.20	870.00	A	640
第87図325	S B 10	磨石	I b	安山岩	14.20	10.20	6.60	1360.00	A	643
第87図326	III K 10	磨石	V	安山岩	9.70	8.20	5.90	520.00	A	754
第87図327	S K 25	磨石	V	安山岩	9.30	8.40	1.50	180.00	A	702
第87図328	S B 12	磨石	IV c	安山岩	11.70	6.20	2.33	277.48	A	607
第87図329	S B 12	磨石	IV a	安山岩	8.10	5.00	1.30	100.00	A	692
第87図330	S B 12	磨石	IV b	不明	8.00	6.00	2.20	180.00	A	684
第87図331	S K 63	磨石	IV b	安山岩	6.60	4.60	2.40	190.00	A	704
第87図332	S B 05	磨石	IV c	安山岩	13.20	6.30	2.60	340.00	A	699
第87図333	II N 02	磨石	IV b	安山岩		5.80	2.80		B	730
第87図334	II T 14	磨石	II a	安山岩	9.00	3.20	3.10	120.00	A	745
第87図335	II X 19	磨石	II b	不明	9.60	2.60	2.20	80.00	A	750
第87図336	II T 04	磨石	II c	安山岩		3.50	3.00		B	743
第87図337	II N 01	磨石	II a	安山岩	11.30	3.40	2.70	200.00	A	729
第87図338	S B 15	磨石	III a	安山岩		7.30	4.70		B	818
第87図339	II T 14	磨石	III a	安山岩	12.90	5.70	2.20	340.00	A	744
第88図340	2号-I-4	磨石	III a	安山岩	15.40	4.20	3.70	430.00	A	751
第88図341	III K 10	磨石	III a	安山岩	14.10	4.80	3.90	430.00	A	756
第88図342	II O 01	磨石	III a	安山岩	17.20	7.70	3.10	570.00	A	737
第88図343	S F 08	磨石	III a	安山岩	19.50	7.50	3.40	920.00	A	706
第88図344	24号坑	磨石	III a	安山岩	15.60	8.00	3.70	550.00	A	714
第88図345	III K 10	磨石	III a	安山岩		6.40	4.90		B	755
第88図346	S B 13	磨石	I	花崗岩	10.50	9.50	4.20	500.00	A	698
第88図347	II N 08	磨石	I b	花崗岩	10.90	9.20	7.00	1050.00	A	732
第88図348	II M 09	磨石	I	花崗岩	11.80	9.00	5.00	780.00	A	720
第88図349	II N 23	石棒	?	不明		3.10	2.70		Z	764
第88図350	23号坑	石棒	緑色片岩			2.35	2.23		Z	1198
第88図351	III K 10	石棒	緑色片岩			8.00	2.70		Z	763
第88図352	II T 04	石棒	緑色片岩			3.03	2.70		Z	761
第88図353	23号坑	石棒	緑色片岩			2.03	2.96		Z	1197
第88図354	S B 08	石棒	緑色片岩			2.40	2.20		Z	738
第88図355	II N 06	石棒	緑色片岩			1.90	1.90		Z	760
第88図356	S B 09	石棒	?	不明		8.29	0.90	20.0	A	768
第88図357	III K 10	石剣	?	不明					Z	767
第89図358	II O 18	石剣	安山岩						Z	1196
第89図359	III K 10	石剣	安山岩			19.80	7.10		Z	1193
第89図360	III K 10	石剣	安山岩						Z	762
第89図361	S B 05	石剣	安山岩						Z	1199
第89図362	III K 10	石剣	安山岩						Z	1191
第89図363	II N 01	石剣	II	安山岩					Z	1189

第3節 弥生時代後期の遺構と遺物

1 概要

弥生時代後期の遺構は土坑墓3基と土坑2基が確認された。この他に、ほぼ完形に復元された壺形土器(土器集中箇所)、方形周溝墓の疑いがある溝(SD04)など、墓域にかかわると思われるものが確認されている。第93図に示すように遺構外においても土器が少なからず出土しており、古墳の造営などにより破壊された遺構の存在が推定される。居住施設は確認されず、調査区内は墓域であった可能性が高い。

なお、本遺跡では弥生時代後期終末から古墳時代初頭と思われる遺物が少数出土しており、本節で取り上げる。

2 土坑墓

SM01・SM02・SM03 (第94・95図)

調査の経過と遺構の構造：遺構覆土と地山との区別が困難で、サブトレンチにより、床面付近から鉄剣とガラス玉が出土し、遺構と認められた。当初、一つの遺構として認識しており、掘り進める過程でSM01・02が同一の掘り方内と並行して造られており、その東側にSM03が直交して別の掘り方をもって造られていることが判明した。

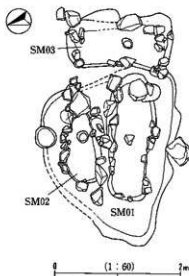
SM01は長さ200cm、幅70cm、深さ30cm。SM02は長さ110cm、幅60cm、深さ24cm。いずれも周囲に礫を配し、礫棚状を呈するが(以下便宜的に礫棚と呼称)、全体に粗雑な造りで、地山の自然礫との識別が困難な部分もある。SM01とSM02の側壁の石組は、2段程度の石を積み上げた状態である。ともに東端部に大形の礫があり、意図的に設置されている可能性がある。SM01とSM02は一つの墓域内に並行して構築されており、同時に構築したものと考えられる。

墓域は東西2.7m、南北2.2mの不整な形状で、墓域と礫棚外面の間に50cmほどの裏込めに相当する部分があるが、地山と区別し難い土が堆積しており、自然に混入したと思われる石が認められるのみで、石を詰めた痕跡は見られない。SM01の土層断面によると、①墓域の掘り込み→②礫棚部の礫の配置→③裏込め相当部分に土を埋め戻し礫棚状の施設を構築→④遺体の埋葬、という順序が考えられる。なお、墓域の検出が困難であったことから、重複した2つの墓域を1つと誤認したことを完全に否定できない。

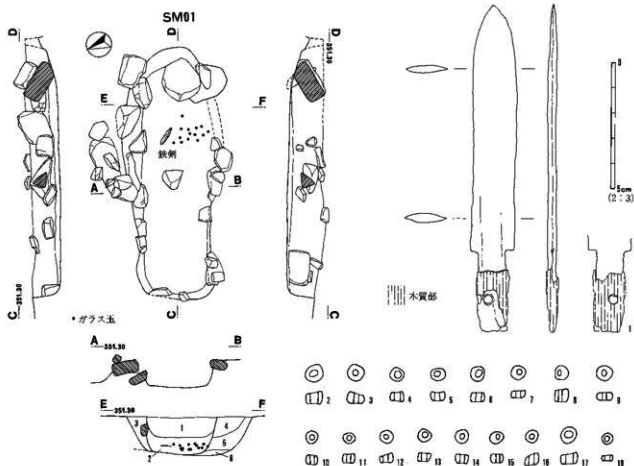
SM03は長さ170cm、幅70cm、深さ22cmである。側壁は小口側にやや石が多い程度で、石積はほとんど見られない。SM01・02の東側に直交して配置されている。

当初SM01・SM02・SM03を一つの掘り込みと認識してベルトを設定した為、SM01のみ覆土が記録された。ベルト以外の部分についても、比較的軟らかい黒色土が分層できずにほぼ均一に堆積している。この黒色土は地山の土をブロック状に多量に含んでいるが、地山に含まれる礫が殆ど含まれていないもので、一見して一度の人為的な埋め戻しと判断されるものである。

遺物出土状況：SM01では東側の底面付近より鉄剣1点とガラス小玉14点がまとめて出土した(第95図1~15)。これらは墓域底面より2cm~3cm上の黒色土層中から出土したものである。鉄剣の先端は



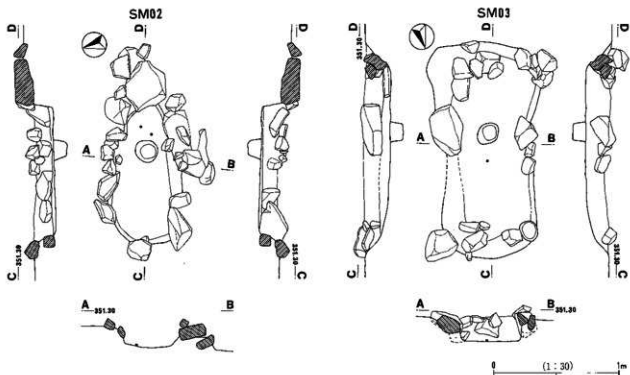
第93図 SM01~SM03



1層：黒色土。黄褐色ブロックを多く含む。 5層：黒色土。軟らかい。
 2層：黒色土。黄褐色土を含む。軟らかい土層。 6層：黒色土。黄褐色土を多く含む。軟らかい土層。
 3層：黄褐色土。ブロックを多く含む。
 4層：黄褐色土。

1～15はSM01、16・17はSM02
 18はSM03

1 (1:1)
 2-18



第95図 SM01～SM03と出土遺物

北西に向いていた。ガラス小玉が手首に着けられていたものとする、東側の内側に傾斜した大形礫の下が頭部になると考えられる。SM02では床面付近よりガラス小玉2点が出土し(16・17)、SM03では床面付近よりガラス小玉が1点出土した(18)。

覆土からは弥生後期土器片がわずかに出土している。また、隣接した奈良時代の竪穴住居址であるSB01の覆土と土坑墓周辺から高杯、壺形土器が出土している(第97図5・6・13・16・18・24)。周辺に弥生後期の遺構は見られないことから、これらの土器がSM01～SM03に伴う可能性が高い。また、④-1区では壺と高杯が多く、甕は数片出土したのみである。^[92]

出土遺物：第95図1は鉄剣で、保存処理後の値で全長13.1cm、刃部長9.8cm、幅1.6cm、厚さ3.1mmで、柄部に直径3.5mmの孔が見られる。柄部には木質が付着している。刃因が明瞭に観察されるが、保存処理後の観察では錆は確認できない。本例は長野県内における弥生時代後期の数少ない出土例である^[92]。2～17はスカイブルーのガラス小玉で直径3.1mm～4.5mm、高さ1.9mm～3.5mmである(巻頭カラー写真参照)。

遺構の時期：SM01・02は一つの墓域内に構築していることから同時期、SM03はこれらとは構造が異なっており時間差をもって構築されたと推定される。しかしながら、隣接地に直交した配置で構築されており、互いの存在を意識して構築されていることが伺われる。両者に大きな時間的な隔たりは考えられない。遺構に確実に伴う土器は出土していないものの、前述の遺構周辺の土器を見ると、SB01出土土器は箱清水式で、全体の器形を知る資料がないので明言はできないが、高杯の特徴などから、青木編年3期後半～4期前半(青木1996)、新潟シンボ編年4～5^[93]に対比できると考えられる。これらの土器が遺構の時期を示していると考えておきたい。

3 土坑

SK36 (第96図)

IIT02グリッドに位置する。長径133cm、短径112cmの不整な楕円形で、深さ30cmである。出土遺物は少なく、甕、高杯、広口縁壺の破片が出土した。1は櫛歯状工具による直線文が施文される。2は付台甕であろう。出土遺物より弥生時代後期の遺構と判断したが、遺物が土坑に伴うものであるかは疑わしい。他に縄文時代早期・中期・後期の土器が混入している。

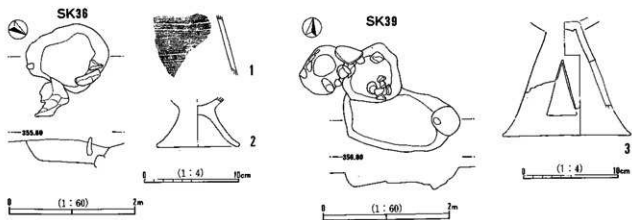
SK39 (第96図)

IIT08グリッドに位置する。縄文時代のSK37と切り合い関係にあり、出土遺物から本土坑が新しいと判断した。長径180cm、短径100cmの不整形で、深さ20cmである。弥生後期の高杯と甕の破片が出土した。1は高杯で透かしは4単位ではなく3単位の可能性が高い。出土遺物より弥生時代後期の遺構と判断した。他に縄文早期・後期土器片が混入している。

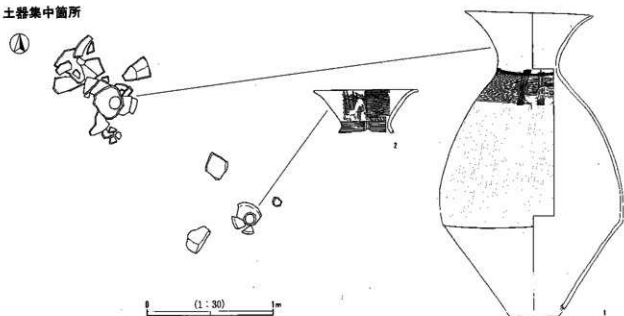
4 溝(周溝墓)

SD04 (第96図)

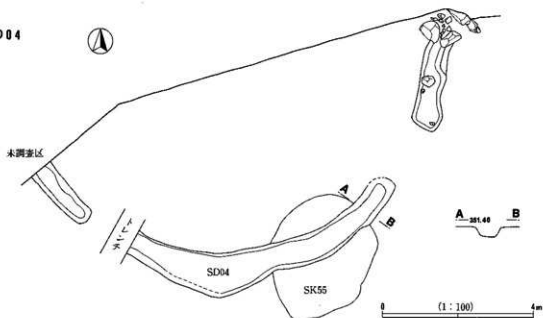
IIN02・03グリッド周辺に位置する。円形軌道に弧状に確認された溝で、幅60cm～100cm、最深部で約20cmである。両端とも調査区外で未調査であるが、内径約11mの円形になるものと推定される。東側で溝が途絶える部分が確認されている。検出面が低く底面も深くなり浅くなりするため、西側の不連続部分で溝が途切れていたか否か確認はできないが、トレンチ部分で溝が途切れるとすると、本遺構は複数のブリッジがある円形に配置された溝と考えられる。出土遺物は縄文時代早期・中期・後期の土器が約70片、古墳時代土器が数点である。いずれも小破片で遺構に伴うものとは思われない。覆土から縄文時



土器集中箇所



SD04



第96図 土坑・土器集中箇所・溝

代後期よりも新しく、中近世の土坑（SK55）に掘り込まれていることから、弥生時代から平安時代のいずれかの遺構である。遺構の切り合い関係からは時期を限定できないが、規模と形態が弥生時代後期の円形周溝墓に類似していること、周辺から弥生後期の土器が出土していること、本遺跡で弥生後期の墓が確認されていることなど、本遺構が円形周溝墓であったと推定するもの外ではなからう。

5 土器集中箇所

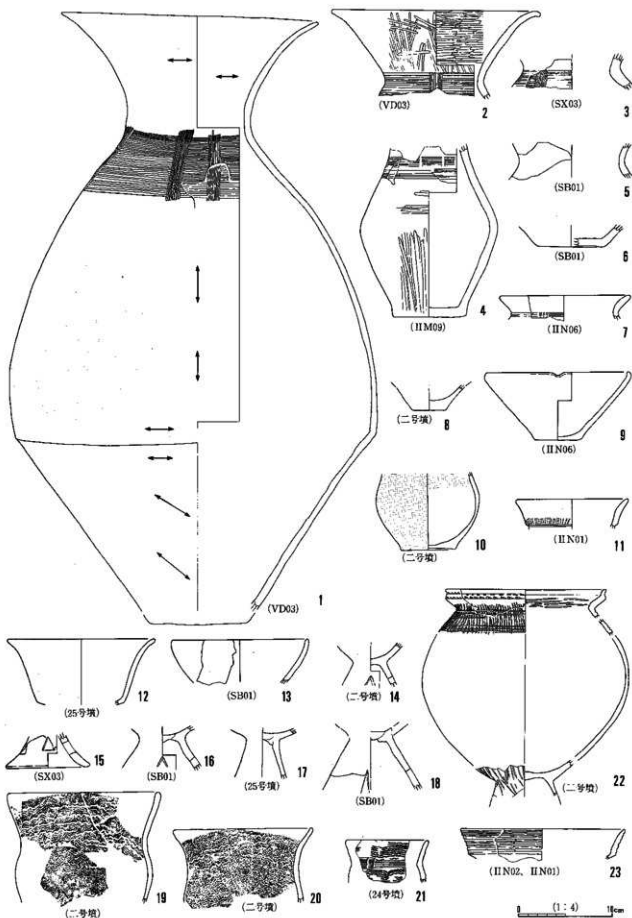
VD03グリッドで壺形土器の破片がまとめて出土した（第96図）。これらは最低2個体に分けられ、ほぼ完形の大型の壺形土器とやや小ぶりの壺形土器の口縁部に復元された（第97図1・2）。周辺に出土遺物は少なく、単独で出土した。1は高さ61.5cmの大型の壺形土器である。一箇所につぶれた状態で出土したが、底部と胴部の一部を欠く。矢印は磨きの方向を示す。2は口縁のみで胴部は確認されなかったが、口縁は全周残っており、1・2はいずれも破片になったものを遺棄したものではない。遺構は検出されなかったが、土器棺の可能性を指摘しておきたい。

6 遺構外の遺物

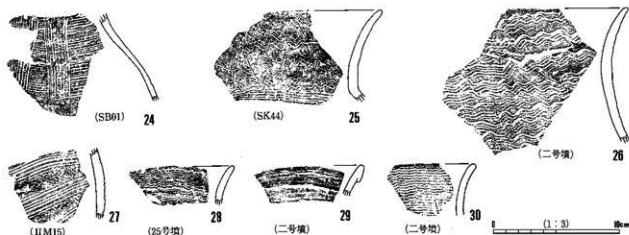
第93図にグリッドごとの土器出土量を示した。古墳墳丘出土の遺物は原位置が保証されないので分布密度のデータに含めていない。土器調査区全体にまばらに出土しているが、いくつかのまとまりが認められる。即ち、①SM01-03を中心としたまとまり、②VD03グリッドの土器集中箇所を中心としたまとまり、③二号墳を中心としたまとまり、④IIM09グリッドを中心としたまとまり、⑤IIN06グリッドを中心としたまとまり、の5箇所である。

1～4・24は壺形土器で、1・2は前項で述べたとおり、土器棺の可能性のある壺形土器である。4は直立して出土したもので、頸部以下は完形で残されている。5～8は広口短頸壺と思われ、7は頸部に縊状文が見られる。6・8は赤彩が底面にまで及ぶ。9は片口がある鉢形土器、10は内面上部にも赤彩がわずかに認められ、器壁が2mm～3mmと薄い壺形土器の一種であろう。11は北陸系土器の影響と思われる有段口縁の壺形土器で、口縁部に櫛歯状工具による細かな刺突列が巡る。12～18は高杯で、杯部の形態にバラエティーが見られる。14・16・18は4単位の三角形の透かしがあり、15は単位不明であるが、段違いの三角形の透かしがある。14は赤彩されない種な例である。12は北陸系土器の影響がある器形であろうか。図示していないが、箱清水式に特徴的な杯部の中ほどに稜を持ち外反する口縁部の高杯の破片が、④地区より数点出土している。22は、口縁部に刺突列が巡り、胴上部に沈線が横走するS字口縁壺A類である。S字口縁壺は同一個体と思われる破片のみで、いずれも二号墳より出土している。胴部は欠損しているが、底部が見られることから、本来完形に近い状態であったものが、古墳の築造の際に封土とともに墳丘内に持ち込まれた、と考えられる。19～22・25～30は甕形土器である。23は擬円線文の北陸系の甕形土器、27は斜行直線文がみられる。他は波状文施文の土器であるが、19・20には縊状文がなく、25は頸部に屈曲が認められ、箱清水系の甕の終末の様相を示している。29の折返し口縁は善光寺平北部から奥信濃の甕に多く見られる要素である。

以上のように本遺跡出土土器群には少数ではあるが、北陸地方と東海地方の土器の影響が認められる。また、上記の遺物を含めて、本遺跡の土器は青木編年3期・4期¹⁰⁾の中に取まるものと考えられる。なお、図示していないが球胴形の刷毛目調整などの土師器破片が少数出土している。



第97図 遺構外出土弥生時代後期の遺物(1)



第98図 遺構外出土弥生時代後期の遺物(2)

注

- ④-1区 (SM01-03がある、西側の89年度調査区)の弥生後期土器総重量は2350gに対して、変形土器は110gであり、他は壺形土器、鉢形土器、高杯などである。
- 白岡直之氏の集大成(白岡・町田1997)によると、長野県内では弥生後期の鉄器の出土例は本遺跡と、木島平村根塚遺跡(高橋・吉原1997)、長野市篠ノ井遺跡群監塚防地点(青木・寺島他1992)、長野市浅川扇状地遺跡群新幹線地点(上田高1998)、飯田市滝沢井尻遺跡(長野県教育委員会1972)があげられている。根塚遺跡、浅川扇状地遺跡群の例は遺構外より出土したものであるが、篠ノ井遺跡群と滝沢井尻遺跡の例は円形周溝墓もしくは方形周溝墓の埋葬施設と考えられる方形の土坑内より出土しており、本遺跡の出土状況に近似する部分がある。SM01が周溝墓であった可能性も指摘できる。
- 青木耀年(1996年)論文、新潟シンポジウムは日本考古学協会新潟大会実行委員会(1993年)資料事務局案土器対応表(P448)による。高杯の特徴は善光寺平北部の資料に照らし合わせて判断したもので(鶴田1997)、土屋耀年(土屋1998)2段階・3段階に相当する。
- 注3参照。

参考文献

- 青木・男 1996 『第2章第1節5まとめ』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 長野市内その5 大屋山古墳群・北平1号墳』朝長野県埋蔵文化財センター他
- 青木和明・寺島孝典他 1992 『篠ノ井遺跡群(4)—聖川堤防地点—』長野市教育委員会
- 白岡直之・町田勝則 1997 『中部高地における鉄器の出現と展開』『第4回鉄器文化研究会 東日本における鉄器文化の受容と展開 発表要旨集』
- 上田 高 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その2— 浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』朝長野県埋蔵文化財センター他
- 高橋 桂・吉原佳市 1997 『根塚遺跡・大塚遺跡・平塚遺跡』木島平村教育委員会
- 土屋 横 1998 『第3章6節 成果と課題—善光寺平北部の古墳出現前夜』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14 牛出遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡』朝長野県埋蔵文化財センター他
- 鶴田典昭 1997 『第9章第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の上層』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 がま川遺跡・沢田橋土遺跡・牛出古塚遺跡』朝長野県埋蔵文化財センター他
- 長野県教育委員会 1972 『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書 飯田市地区内その2』
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』

第4節 古墳時代の遺構と遺物

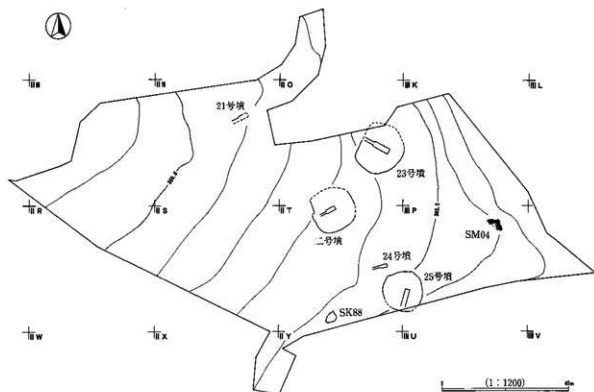
1 概要

調査区内には大室古墳群の大室谷支群・村東単位支群の古墳が存在している。これらの古墳は村東山手遺跡の発掘調査と並行して明治大学考古学研究室が発掘調査を行なった。21号墳・二号墳の6基を調査した(第100図)。その結果、22号墳は古墳ではないことが判明した。他の5基についてはすでに報告書が刊行されている。(21)

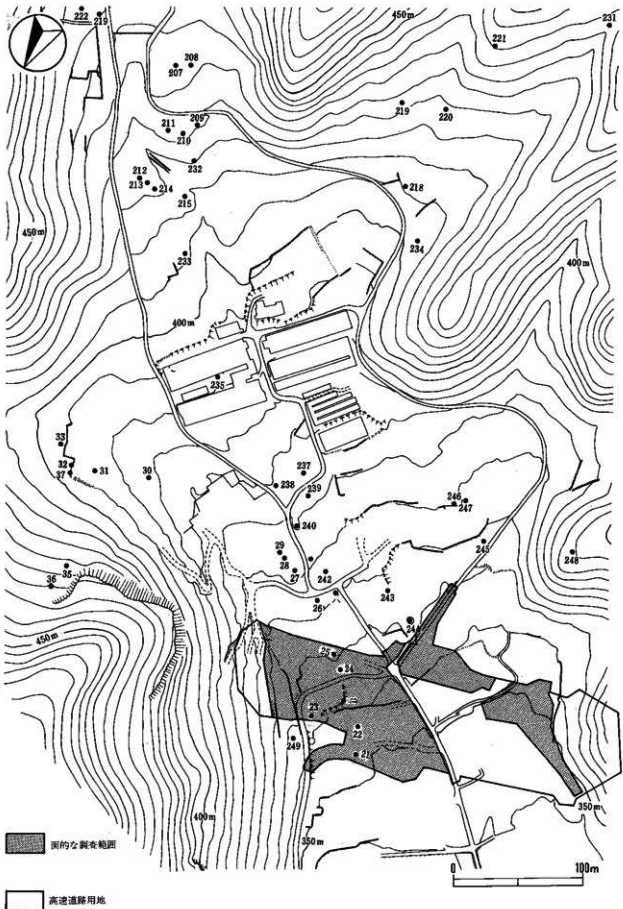
すでに報告された5基の古墳以外に、古墳1基(SM04)、土坑1基(SK88)が確認された(第99図)。遺構外ではわずかな遺物が出土したに過ぎず、古墳時代では、墓に関わる活動以外の痕跡は認められない。

調査区に含まれる古墳は、村東単位支群の中でも最も低い所に位置する一群である。前述の報告書の調査所見によると、それぞれの古墳の築造年代は、25号墳が6世紀後半期、二号墳が7世紀前半代?、23号墳が7世紀前半、24号墳が6世紀後半から7世紀中葉、21号墳が7世紀中ごろから後半期とされ、25号墳→二号墳→23号墳・24号墳→21号墳の築造順序が推定されている。これらの古墳には追葬の痕跡が認められ、24号墳では8世紀前半の須恵器が羨門より出土し、奈良時代まで追葬もしくは石室の再利用が行われたことがうかがわれる。

なお、古墳時代初頭の遺物は「第3節弥生時代後期の遺構と遺物」に記載した。本節では大室古墳群関連と思われる遺構・遺物について記述する。



第99図 古墳時代の遺構配置図



第100図 村東単位支群古墳分布図 (大塚、小林他1991に加筆)

2 古墳

SM04 (第101・102図)

調査の経緯と遺構の構造：ⅢP04グリッドに位置する。斜面部に構築された横穴式石室である。1989年度調査の試掘トレンチで人骨が出土し、1990年度に調査を行なった。遺構の南西側は試掘トレンチに削平され、石室の全貌は確認できず、墳丘も確認されなかった。調査段階では主体部より出土した須恵器から奈良時代の墳墓であると認識していたが、遺構の構造、石室周辺から出土した須恵器と埴輪から、本遺構は古墳の石室であると判断した。調査区内の全ての遺物を観察したが、本遺構とSK8以外では古墳時代中期・後期に比定される遺物はほとんど見られず、遺構外に古墳時代の遺物が存在することは稀で、埴輪などの古墳時代の遺物は本遺構に伴うと考えるのが妥当と思われる。また、大塚24号墳においても、奈良時代前半期の追葬または再利用が指摘されており、本遺構が古墳時代に築造され、奈良時代に墓として再利用された蓋然性は高い。

西側と南側が削平されており、北側に奥壁と認識した間口50cm、奥行き25cm、高さ20cmの石があるが(E-F面)、奥壁とは断定できず、東側の側壁のみが確認される石室である。側壁は間口70cm、奥行き80cm、高さ40cmを最大とする石の平積みで2段まで確認される。人骨が出土していることから支室部分と推定されるが、人骨は移動され、埋葬姿勢を示していないと思われることから、羨道部分である可能性も否定できない。床面には拳大の礫が敷かれており、その上面には炭化物がブロック状に出土した。人骨と床面の間は炭化物を多く含む褐色土が堆積する。

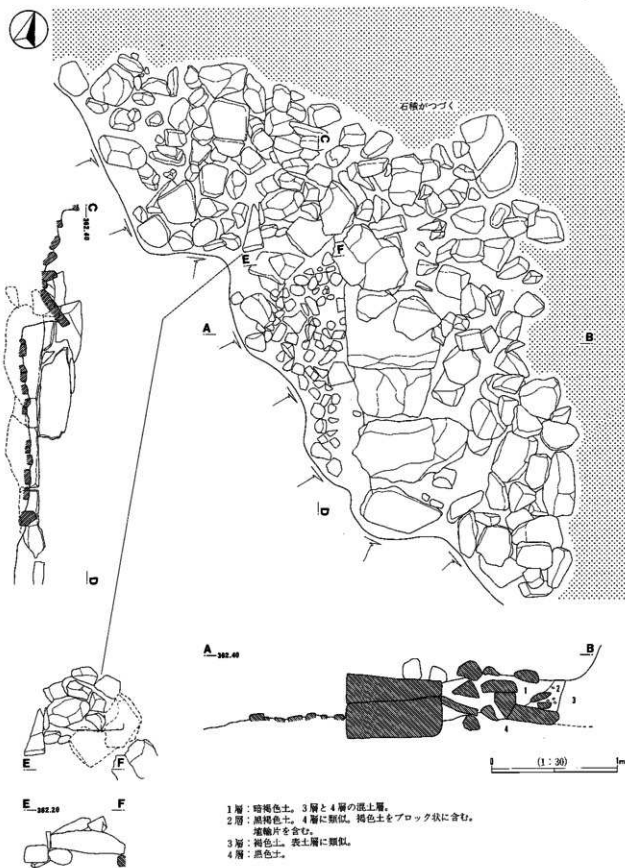
墳丘の構造と規模は不明であるが、石室の外側1m～1.5mほどの範囲には人頭大(30cm～40cm大)ほどの礫が密集して積まれており、その外側は40cm～50cm大の礫が密集せずに認められる。前者の範囲は黒色土と褐色土の混土層でその外側は黒色土が堆積する。

人骨は北側に2体分の頭骨、須恵器杯に隣接して下顎骨、東側壁面に四肢骨が多く出土した。床面から離れて出土したものが多く、埋葬姿勢を示していないことから、改葬など後世に移動されたものと考えられる。人骨に伴って8世紀～9世紀の遺物が出土しているが、人骨が何時埋葬されたものか問題が残る。他の古墳からも古墳時代の人骨と思われるものが出土しており、本遺構の人骨が古墳築造時のものか、奈良時代の埋葬によるものなのか判断できない。なお、下顎の大臼歯の数から埋葬遺体は最低3体と推定された。人骨については第3章6節に鑑定結果を掲載した。

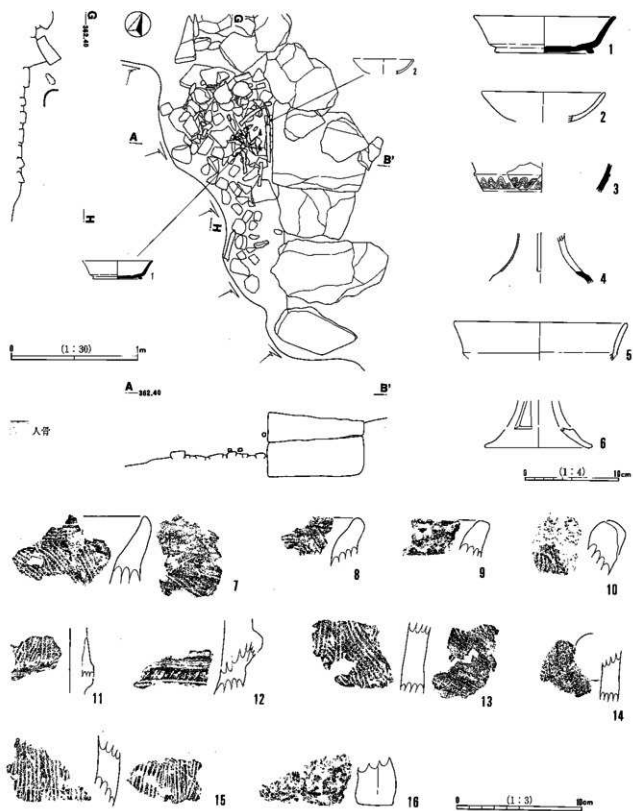
遺物出土状況：1・2は石室内人骨に接して出土しており、人骨に伴う遺物と考えられる。ともに奈良・平安時代の遺物である。3～16は石室外より出土したもので、古墳時代の遺物である。

出土遺物：第102図1は須恵器高杯で、底面は回転ヘラケズリにより整形され、焼成良好な黒灰色である。割れて20cmほどの範囲に散っていたが、ほぼ完形に復元された。2は土師器杯の破片である。1は8世紀代、2は小片であるため断定はできないが8世紀末以降のものとして推定される。3・4は須恵器高杯で、色調がそれぞれ異なり、別個体である。3は柄描きによる浅い波状文が見られる。4はスリット状の4単位の透かしを持つと思われる。5・6は土師器高杯で、胎土と器面調整が類似しており同一個体の可能性がある。ハケ調整の後ミガキもしくはナデ調整がなされている。ともに小破片であり、脚部の透かしは確認できるが、その形状・単位はわからない。7～16は円筒埴輪で、7～10は口縁部、11・12は凸帯部分、14は円形の透し孔が確認される。埴輪は全て小片で100片ほど出土したが、円筒埴輪の他に赤彩された破片も見られ、器財埴輪などの形象埴輪と思われるものがある。

遺構の時期：石室内の遺物ではないが、須恵器・土師器・埴輪はいずれも6世紀前半の様相を示していると考えられ⁴²⁾、古墳の築造は6世紀前半としておきたい。また、石室内より8世紀前半の須恵器が出



第101図 SM04



第102図 SM 04と出土遺物 (1~6は1/4、7~16は1/3)

土していることから、奈良時代に石室の再利用があったことが確認される。

なお、本遺構の築造年代が6世紀前半とすると、大室25号墳よりも先行すると考えられ、SM04→25号墳→ニ号墳→23号墳・24号墳→21号墳の築造順序が推定される。

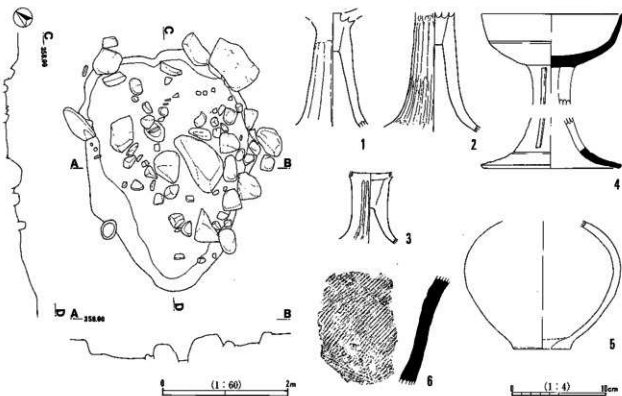
3 土坑

SK88 (第103図)

遺構の構造：25号墳の東側約20m、II T23グリッドに位置す。3.7m×2.6mの不整な楕円形を呈し、深さ45cmである。土坑内および周辺の地山には大形の礫が多く見られ、土坑底面は礫が露出しており凹凸が激しい。

出土遺物：1～3は土師器高杯幹部で、1・2は杯部内面が黒色処理されていることが確認される。1はケズリ、2はケズリ後ミガキ、3はミガキの調整である。4は須恵器高杯で、脚部は欠損のため長さは推定であるが、スリット状の3単位の透かしが認められる。杯部と脚部に浅い沈線が巡る。灰白色を呈し、軟質で擦ると粉土が手につく。5は土師器壺で、ハケ調整後ナデ調整を行なっている。底部は欠損しており、外面から加撃した剝離痕と思われるものが内面に認められ、焼成後の底部穿孔の可能性がある。6は須恵器甕の胴部破片で内面に青海波紋が見られる。割れ口に釉がかかっており、破片の状態で大遺跡に持ち込まれたものである。付近に須恵器の窯跡は確認されていないため、どのような経緯で大遺跡に持ち込まれたものか疑問が残る。他に、須恵器甕片、土師器高杯・甕破片が出土しているが、杯は認められない。覆土よりウマの歯片が1点出土した。土坑の規模から馬を埋葬した可能性も考えておきたい。なお、遺構外より時期不明の馬の歯が15点出土している。

遺構の時期：須恵器高杯はTK10～TK209の必要素を持っており¹⁴⁾、土師器高杯は尾代編年¹⁵⁾屋代・古墳8期に主体的にみられるもので、いずれも6世紀後半の年代が与えられている。本遺構は6世紀後半と考えられる。



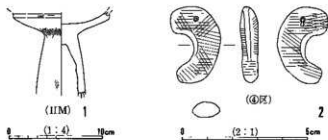
第103図 SK88と出土遺物

なお、1～3の土師器高杯は大室25号墳出土のものと同様であり、本遺構の形成時期が25号墳の築造とほぼ重なりと推定されることから、25号墳築造と何らかの関わりを考える必要があろう。

4 遺構外の遺物

古墳時代の遺物は上記の遺構以外ではほとんど出土していない。図示したものの他、土師器と7世紀代の須恵器がわずかに確認されているのみである。土師器破片も見られるが、小片のため時期決定できないものが多い。須恵器については、古墳時代の様相を残しながら、奈良時代まで残るものがあり、古墳時代と奈良時代の遺物を明確に区分して提示することができないため、第2章5節（奈良・平安時代の遺構と遺物）にまとめて掲載した。

第104図1は高杯でSM04の出土遺物よりも古いもので、古墳の築造に関わる遺物か否か問題になるところである。2は滑石製の勾玉である。第112図では1の須恵器杯蓋、6の匙又は横瓶、7の提瓶、などは古墳時代の様相を示しており、古墳に関わる遺物の可能性がある。



第104図 遺構外出土古墳時代の遺物

註

- 1 大塚初重・小林三郎他 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3 一長野市内 その3— 大室古墳群』御長野県埋蔵文化財センター他
- 2 風間栄一氏、飯島哲也氏の御教示による。
- 3 田辺昭三 1966 『須恵邑古窯址群』、田辺昭三1982『須恵器大成』
- 4 長野県史古墳時代IV期新段階に相当する（榮沢1988）。
鳥羽英雄 1998 「第5章第3節 古墳時代の土器編年」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25 更埴糸糸遺跡・屋代遺跡群』御長野県埋蔵文化財センター他。

第5節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 概要

竪穴住居址4棟、土坑2基、焼土址5基が検出された。これらの他に、大室24号墳、SM04などの古墳の石室に奈良時代前半期の埋葬の痕跡が認められる。竪穴住居は8世紀後半以降に現れており、それ以前の遺物は墓に関わる遺物である可能性が高い。遺跡内の微地形は縄文時代から大きな変更がないと思われ、概ね縄文時代の遺構範囲と一致している。即ち、遺構は谷部を避けて微高地上に立地している。SB01は他の竪穴住居址4棟の中で一番古いと考えられ、他の3棟とは離れて、谷部を挟んだ西側の微高地上に立地する。(第105図)

2 竪穴住居址

SB01 (第106図)

調査経過と遺構の構造：検出面では弥生後期の土器が日立ち、弥生後期の住居と考えた。掘り進めたところ竈を検出し、須恵器と土師器が出土したため当該期の遺構と判明した。

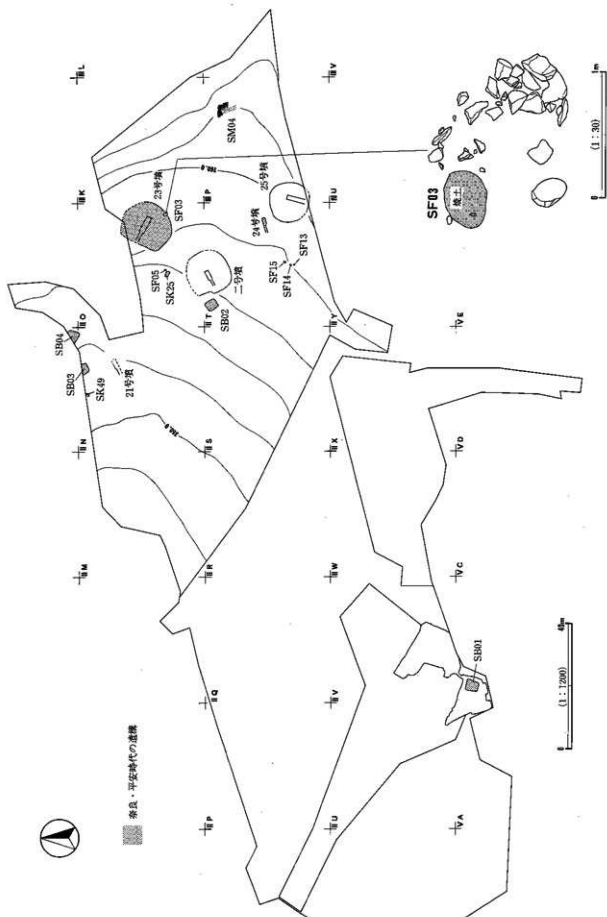
3.90m×約3.26mの不整な方形を呈する。壁高(床面から検出面の高低差)は5cm～約20cmで、北側が低く南側が高い。床面は部分的に貼床状の土が確認された。竈および竈脇のピット部分を除き、床面からの深さ約10cmの周溝が壁際を巡る。西側中央に竈を配置する。竈の袖部分には土師器甕破片を埋め込み、焚き口および火床のそれぞれに平石を敷く。竈の右側(北側)には焼土粒、礫、須恵器が落ち込んだ不整形なピット(P20)が見られる。煙道は確認されなかった。柱穴は特定できなかった。図中の上湯線の中のピットは覆土中または床下から検出されたもので本遺構には直接関わりのないものと思われる。

遺物出土状況：竈脇のピットより完形の須恵器杯(第106図2)が出土した。竈内より出土した土師器は2点の杯を除きすべて甕で比較的大形の破片が目立つ。一部の破片に竈土と思われる焼土が付着している。竈周辺から出土した甕は完形には復元できないが、口縁部と底部がそれぞれ2個体分確認された。須恵器杯A・黒色土器・土師器甕・土師器小型甕が出土した他、須恵器甕小片が1点出土した。

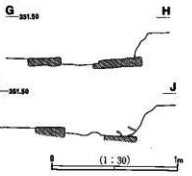
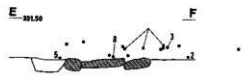
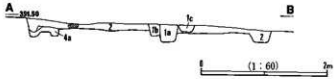
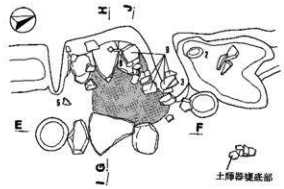
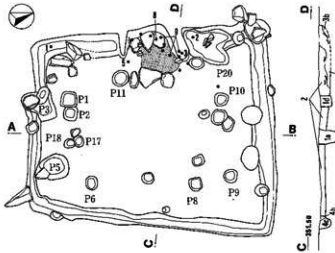
検出面より弥生後期の土器が多数出土しているが、本遺構の西側に弥生時代後期の3基の土坑墓が隣接しており、これらに関わる遺物が混入したものと思われる。このほかに縄文時代後期土器片も多数出土している。

なお、④-1区では奈良・平安時代の遺構は本住居址のみであり、遺構外の当該期の遺物は本遺構に関わるものと考えられる。遺構外からは須恵器杯B、横瓶、四耳壺なども出土した。

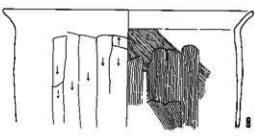
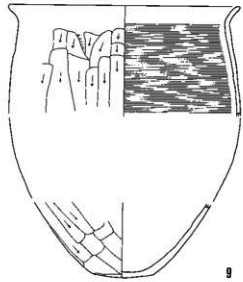
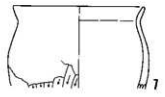
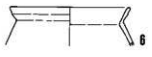
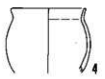
出土遺物：第106図1・2は須恵器杯でいずれも底部糸切りで、1は灰色で半分欠けているが、2は灰褐色の酸化炭焼成で口縁をわずかに欠損するがほぼ完形である。3は黒色土器杯で底面と外面の底部付近に手持ちヘラケズリ調整がなされている。黒色土器杯には3よりも器高の低いものがあり、少なくとも2法量が存在する。4～7は土師器小型甕である。4・5はいずれも口径8cmで、口縁部と胴部上半には回転によるナデ調整が見られ、5には胴下半部にケズリ痕が微かに認められる。このタイプの小型甕は3点出土しているが、いずれも胴部の外面が薄く剥落しており、器面調整痕の観察ができない。剥落は二次焼成によるものと思われ、これらが煮沸などの加熱を要する器種であったことが推定される。6・7は口径13cm～14cmで、胴上半部から口縁が回転によるナデ調整で、7では胴下半部にケズリ調整が認められる。8・9は土師器甕で口径は24cm～26cmである。口縁部は横方向のナデ調整で端部は丸くおさめる。胴部外



第105図 奈良・平安時代の遺構配置図



- 1a層：黒褐色土。黄色粒を混じる。 3a層：焼土。炭化物を多く混じる。
 1b層：不明。 3b層：焼土。
 1c層：赤褐色土。黄色粒を混じる。 4a層：赤褐色土。黄褐色土ブロックを混じる。
 1d層：赤褐色土。黄色粒。炭化物を混じる。 4b層：黒褐色土。炭化物を混じる。
 2層：赤褐色土。黄色粒。炭化物。焼土を混じる。 4c層：黒褐色土。黄色粒。炭化物を混じる。



第106図 SB01と出土遺物

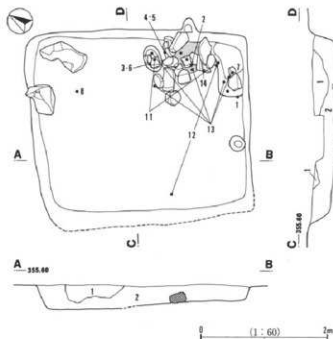
面は縦のケズリ調整、胴部内面はハケ調整である。9の底部はケズリ調整により直径6cmの丸みがある平坦面を作り出している。他の土師器甕底部も同様に、ケズリ調整による直径5cm～6cmの凸状の平坦面を作り出したものである。

遺構の時期：出土遺物の器種組成から篠ノ井遺跡編年5期・6期（西山1997）に相当すると考えられ、8世紀末から9世紀前半頃の年代が推定される。

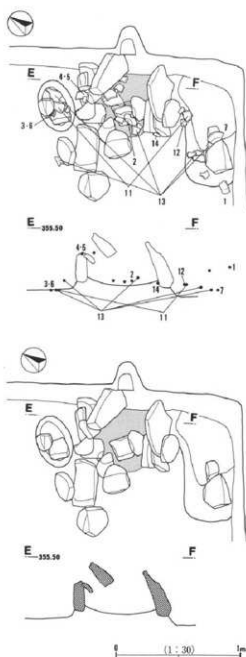
SB02（第107・108図）

調査経過と遺構の構造：基本土層IV層面でプランが確認された。地山は南に向かって傾斜しており、斜面下方の西壁の南側ではプランが不明確であった。

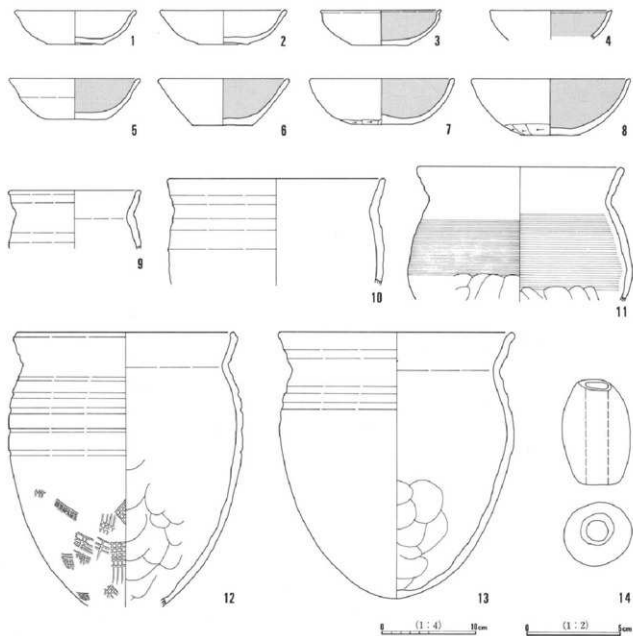
2.73m×3.22mの長方形を呈する。壁高は30cm～40cm。竈は東壁の中央から南寄り配置される。平石を用いた石組みの竈で、南側の袖部の石は残存状況が良好であるが、北側は半壊状態である。竈内には四角



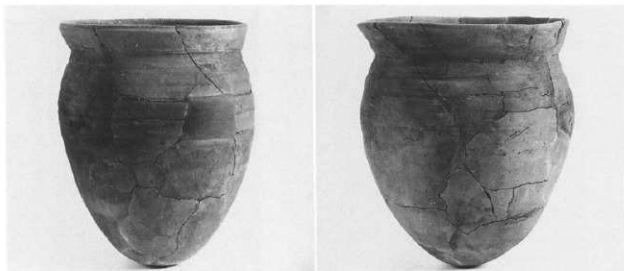
1層：暗褐色土。黄褐色土をブロック状に多く含む。締りなし。
2層：黒褐色土。基本土層II層に類似するがII層よりやや明るい。



第107図 SB02



第108図 SB02出土遺物(1~13は1/4, 14は1/2)



柱の支脚石が立っており、壁には煙道に関連すると思われるわずかな張出しが認められる。竈の両脇に浅い掘り込みがあり、北側のものは深さ5cm前後の楕円形を呈し、南側のものは深さ10cm前後の不整形なものである。柱穴と特定できるものはなく、南壁際に直径24cm、深さ17cmのビットが1つ確認されたのみである。周溝は確認されず、北西壁の東側には地山の巨大な石が露出している。

遺物出土状況：覆土中に遺物はほとんど見られず、竈内およびその周辺に遺物が集中して出土した。竈穴の南西壁の外側に頸骨と歯がまとまって出土し、いずれもウマと鑑定された。住居外であり平安時代のものとは断定できない。ニ号墳の近くでもあり、古墳時代のウマである可能性も考慮したい。

出土遺物：1・2は土師器杯、3～8は黒色土器の杯、9～13は土師器甕、14は土錘である。1は粒子が粗い混和材を多量に混入し、他の杯と胎土が明瞭に異なる。3・4は口縁部が特徴的で、5は外面に稜が認められる。1～3・5・6は底面回転糸切り、7・8は底面と底部周辺に手持ちヘラケズリ調整が見られる。7はケズリ後ナデている。10は胴上半のロクロ整形痕と胴下半はナデもしくはケズリ調整がわずかに観察される。11は胴上半がカキ目で下半部はタタキ痕が観察される。12・13はともに胴上半がロクロ整形痕で、下半部内面にタタキ痕が見られ、いずれも丸底である。12の表面には格子目状のタタキ痕がわずかに見られるが、13はケズリもしくはナデによりタタキ痕が消されている。14は長さ5.6cm、太さ3.6cmの土錘で、本遺跡唯一の土錘である。これらの他に須恵器杯A・杯B・杯蓋・甕が出土している。杯Aは底部ヘラ切りであり、奈良時代前半の埋葬などの祭祀的行為に関わるものと推定され、本住居の覆土に混入したものと考えられる。

遺構の時期：出土遺物の器種組成、杯の形態から篠ノ井遺跡編年6期・7期（西山1997）に相当すると考えられ、9世紀第2四半期から9世紀末頃の年代となる。

SB03（第109図）

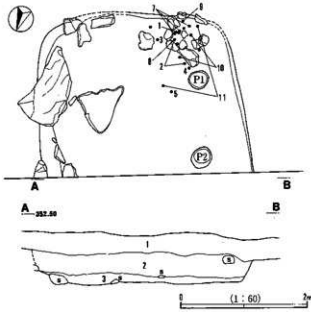
調査経過と遺構の構造：大室21号墳調査終了後重機で掘り下げ、黒色の落ち込みが確認された。北側は調査区外のため、未調査である。

方形を呈する。東西2.96m、南北は調査区内では2.5mを測る。壁高は深い所で30cmである。底面には大小の地山の礫が見られ、特に東側には巨大な岩が露出する。南壁の東端に、平石を用いた石組みの竈があり、中央には一辺10cm、長さ28cmの四角柱の支脚石が設置されている。支脚石は8cmほど竈の床面に埋め込まれている。また、竈の構築材である平石の一部が崩落した状況が認められる。西壁側に柱穴と思われるビットが2箇所確認された。P1は直径30cm、深さ17cm、P2は直径30cm、深さ22cmである。東壁側は床面に地山礫が多く柱穴は確認できなかった。周溝は確認されていない。

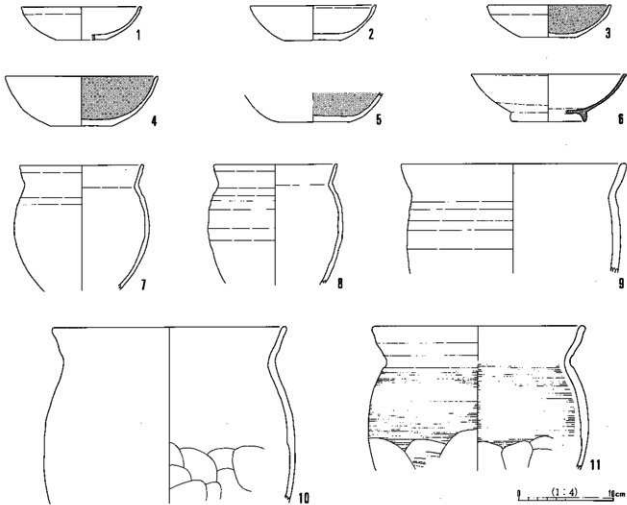
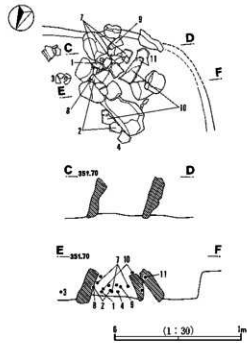
遺物出土状況：覆土からは出土遺物が少なく、竈周辺に遺物がまとまって出土した。

出土遺物：1・2は土師器杯で、ともに底部はケズリ調整で、内面が丁寧に磨かれており、口縁内面にわずかに稜が認められる。3～5は黒色土器杯で底部はケズリ調整、特に5にはケズリ後にミガキが見られる。3・4は内面の黒色処理が不十分で土師器に近い色調の部分がある。6は灰釉陶器碗、7～11は土師器甕である。7・8は全面にロクロ整形が認められ、特に胴上部に整形痕が明瞭に見られる。10は焼土が付着しており、口縁部まで二次焼成を受けている。出土状況から竈の構築材として転用されたものであろう。胴上半はロクロ整形痕、下半部内面はタタキ痕が見られるが、外面のタタキ痕はナデで消されている。11は胴上半がカキ目、下半部にタタキ痕が見られ、外面はタタキ後横方向のケズリ調整をする。

遺構の時期：出土遺物の器種組成、杯の形態から篠ノ井遺跡編年6期・7期（西山1997）に相当すると考えられ、9世紀第2四半期から9世紀末頃の年代となる。



1層：褐色土、表土。
 2層：黒色土。スコリアが若干含まれる。小礫も3層より多い。
 3層：黒褐色土。2層よりは締まりがあるが、スコリアが少ない。



第109図 SB03と出土遺物

SB04 (第110図)

遺構の構造：北西側半分は調査区外にあり未調査であるが、約3.6m×3.6mの方形を呈すると推定される。検出面より約20cm掘り下げ床面を検出した。なお、調査区壁面では地表からの土層が観察され、表土下のII層から掘り込まれており、壁高は少なくとも50cmまで確認できる。竈の痕跡と思われる硬く焼けた火床面が南壁側に認められる。火床面は直径約50cmの不整な円形で、東側に竈の心材に用いられたと思われる平石が出土している。このことから本住居址には、他の住居址と同様に石組みの竈が設置されていたものと思われる。柱穴の特定はできなかったが、床面で3つのピットが確認された。いずれも直径30cm前後で、深さはP1が32cm、P2が8cm、P3が12cmである。周溝は確認されなかった。

遺物出土状況：遺物は極めて少なく、図示した土師器杯と土師器甕の小破片が7点出土したのみである。これらの他に縄文時代早期と後期の土器が50片ほど出土したが、これらは覆土中に混入していたものである。

出土遺物：1は底部に糸切り痕を残す黒色土器の杯である。土師器甕は破片であるが、内面に叩きの当て具痕とハケメが見られ、外面はケズリとナデ調整が見られる。

遺構の時期：出土遺物が少なく時期を決める根拠に乏しいが、篠ノ井遺跡編年6期・7期（西山1997）に相当すると考えられ、9世紀第2四半期から9世紀末頃の年代となる。

3 焼土址

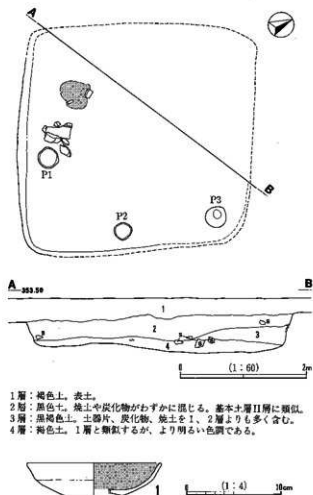
SF03 (第105・111図)

II O20グリッドに位置し、23号墳の裾部にあたる。47cm×35cmの楕円形の焼土で、掘り込みは認められない。周辺より須恵器杯A・杯B・杯蓋・甕と黒色土器数片が出土した。第111図1～6は須恵器で、1は底面回転ヘラ切りで、植物繊維のような圧痕が見られる杯Aである。2～4は杯Bで底面は回転ヘラケズリ調整であり、2には「×」のヘラ描き記号がある。5は杯蓋、6は杯又は平瓶などの口縁の可能性がある。出土遺物は須恵器を主体としており、黒色土器破片は古墳時代の遺物である可能性が高い。4・6は中島編年（中島1997）2期、他は3期に対比され、7世紀末から8世紀前半の年代が与えられる。

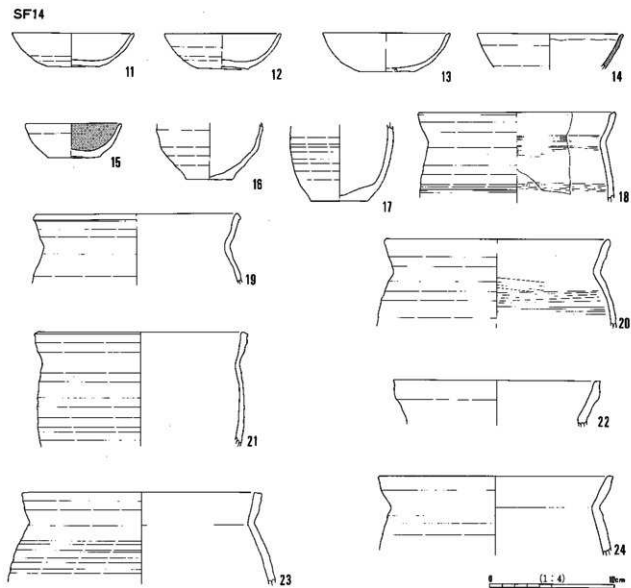
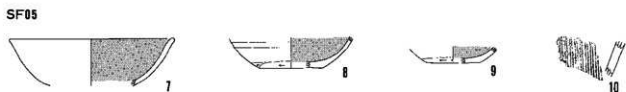
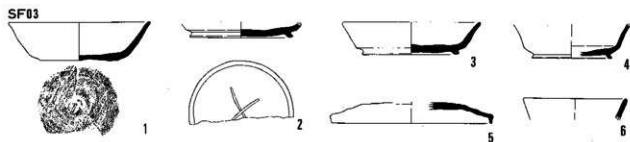
なお、23号墳墳丘（7世紀前葉築造）より同時期の須恵器が出土しており、本焼土址は墳丘上及びその周辺で行われた祭祀的行為に関わる可能性がある。

SF05 (第111図)

II O18グリッドに位置する。直径60cmの円形を呈する焼土である。焼土の状況は不明であるが、検出面



第110図 SB04と出土遺物



第111図 焼土坑出土遺物

より20cmの深さまで焼土が見られる。黒色土器杯・土師器甕の他、中世の播鉢破片が1点出土した。第111図7～9は黒色土器杯で、8・9は底面及び底部周辺にケズリ調整が見られる。9は二次焼成を受けて焼土が付着している。甕の構築材に用いられた甕などの土師器と同じ状態で、本遺構が構造物を伴う焼土址であった可能性を考慮することができる。10は播鉢で両面が施釉されている。小片であり混入したのと思われる。黒色土器から、SB02～04とはほぼ同じ時期の遺構と判断した。

なお、近接するSK25も同時期の遺構で、関連施設の可能性がある。また、遺跡内から羽口が出土しており(第112図)、これらの遺物との関わりも想定される。

S F 1 3

II T18グリッドに位置する。50cm×30cmの楕円形の焼土で、掘り込みは認められない。焼土に伴いタタキ残がある土師器甕の破片が1点出土したのみである。

S F 1 4 (第111図)

II T18グリッドに位置する。69cm×45cmの楕円形の焼土で、掘り込みは認められない。周辺より土師器甕・杯、黒色土器杯、灰釉陶器碗などが出土した。第111図11～13は土師器杯でいずれも底部糸切りで、法量がほぼ一致する。14は灰釉陶器碗。15は黒色土器杯でかなり高温の二次焼成を受けている。16・17は小形の土師器甕で、ともに胴部にロクロ整形痕が見られるが、16は底部糸切り、17は底部ナデ調整である。19～20は土師器甕で、18・20の内面にはカキ目が見られる。土師器甕の下半部はタタキ調整で外面はナデのものが多く、わずかにタタキ目が残るものがある。出土遺物より篠ノ井編年7期・8期に相当し(西山1997)、9世紀後半～10世紀第1四半期頃の年代が与えられる。

S F 1 5

II T18グリッドに位置する。70cm×55cmの範囲で不整形な焼土が検出され掘り込みは認められない。出土遺物は見られないが、検出面がS F 1 3・1 4と同じく、S F 1 4の南側1.2mと近接していることからこれらと同時期であると判断した。

4 土坑

時期が明確にできた土坑は以下の2基のみであるが、他にも8世紀から9世紀のものと考えられるものもあるが、出土遺物が少なく、時期を決定することができなかった。土坑については第2表に規模、出土遺物、時期などの一覧を示した。

S K 2 5

II O18グリッドに位置する。170cm×95cmの長方形で、深さ24cmである。黒色土器杯、土師器甕の破片が出土した。覆土は暗褐色土の単層で、黄褐色土をブロック状に混じる。出土遺物より9世紀代の遺構と判断した。

S K 4 9

II N03グリッドに位置する。半分がトレンチにより破壊され全貌は不明であるが、140cm×100cmほどの楕円形もしくは方形と推定される。深さは37cmである。土師器甕、黒色土器杯の破片が出土した。覆土は暗褐色土である。出土遺物より9世紀代の遺構と判断した。

5 遺構外の遺物

奈良・平安時代の出土遺物は西側と東側の微高地上に集中しており、谷部ではSK68～SK76が集める範囲にわずかに遺物が見られる。

第112図では古墳時代後期の遺物も含めて掲載している。1の杯蓋・6の甕・7の提瓶は古墳時代後期

の須恵器で、古墳の埋葬に関わる遺物であろう。2・3の須恵器杯蓋、4・5の須恵器杯B、13の横瓶はいずれも8世紀前半のもので、本遺跡ではこの時期の住居址は無く、古墳墳丘、石室などから同時期のものが出土しており、これらの須恵器も埋葬などの祭祀的な行為に関わる遺物と考えておきたい。9～12は黒色土器で、9の内面に文様化されたヘラミガキが見られる。9と10は底部ヘラケズリ調整、11・12は糸切りである。8・14は四耳壺である。

これらの他に調査区全体での灰釉陶器の破片が27点出土した。口縁部で個体識別をすると椀7点、短頸壺1点、平瓶?1点が確認される。椀はすべて光ヶ丘1号窯式であり、短頸壺はさらに新しい可能性がある。灰釉陶器の示す年代はおもに9世紀後半の年代を示している。⁽²¹⁾

15～17は羽口で、網部分は釉がかかった状態の部分で、斜線部は欠損部を示す。羽口は5点出土しており、IIN04グリッドに3点が集中する。1点は出土地不明であるが、1点は西側の微高地上の④-1区より出土した。

註

- 1 原 明芳氏のご教示による。

参考文献

- 中島美子・鶴田典昭 1997 「第9章第3節高丘丘陵古窯址群の須恵器生産について」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 一 小布施町内・中野市内その1・その2』08長野県埋蔵文化財センター他
- 西山克己 1997 「4 古代の土器と時期区分」『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書16 一 長野市内その4— 篠ノ井遺跡群 遺物編』08長野県埋蔵文化財センター他

第6節 中世以降の遺構と遺物

1 概要

中世以降の遺物は、調査区全体に認められたが、少数である。遺構は④-1区に確認されたのみで、溝2基、焼土址2基が検出された。④-1区ではこの他に溝1基(SD03)、土坑8基と多数のピットが検出されたがいずれも時期不明で中世以降に限定できない。多数のピットは④-1区の南側に集中しており、奈良・平安時代の竪穴住居との切り合いから、奈良・平安時代以前のピットと奈良・平安時代遺構のものが混在していることが判明している。周辺には弥生時代後期と奈良・平安時代と中世の遺物が出土していることから、これらのいずれかの時代に属するものと考えられるが、個々の時代を検討することはできなかった。

④-1区の調査では、礫が特に集中する範囲を配石遺構(SH01~SH04)と考え調査を進めた。これらの遺構の検出面からは縄文時代から中世までの遺物が出土したが、人為的な構築は確認できず、崖錐堆積による自然礫層と判断した(第5図④区遺構配置図参照)。

2 遺構

SD01 (第113区)

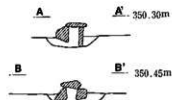
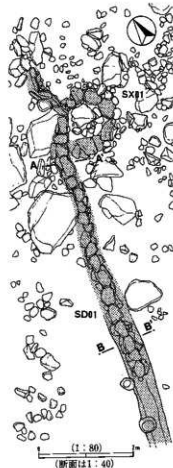
II V18グリッドからII V23グリッドに伸びる。北に向かって緩やかに傾斜した、幅25cm~50cmの溝で、6.8mにわたって板状の石を蓋のように敷きつめた構造が残る。石は10cm程度の間隔で並行に立てて並べ、そこに石蓋をした構造で、底には何の施設も無く、幅10cm、高さ12cm程度の空間となる。傾斜方向にやや斜行して伸びており、土層断面に流水の痕跡はない。南側延長部の石の無い部分で石が抜かれた痕跡は見られず、北側も明瞭には伸びない。残存部北端に内径約80cmの円形の石列(SX01)があり、深さ12cm程の底面には平石を敷き詰めている。土師器1片とカワラケ1片が出土した。

SD02

II V18からII V23グリッドに伸びる溝である。幅60cm、深さ45cmでSD01と並行し、北に向かって緩やかに傾斜する。SD01と関連する施設であろうか。時期、性格とも不明である。

SF01・SF02

SF01はII V22グリッドに、SF02はVB01グリッドに位置する。共に直径20cmの焼土址で掘り込みは見られない。SF01は焼土の厚さは1cm~2cmで、近接して内耳鍋破片が出土した。SF02に伴う遺物は無いが、検出面がSF01と同じことから、同時代の遺構と考えられる。

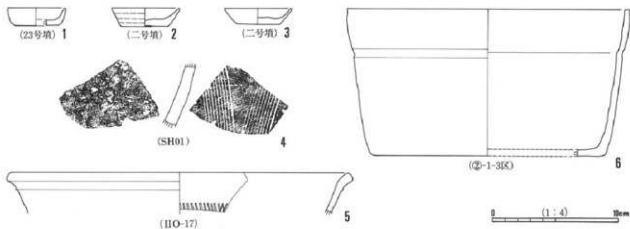


第113区 SD01・SX01

3 出土遺物

遺構に伴う遺物は少数で、大半は遺構外の遺物として取り上げられた。カワラケ、内耳鍋、陶磁器、寛永通宝などが出土した。

第114図1～3はカワラケ、4は須恵質の播鉢、5の播鉢は鉄釉が見られる。6は内耳鍋で、調査区中央の谷部分より出土した。



第114図 中世の遺物



SD01

第3章 調査成果の検討

第1節 村東山手遺跡出土の早期後半土器の型式学的検討

阿部 芳郎

要旨

中部高地の早期後半は関東・東海地方の条痕文系土器群が波及した時期と考えられている。村東山手遺跡では当該期の土器が比較的まとまって出土しており、小論ではこれらの資料を基にして型式学的な検討を加え、村東山手遺跡の土器が関東地方の野島式土器の後半から鶯ガ島台式に併行することを指摘し、さらに文様と胎土および器面調製技法の3点について着目して資料を検討した結果、関東地方の器面調製技術と文様をもつ一群と、中部地方で在地化した調製技法と文様をもつ一群。そして関東地方にはその系譜を辿り得ないものという様に3群に大きく区分できた。

そして、胎土には風化花崗岩の岩石鉱物を主体とした在地の胎土の一群と遠隔地から搬入された胎土グループが存在し、前者は在地化した型式学的特徴を示し、反対に後者は関東の土器群の特徴が良く観察された。

さらに器種組成率を算出し、有文土器の比率が関東地方の条痕文系土器に比較して高いこと。縄文施文土器が高率で存在する点を指摘し、中部高地の条痕文系土器の構成は、有文土器が関東地方の影響を受ける一方で器種組成や縄文施文土器の存在などに地域的な個性をもつ点を明らかにした。

また、関東地方との交渉関係は野島式後半期から鶯ガ島台式期において一定量の搬入品の持ち込みを伴いながら連続し、以後に型式学的な独自性が強まることを指摘した。

キーワード：野島式土器 鶯ガ島台式土器 器面調製技術 施文手法 胎土分類 中部地方

はじめに

村東山手遺跡の調査で出土した土器のなかには縄文時代早期後半の土器群が含まれている。その出土量は600点と、出土した縄文土器の中では量的には決して多くはないが、それらの型式学的な特徴は周辺地域では数少ない資料であり、土器型式の系統や変遷を含めても不明確な点が多い当該期の様相を考える上で重要な意味をもつものと考えられる。

ここでは村東山手遺跡において出土した資料をもとに検討して、中部地方における早期後半の土器型式の成り立ちと変遷について考察する。

1 中部地方における早期後半土器研究の現段階

中部地方の早期後半土器編年は押型文土器の編年が進行する一方で、類例の稀少性もあってか、いまだに関東・東海地方の型式との比較が中心的な作業とされている段階にある。土器型式の分類と編年をおこなう作業上の手順として、隣接地域の編年との対比作業が不可欠であるが、中部地方では関東地方と東海地方の編年に準拠した資料の配列が試みられてきた経緯がある。中部地方の編年の集大成的な作業と評価

される「長野県史」における編年案もそうした作業の上にある成果として評価できる（宮下1988）。

しかし、中部高地の当該期において、広域に比較可能な特徴をもつ類似資料のみから構成される遺跡は管見にはない。すなわち広域編年の指標としての資料の存在とその評価には、型式研究の初歩的な作業としては評価されるものの、本来は多様な属性から成り立つ土器群の構成の背景を解明する段階へと将来的には研究の歩を進めることが必要であろう。

中部地方の当該期研究は、関東地方の子母口式の子母口式の併行期では、絡条体圧痕文の存在が一元的に子母口式の特徴と考えられていた段階に、現在では早期終末に位置付く土器群が充当されていた。関東地方における子母口式土器の再検討の段階を経て、それに連動するようにして、従来絡条体圧痕土器群は子母口式とは異なる型式として、その位置づけが大きく変更されることになった。ここにも関東編年に対比する思考方法が潜んでいた。

中部地方における子母口式期の土器群については、筆者は茅野市判ノ木山西遺跡の土器群を比定していたが（阿部1990）、それらの特徴は絡条体圧痕文をもたない他に、文様や形態は子母口式とは異なる部分が多く、関東地方の茅山式の研究の中では茅山上層式に比定された経緯もあった（金子1991）。筆者は中部地方の押型文土器に後続する貝殻沈線文系土器の地域的な変容の中に判ノ木山西遺跡の土器群に連続する系譜を見だし、判ノ木山西式を設定し、年代的には田戸上層式の新しい部分から、子母口式に併行するものと考えた（阿部1997）。

条痕文系土器群初頭の野鳥式期における長野県内の状況は、岡谷市下り林遺跡や北相木村栃原岩陰遺跡などにおいて野鳥式自体の出土が少量ながら認められている。しかし、本来は野鳥式としての特徴をもつ土器以外に、在地的な土器群が主体を占めて存在する可能性が高い。筆者は山梨県富士吉田市古屋敷遺跡の調査報告において、関東地方の野鳥式の相伴する多量の縄文施文土器と無文土器を検出し、それらが関東地方の野鳥式期に併行する中部地方の在地的特徴をもつ土器群であることを指摘した（阿部1992）。さらにそれらは、胎土レベルにおいても検証されている（河西1992）。

そしてその検討作業のなかで類別として岡谷市下り林遺跡において、かつて一括出土した土器を再評価した。下り林遺跡の土器は長崎元広によって検討され茅山下層式に併行する中部地方の一型式として「下り林式」が提唱されている（長崎1884）。しかしそれらに相伴したのは関東地方の野鳥式土器であって、茅山下層式ではない。筆者は相伴事例と略完形に復元された縄文施文土器と無文土器の特徴から、やはり古屋敷遺跡の土器群の様相と酷似する野鳥式期の一型式であると考えている⁽²¹⁾。野鳥式期の状況が関東地方とは全く異なる特徴の土器で構成されているという筆者の型式編年観にたつならば、それに後続する鶴ヶ島台式期の様相も、一元的に関東地方と同一視できない可能性が高いことになる⁽²²⁾（第1表）。

第1表 関東・中部地方における早期後半の土器編年

関東西南部	中部地方	該当遺跡
子母口式	判ノ木山西式	榑塚遺跡
野鳥式	古屋敷遺跡早期第IV群	下り林遺跡
鶴ヶ島台式	村東山手遺跡第III群1・2類	塚田遺跡
茅山下層式	+	下り林遺跡

茅山下層式期の下り林遺跡は、県歴史文化財センター調査分ものを指す。

2 村東山手遺跡出土土器の分類と編年

村東山手遺跡の土器は有文土器と縄文または条痕あるいは擦痕のみの土器から構成され、その中でも有文土器は関東地方の野鳥式と鶴ヶ島台式に比定できるもの（A群）と、条痕あるいは擦痕のもの（B群）、

縄文施文の一群（C群）に分類できる。

A群土器（第1図）

沈線により幾何学的なモチーフを描き、区画された内部に刺突文、あるいは沈線を充填するものであり、文様描線はヘラ状工具による細く深い沈線を施す。これらの中で、口唇部に無文帯をもたない、さらに口唇部に刻みが平坦な口唇部の全体におよぶものは、野島式である（1～3）。

さらに口唇部断面形態が角頭状で、口唇部キザミが角頭状の口縁の端部にのみ行われ、また幾何学文様の描線端部などに凹形竹管文や刺突を施すものは、関東地方の鶴が島台式に比定される（4～15）。両者の区分は微妙な特徴の差異によっているが、これは村東山手遺跡から出土しているこれらの土器群が相互に近接した年代であることを良く示唆する事実でもある。

B群土器（第2図）

縄文を施文する土器をまとめてある。単節の原体（LR, RL）を用いて器面一面に縄文を施文する一群である。注意されるのは、これら一群の内面に貝殻条痕調製の認められるものは皆無である点である。

C群土器（第2図）

本群は器面調製原体によって2分できる（C-I群, C-II群）。

C-I群土器 肋条をもつ二枚貝を原体にしておこなった器面調製痕（貝殻条痕）をもつものである。器面に残された条痕は、幅約4mm前後で断面は波トタン状を呈するが、凹凸の端面は角をもつものが多い。これは二枚貝の腹縁を下にして用いた場合に良く残る痕跡である。こうした器面調製痕は、A群土器の一部の資料の無文部や内面にも残されている場合がある。

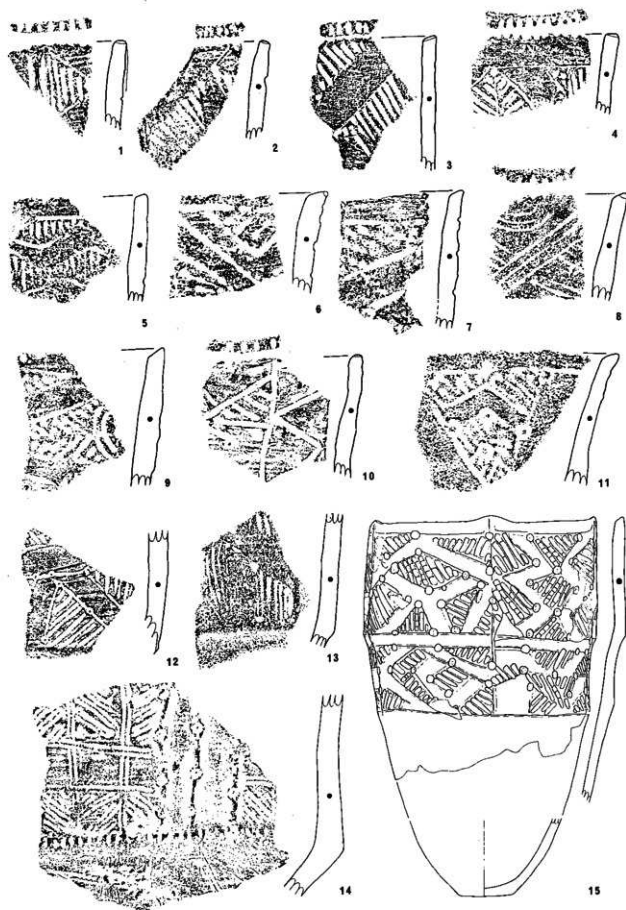
C-II群土器 軟質のおそらく纖維束などで器面調製をおこなったと考えられるもので、器面には不規則な擦痕が残される一群である。これらの調製痕を残すものは胎土中の砂粒の移動があまり顕著に見られない。

3 胎土の肉眼観察

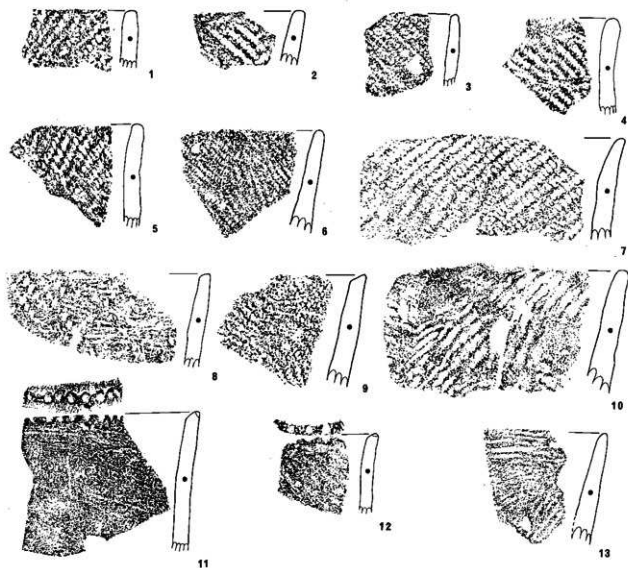
つぎに肉眼による胎土の分類を実施した。なお、本資料群は今後に蛍光X線による産地推定を実施する予定があるので、ここでの観察と記述は、そうした分析に備えたものであると同時に、理化学分析の成果を個別の分析試料にのみ止めるのではなく、全体に及ぼすための事前作業的な意味をもつ。本遺跡から出土した土器の肉眼観察は、器表面とともに破損断面の観察を重視している。なぜならば、器面には先述したように諸々の工具による調整作業がおこなわれており、とくに大粒の岩石鉱物や粒状の鉱物粒子が器体内部に沈降している。そうした場合、肉眼による器表面の観察は十分とはいえないからである。

村東山手遺跡の早期後半土器の肉眼による胎土分類は5のグループに区分できた。一般に中部高地の早期土器は胎土に金色雲母や石英、長石を含むものが多い。こうした特徴は花崗岩帯周辺で、基盤岩体の風化によって生じた、鉱物粒子群と見ることができ。花崗岩体は八ヶ岳周辺から甲府盆地を中心とした地域に存在し、さらに関東地方では筑波山周辺に求められるが、後者は本遺跡からは遠くはなれるために、一応は除外しておくならば、上記の特徴は一応の在地的特徴として設定しておくことが可能である。

なお、肉眼による観察のために、明確な岩石鉱物名を列記できていないが、これも今後の観察によって補いたい。さらに細分の可能性があるが、小論ではその大枠のみを示し今後の成果との突き合わせをおこないたいと思う。



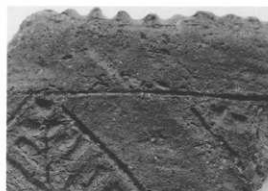
第1図 村東山手遺跡第A群土器 (1~14:1/2, 15:1/3)



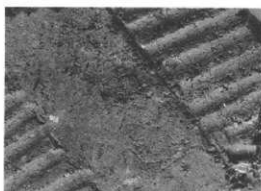
第2図 村東山手遺跡第B・C群土器（1～13：1/2）

第2表 村東山手遺跡早期後半土器の胎土分類

- a群：金色雲母と石英を多く含む一群。両者の表面上の両比によって2つに細分できる可能性がある。
- b群：混入される岩石鉱物の粒径がきわめて小さく、その点のみに注目してもa群とは峻別される。
輝石と白色鉱物粒子を含む。金色雲母は含まない。
- c群：大粒の結晶片岩あるいは滑石片を含み、器面の手触りが滑らかな独特と感觸をもつもの。
- d群：微細な白色粒子（長石か）を多く含むもの。
- e群：灰白色の比較的大形（0.5～1.0mm）の粒子を含む。



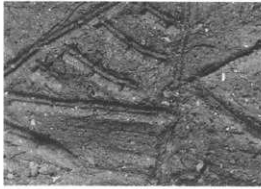
1 ナデ→細沈線→充墳太沈線



2 ナデ→細沈線→充墳太沈線



3 貝殻条痕調整→細沈線→充墳太沈線



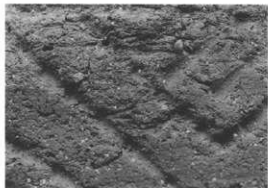
4 ナデ→細沈線→充墳押引文



5 ナデ→襷隆起線→充墳押引文



6 ナデ→細沈線→充墳押引文



7 ナデ→連続刺突文

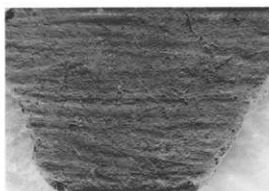


8 ナデ→押引文→充墳押引文

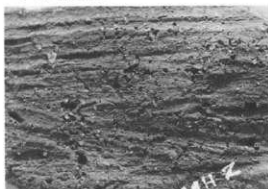
第3図 村東山手遺跡出土の早期後半土器の文様



1 貝殻条痕調整



2 貝殻条痕調整



3 貝殻条痕調整



4 貝殻条痕調整



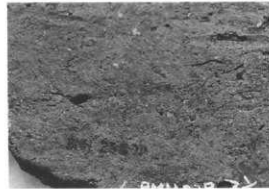
5 指頭押圧→貝殻条痕調整



6 ナデ調整→貝殻条痕調整



7 指頭押圧



8 ナデ調整

第4図 村東山手遺跡出土の早期後半土器の器面調整

以上に示した胎土グループと土器の型式学的な分類の対応関係は以下のようになる¹⁰³⁾。なお、型式分類におけるA群は野島式と鶴ガ島台式に2分されるが、ここでは有文土器としてさらに見方を変えて、未報告分を含めたすべての資料の内面観察から、器面調整痕の比率をみてみると、磨滅したものを除くと40点の資料があり、その中で条痕のものが、32.5% (13点)、ナデおよび擦痕のものが67.5% (27点)となる。

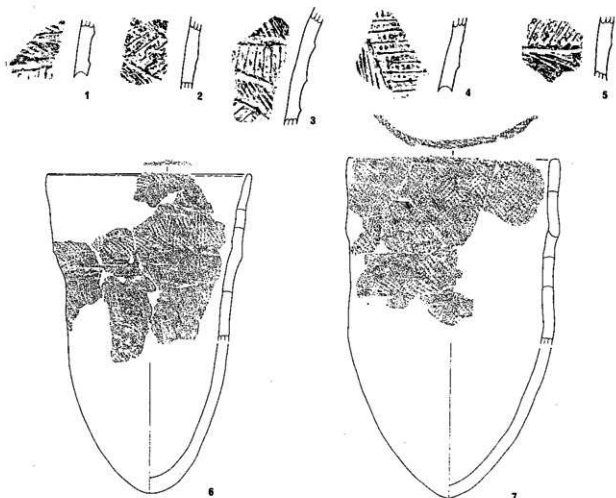
この傾向をみると、鶴ガ島台式が主体を占める村東山手遺跡の土器は器面調整にナデ痕や擦痕を残す手法が一般的であったことが類推される。これらの中には当然、在地的ではない土器が含まれているので、正確な動向は胎土分析が終了した段階で述べることにしても、当遺跡では擦痕やナデ調整が主流をなしていたという指摘はできる。

次に裝飾別の土器組成を観察してみよう。出土した早期後半の口縁部の破片資料は50点である。やや少ないきらいがあるが、これをもとにして算出した有文土器と縄文施文土器および条痕、擦痕土器の比率は、以下の通りである。

第3表 早期後半土器の文様組成率

有文土器 (A群)	68% (34)
縄文施文 (B群)	24% (12)
条痕、擦痕 (C群)	8% (4)
カッコ内は実数	

数値の母数がすくないので、相互の比率の微妙な関係について推測をしても深い意味は望めないが、そうした制約を踏まえた上でも注意されるのは、有文土器と条痕、擦痕土器の比率である。野島式土器や鶴ガ島台式の主体的な分布圏である関東地方の遺跡に目を向けるならば、有文土器と条痕土器の比率は1:9から2:8程度という比率が一般的である。



第5図 山梨県古屋敷遺跡出土土器 (IV区3トレンチ18層上面一括出土)

したがって、実数がすくない中でも村東山手遺跡において観察できた両者の比率は、野島式土器、鶴ガ島台式の両型式の遺跡における在り方としては、関東地方とは明らかに異なるという指摘はできる。

さらに村東山手遺跡の組成比率が、中部高地の他の遺跡においても同様にして認められるか否かという点は、今後この問題を考える上でも極めて重要であろう。またこの問題を考える際に無視できないのは、B群とした縄文施文の土器の存在である。全体の24%あまりを占める本型の在り方も、関東地方とはかなり異なる様相を呈し、とくに野島式期の縄文土器の存在は、関東地方では確実な事例がない。村東山手遺跡の場合も野島式土器と鶴ガ島台式土器の両者の出土があるが、点数が少ないことも手伝って、縄文施文土器が厳密にどちらに組成するものであるのかといった点は、残念ながら明らかにはし得なかった。ただし、筆者らの調査した山梨県富士吉田市古屋敷遺跡（阿部1992）では、野島式の古い部分に共伴した縄文施文土器には段帯部が特徴的に認められた（第5図）。

村東山手遺跡の場合は口縁部以外の資料もすべて観察したが、この段帯部の破片が見当たらない点と、野島式の新しい部分が量的にも少ない状況で出土しているといった事実から、村東山手遺跡において野島式にともなう縄文施文土器は存在しても、本来的には少なかったことが十分に予測される。

このような中部高地と関東地方といった広大な空間に分布した土器群の在り方には、当然のこのように地域的個性が存在し、また反面において類似点が見いだせることがある。土器を型式という概念で括り、相互の関係を比較する場合に注目されるべき点は、この2点の相互関係であるが、土器型式の編年という基礎的な作業では、むしろ共通性の確認による年代的併行関係に注意が向けられるのは、作業の性質上では当然でもある。

しかし、遺跡から出土する土器群の構成はこうした性質を一方において帯びるものの、それが全てではないことも事実である。つまり似ていない部分、あるいは極めて局所的な特徴などが混在しているのが普通であり、遺跡における土器群のまとまりの認識、あるいはその事実から遺跡自体の構造を検討する場合には、後者の詳細な観察が必要になってくる。

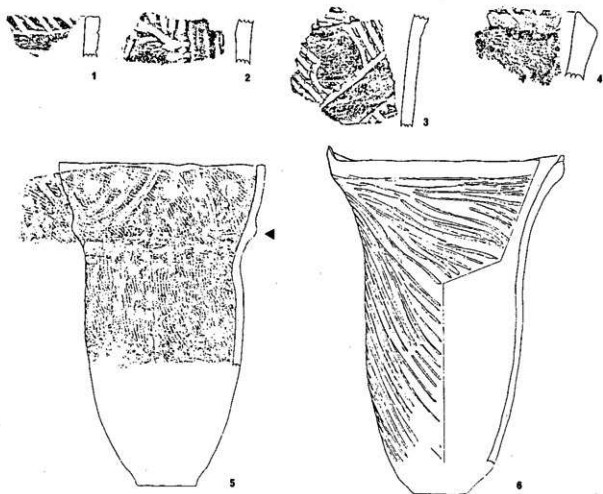
4 中部地方における条痕文系土器群の型式構造

村東山手遺跡の早期後半土器として認められた一群は、いまだに検討を試みたように、関東地方の野島式の新しい部分と鶴ガ島台式の古い部分と考えられた。

中部高地における当該期の資料はいまだに稀少であり、その様相は不明確である⁽²⁴⁾。これは当該期の遺跡の調査例の少なさが関係するが、現時点において僅かながらも断片的ないくつかの資料が存在するのも事実である。それらを瞥見するならば、野島式の古い部分が欠落していることがわかる。さらにまた、静岡県沼津市清水柳遺跡（瀬川1976）など、いわゆる東海地方の地域色をもつ沈線文主体の土器群も不明確である点が指摘できる。

野島式の成立の母体となった子母口式の分布圏から遠くはなれた当地において、野島式自体のあり方も関東地方と一元的に同一の型式分布圏と考えることには、問題がありそうである。中部高地の野島式期についてみるならば、岡谷市下り林遺跡の「ドリ林式」（長崎1984）の位置づけにその定点を求める必要であろうが、筆者はその年代については山梨県古屋敷遺跡の第IV群土器との型式学的な対比と、野島式との共伴関係から、中部地方独自の型式が野島式を共伴しつつも、かなり広く分布するという見解を呈示した（阿部1994）。

村東山手遺跡の土器群の構成は、野島式や鶴ガ島台式の文様を描くA群に加えて、かなり多量の縄文施文土器が存在し、半面で条痕のみの土器が皆無に近い状況が指摘できた。B群とした縄文施文土器と有文土器、そしてC群とした条痕、捺痕文土器の三者から構成される可能性は、本遺跡の土器群を検討した場



第6図 長野県下り林遺跡出土土器

合、かなり蓋然性が高い。また、このことと係わってすでに指摘したように一遺跡に残される「鶺鴒島台式」や「野島式」の大半が条痕調整のみの土器である関東地方の諸遺跡の常態とは、著しく異なる様相を示す点には注意すべきであろう。

B群とした縄文施文土器の高い組成率も村東山手遺跡の土器群の構成として重要である。塚田遺跡において同様の状況を指摘し、B群の系譜を古屋敷遺跡の土器群に求められる可能性を指摘した中沢道彦の見解は重要である。それらの理解によって導かれる中部地方の独自性に改めて注意しておく必要がある。

ところで中部地方では鶺鴒島台式以降、「吉井II群1類土器」(戸田1984, 田中1994)が主体的に分布を広げることが指摘されている。それらの個体の型式学的な特徴については、かなり明確に説明される段階でありながら、関東地方では型式の構成上の「常態」として指摘できる「多量の条痕調整土器の組成」といった特徴が、はたして当該地域においてもあてはまるのか否かという点は、いまのところまったく不明である。

関東地方の土器型式の波及と定着という経過のなかで生じるこうした「型式」の地域性の顕現は、ある特定の土器文様の抽出と比較という作業のみでは、その要因や成り立ちを説明することはできない。

村東山手遺跡において主体をなす土器群は古屋敷遺跡早期第IV群に後続する年代を示し、さらにその構成のなかに、縄文施文土器が一定の比率で存在する事実は、早期後半における条痕文系土器群の地域性の発現の過程として説明することができよう。

5 中部高地における早期後半土器の構成

中部高地における押型文土器以降の土器編年は、いまだに不明確な部分が多いが、筆者は早期後半では関東地方の子母口式の時期には貝殻線文系土器の在地化によって成立する判ノ木山西式（阿部1998）が分布し、野島式期には岡谷市下り林遺跡例によって支持される「古屋敷遺跡早期第IV群」（阿部1992）がこれに後続するものと考えている。筆者自身は判ノ木山西式には新古の別を考えているが、それらの新しい部分を比較してみても、野島式併行の古屋敷早期第IV群土器との間の型式学的な断絶は大きく、系統的な連続が認められない。関東地方の編年を基準にして、これら新出の土器群の年代的な関係を考えるならば両者の間に未命名型式が介在する可能性が極めて低いというのが実情である。

したがって中部地方の当該期編年上における型式相互間の関係は、押型文土器以降、他地域の型式の影響とその在地化の繰り返しによって、いくつかの型式学的な断絶が存在するようである。こうした型式編年にみえる断絶が示唆する当該地域の動向の、具体的な検討は今後に委ねるとしても、ここで指摘しておきたいのは、単なる土器文様の相互地域間の相似や変形という問題におさまらず、型式を構成する器種あるいは装飾の系列を異にする形態間の組成の問題や、各系列毎の個性的な変化の実態の解明が、土器型式という概念の枠組みで分別される個々の土器群の成り立ちを明らかにする重要な視点となることである。

こうした視点にたつ場合、全体のうちの一部の個体に認められる共通する、あるいは画一的な文様の類比にのみこだわるべきではなく、共存する複数の系列の相互関係の解明が重要な問題として現実化する。残念ながら糸痕系土器群の編年的な研究の中心地であった関東地方においても、こうした視点の分析成果の蓄積は果たされていない。

しかし、多くの事例の瞥見から、関東地方では野島式や鶴ガ島台式には文様のある土器に倍する多量の糸痕調整の土器が伴うことが通例である。現段階のこうした所見に照らしてみても、縄文土器の存在や、有文土器の高比率なあり方から、中部高地の当該期土器群の構成上の特徴が指摘できるであろう。A～C群に大別した異なる分布と承継をもつこれら3類型の土器群の共存という現象の説明が、当該地域の型式の構造の理解につながるものと考えられる⁽²³⁾。

また、鶴ガ島台式の有文土器において、器体の貝殻糸痕調整とナデ、繊維混入の度合いという観点からみたときに器面の貝殻糸痕調整技術の運用と繊維混入の度合いには明らかな相関関係が認められる一群と、これとは反対にナデ調整技術の多用と、繊維混入の低率な相関関係によって分類される多量の土器群に二分できる。こうした状況から、胎土調整における土器製作伝統の差異に基づいた複数の製作伝統を担った集団が、本遺跡の土器群の構成に加担した可能性が考えられる。

つまり、関東地方の鶴ガ島台式有文土器と同一、または近似した製作伝統下で製作された鶴ガ島台式有文土器群（Aグループ）と、微量繊維の混入とナデ調整技術によって製作される鶴ガ島台式有文土器（Bグループ）と凶式化できる。こうした関係は、少量のAグループと多量のBグループという組成比率とも深い関係を示している。理化学的手法による胎土分析を実施したわけではないが、Bグループは多量の金色雲母を含有する点においても、両者は産地を異にしており、さらにその胎土の岩石鉱物の示す空間的な関係は、在地的なBグループに製作伝統の異なったAグループが搬入された形で共存していた状態が予測される。

この推測と理解の前提に立った場合、鶴ガ島台式有文土器Aグループが製作された地域では、先に指摘したように、かなり多量の糸痕調整のみで文様をもたない土器が製作されていた可能性が高い。村東山手遺跡の場合、無文土器のなかで糸痕調整のものは25パーセントを占めている。これらの糸痕調整の無文土器は鶴ガ島台式有文土器Aグループの故地から共に搬入されてきた可能性が高い。

中部高地にいかなる背景をもち鶴が島台式有文土器Aグループが持ち込まれたのかは不明であるが、そうした結果が当地において鶴が島台式有文土器Bグループの成立を導く要因となったことは想像に難くないし、鶴が島台式有文土器Aグループと条痕調整深鉢が共に当地域に持ち込まれ、そのなかで鶴が島台式有文土器Aグループのみが模倣の対象となったという仮説が、村東山手遺跡の土器の組成からは指摘できる。

鶴が島台式有文土器Aグループが持ち込まれた時点の、当地の在り土器がいかなる特徴をもつのかという点については、古屋敷遺跡早期第IV群土器の系譜を伝える土器が、その候補に上がるが、本遺跡においてその存在は単節縄文施文の深鉢形土器にほぼ限定されてくる。同様な「組み合わせ」は御代田町塚田遺跡(中沢1994)においても指摘されており、今のところ蓄積されつつある資料では佐久方面との様相の類似が認められる。

ある一定量の関東地方の型式の搬入を伴うという現象は、中部地方の早期後半においては、かなり広域に、そして通有に認められる現象である点は注意を要する。それらの流入の要因はひとまず置くとしても、ある意味では当該期のいわゆる「茅山系土器群」が広域に運動した型式変化を引き起こす仕組みのなかで、こうした変化の媒介としての機能をもつ土器を招来した行為の意義は、こと土器型式の変化と地域間の関係において、小さくはなかったはずである。

恒常的な搬入と模倣が制度的な側面をもちつつ繰り広げられた中部高地の早期後半土器群の中で、鶴が島台式期はいまだにその模倣が有文土器に限定されているらしい点は、現時点で推測が許されるひとつの特徴ともいえる。有文土器の影響は野島式期の古屋敷遺跡においても確認できる。こうした関係に「ゆらぎ」が生じ、独自の型式要素の生成または変形が進行する過程が鶴が島台式後半にその出自が想定される「吉井第2群1類土器」の成立の過程でもあるのだろう。

関東地方の条痕文系土器群の型式構造が、多量の無文土器を組成している事実は中部高地の当該期の様相とは構造的に異なる現象であり、その意味では有文土器に認められる共通性のみを評価点として中部高地を関東地方の鶴が島台式土器の同質的な分布圏に含めて理解するには問題がある。いわゆる縄文土器のもつ地域性の顕現の一形態として、中部地方の動向を考えるならば、さらに多様で複雑な地域性が内在することが予測されてくるが、そうした問題の展開は中部高地の早期社会の構造的な特色を解明するために意味のある研究である。

なお、冒頭でも述べたように、本遺跡の早期後半土器は理化学的な手法によって胎土分析を実施する計画がある。現時点においては蛍光X線分析の基礎的なデータの回収を終えた段階であり、今後産地の推定分析を実施する予定である。本論でのべた土器群の型式学的特徴と肉眼観察による胎土分類と、そこから得られたいくつかの仮説については、この分析の成果をふまえて再度検討し、別論にてその成果を公表したいと思う。また胎土の理化学的検討の基礎分析の段階で明治大学文化財研究施設の機器を利用した。記して御礼申し上げたい。

註

註1 下り林遺跡でこれらの土器に共伴した土器には茅山下層式土器は1片も含まれず、共伴したのは野島式土器である。また復元された2個体の土器は、理文のクセや沈線の施文原体などの諸点において、茅山下層式土器とはまったく異なる特徴の土器である。散えて類似している特徴をあげるとすると、欠損した部分を復元した平底と、縄文施文土器の有段部であるが、それとても茅山式に比定するには、まったく根拠に欠けている。

註2 この問題については中部地方の押型文土器以降からの編年の課題として別論を用意している。

註3 土器の胎土や器内調整手法といった問題は、事実記載では一般であるものの、型式論ではほとんど注意されていない観点であ

る。またこれとは逆に、理化学的手法による分析は産地推定に偏重に偏向している。果して全体の1%にも満たない量の土器の産地推定の成果が総合的な評価に読み変えられる場合に、いかなる作業がなされているのであろうか。この問題は両者の研究の関係を考える時に看過できない。この問題については後日に具体例をもって述べる予定がある。

- 註4 中部高地における早期後半の遺跡は関東地方に比較して少ない。また遺構の検出も限られている状況であるので、遺跡単位に土器組成率などを換算していく作業は今後の調査に委ねられることになろうが、その際には型式比定に終始するのではなく産地や製作技術の検討など多角的な検討が必要となる点を指摘しておきたい。
- 註5 中部地方では今回検討したように、関東地方とのあいだに共通性をもつ群と在地的な特徴をもつ群から構成されている。その視点にたった場合、逆に関東地方の土器の構成が一元的に見えてしまう思考上の錯覚にとらわれがちなるが、事実にはたしてそのように単純であろうか。村東山手遺跡の土器群の構成の理解の視点は関東地方の土器型式の構成自体も再検討の時期が近いことを予測させる。

引用参考文献

- 阿部 芳郎 1989 「第II群4類土器の型式学的検討」『半蔵窪遺跡調査報告書』半蔵窪遺跡調査団
- 阿部 芳郎 1990 「早期第IV群土器の型式学的検討」『古風敷遺跡発掘調査報告書』富士吉田市史編纂室
- 阿部 芳郎 1998 「利ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年」『押型文と沈線文 本編』
- 岡本 勇 1957 「茅山貝塚」横須賀市立博物館館報（人文科学1）
- 岡本 勇 1959 「三浦市鶴ヶ島遺跡」横須賀市立博物館館報（人文科学6）
- 岡本 勇 1982 『縄文土器大成1』早期・前期一関東地方一 講談社
- 恵田 勇 1997 「神奈川県における沈線文土器後葉期の一様相」『押型文と沈線文 本編』
- 金子 直行 1992 「子母口貝塚資料 大口板貝塚資料」奈良国立文化財研究所
- 金子 直行 1991 「茅山上層式の再検討」『埼玉考古学論集』
- 小林 康夫 1985 「堂の前・福沢・青木沢」塩尻市教育委員会
- 小林 秀夫 1981 「長野県中央遺跡縄文文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3 利ノ木山西遺跡」
- 佐々木克典 1980 「IV 考察」『神谷塚』II
- 杉原 莊介 1957 「神奈川県夏島における縄文早期初頭の貝塚」明治大学考古学研究室
- 瀬川裕一郎 1976 「清水柳遺跡の土器と石器」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1
- 関野 哲夫 1980 「鶴ヶ島台式土器編分への覚書」『古代探叢』
- 関野 哲夫 1985 「茅山下層式について」『古代』80
- 田中 総 1994 「中部高地周辺における縄文早期後半土器群の一様相」『中部高地の考古学』IV 長野県考古学会30周年記念論文集 長野県考古学会
- 長崎 元広 1984 「長野県興谷市下り林遺跡の早期縄文式土器」『長野県考古学会誌』第48号
- 戸田 哲也 1984 「VII まとめと考察」『大入遺跡発掘調査報告書』
- 西川 博孝 1981 「縄文時代の遺構と遺物」『新東京国際空港埋蔵文化財報告書IV』
- 宮下 健司 1988 「II-2-(3)縄文早期の土器」『長野県史』考古資料編 全1 巻四
- 中沢 道彦 1994 「塚田遺跡出土早期土器群について」『塚田遺跡』御代田町教育委員会
- 百瀬 忠幸 1988 「八塚遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2

第2節 村東山手遺跡出土の堀之内2式土器の型式学的検討

阿部 芳郎

要旨

本論は村東山手遺跡の縄文時代後期前葉土器群の型式学的な検討をおこない、さらにこれを周辺の遺跡の資料と比較して、中部高地における堀之内2式土器の細分を試みた。

その結果、村東山手遺跡の土器群は堀之内2式の初頭の特徴を良く示し、さらに後続する段階の土器群を含んで構成されており、集落の主体的な形成時期は堀之内2式前半期にあることを指摘した。

また、村東山手遺跡に後続する段階の土器群を示して、都合3細別の型式変遷によって中部地方の堀之内2式土器の成立と変遷を説明した。これらの細別は遺跡内の段階分類を基本にしつつも、広く関東地方の堀之内2式土器の細別とは併行することを明らかにして、中部地方の堀之内2式の細別をおこなった。

そして、今後の課題として堀之内1式期終末段階の土器型式の構成を北陸北半の土器型式の影響関係を視野に入れて検討すべき点を指摘した。

キーワード：堀之内2式土器 南三十稻場式土器 型式編年 中部地方

はじめに

村東山手遺跡からは堀之内2式期の住居が9軒発見されている。それらは土坑や遺構外の遺物集中区の形成とともに、調査区内において意味のある分布を示し、当該期の集落構造を考える上で興味深い事例である。それと同時にこれらの遺構や包含層から検出された堀之内2式土器は、質・量ともに豊富であり、当該地域の堀之内2式土器群の成立を知る上で重要な資料である。関東地方を中心に論じられることが多い堀之内2式土器の細別問題も、いくつかの課題を山積させている。そのなかの主要なひとつが成立時点の実態の解明である。筆者自身もこの問題に関しては、拙論（阿部1988, 1998）において触れることがあったが、特に西南関東において安定的に分布する磨光縄文系土器の生成の背景については、いくつかの推論を行ったものの、なお良好な資料が少ない状況も手伝い、明確な持論を持ちえていない¹⁰⁰。

堀之内2式の成立段階の状況は、その直前段階にあたる堀之内1式終末の土器群からの変化を視野に入れて検討する必要がある。村東山手遺跡の土器群の中には当該地域の堀之内2式の成立を考える際に興味深い資料が存在する。ここでは本遺跡の堀之内2式土器の型式学的な検討をおこない、同時に中部地方の堀之内2式土器成立の背景について考察する。

本論の土器群の分析方法を先に述べておこう。まず、遺構内から一括で出土した土器は、型式学の上での同時性とは捉えない。しかし、住居が廃絶された時期から埋没の過程のあいだの一定の時間幅の中で廃棄されたものであるという認識にたつて、豊富な個体を出土した住居を単位にした型式分類を実施し、村東山手遺跡内部での時期区分をおこなう。そしてその結果に得られた型式学的なまとまりをもつ土器群を「段階」と呼称する。

つぎに村東山手遺跡の段階区分の妥当性を確かめるために、周辺地域の遺跡との比較を行い、そこに有意な共通性または型式学的差異を認めうる場合に、これを細別型式と認定し、さらに広域な地域の資料との比較を行いたい。やや煩雑で段階的な分析方法を取って説明する理由は、当該期の土器型式研究が、一番はじめの「段階区分」か、あるいは最後の広域な範囲での完形個体の類似例の収集に終始し、これを

もって土器型式の細別としているものが多く、さらに「段階」と「型式」の概念上の区分がきわめて曖昧なものも多く目にする点を憂慮するからである(阿部1996)。

土器型式の認定の基本は遺跡内に意味のある単位で存在する土器群が比較の単位とされるべきであって、完形土器の収集と閲覧ではない。そうであっても、当の遺跡自体の復元に、土器型式研究はあまり多くの関係を持ちえないことになる⁽⁴²⁾。また型式という概念に当てはめる作業と、型式という概念を実態として詳細化する作業を成し得なくては、土器の型式構造に理解の進展は望めないだろう。

1 村東山手遺跡出土土器の堀之内2式土器の段階区分

本遺跡から出土した後期の土器は、堀之内2式期を主体として、堀之内1式と加曾利B1・2式土器が若干存在する。主体を成して検出された堀之内2式土器は、近年の細分案(石井1984, 小川1984, 阿部1998)などにおいて、ほぼその前半段階に対応するものと考えられる。ここでは従来の細分案には沿ったかたちで、本遺跡の土器群を分類し、その結果、村東山手遺跡の堀之内2式を2段階に区分した。以下にその特徴を説明する。

(1) 村東山手遺跡第1段階(第1図)

良好な一括出土事例であるSB10出土の一群を基準とする。深鉢A類は遺存の良好な個体が3点存在する。

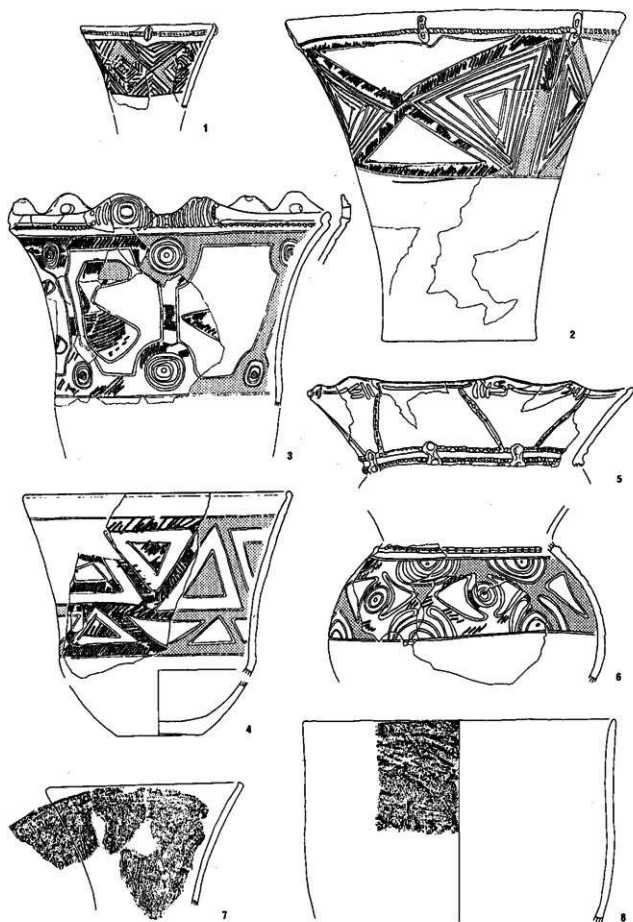
1・2は朝顔形の深鉢であり、胴部文様帯には幾何学的なモチーフを描いている。1は菱形を基調にしており、基本的には二本の沈線によってモチーフを描いて内部に縄文を充填する。そして空白部には沈線を重ね描いており、こうした特徴は総じて古い段階の特徴でもある。2もほぼ同様の構成をもつものであるが、縦位の区画がある点が異なる。しかし、三角形の区画内に重三角文を充填する特徴は1と一致している。

1・2の個体に見られる磨消縄文の特徴としては、モチーフが幾何学的な構成をもつという点と、文様帯の上下を区切る部分にある種のクセが認められる点が重要である。すなわち、1の胴部文様帯の上下区画は1本の沈線によっており、さらに2も上端部は口縁の紐線文が区画線の役割をもつ構成をとる。堀之内2式の磨消縄文(山内1939)は本来は2本の沈線によって区画された内部に縄文を充填することによって成立するものであるが、文様帯の上下区画部分にこうした不連続な部分が残されるのは、堀之内1式土器のそれと一致している。したがってこうしたクセは堀之内2式の成立段階の特徴といえるであろう。

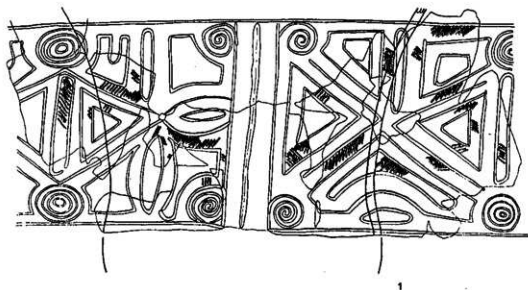
第1図3・4は胴部下半に緩い屈曲をもつ深鉢である。4は上下2段に連なる連続三角文を描く。3は文様構成が異なり、文様帯の上下に配置された同心円文を連結するような垂下文様が描かれ、さらに空白部分には縄文を充填する。文様の系列は異なるが、両者に共通するのは、広い空白部分に縄文を充填する点である。

口縁には刻みをほどこした隆線が周回するものと、そうでないものの二者が存在するが、3の紐線は1・2とは特徴が異なる。3の口縁には2個1対の突起が付くが、この突起間を連結するように一条の太い沈線が周回しており、この沈線の下端の突出部分に刻みが施されている。口唇部に周回する1条の沈線は、おそらく堀之内1式の口唇部文様帯の沈線に系譜がつながるであろう。そしてまた、中部地方では堀之内1式の段階でこの沈線の下端部に刻みを施す資料が多い。こうした状況を考えるならば、堀之内2式土器の口縁部の紐線の系譜が堀之内1式土器の口唇部文様帯に求められる可能性が高いということになる。

5・6は深鉢B類である。5は口縁部のみが残存するが、口唇部に突起をもち、相互を連結するように



第1図 村東山手遺跡SB10出土土器



第2図 村東山手遺跡SB14出土土器

して一条の沈線が周回する。本来ならばこうした口唇部沈線は堀之内1式の特徴でもあるが、5は口縁断面面形が外面に肥厚することがなく平滑である点から、こうした形態の口唇部文様帯は、堀之内1式期の承譜をとどめつつも堀之内2式初頭になお残存するものと考えたい。同様にして堀之内2式初頭にこうした沈線が残存する東関東地方の堀之内2式の実態については、かつて紹介したことがある(阿部1998)⁽⁴³⁾。6は胴部であるが半円形または同心円形の主文様を配したものであり、縄文が充填されている。文様帯中位の同心円文が主文様となり、これが充填部によって表現される点が堀之内2式の特徴である。また3と同様の文様構成をもつものにSB14出土の資料がある(第2図)。この個体は文様帯の上下を1本の沈線によって区画する古い特徴を残し、さらに胴部文様を縦位に区分する無文帯が存在すること、その内部に縦位の隆線が施されている点などは、堀之内1式の深鉢の胴部文様帯の特徴を残存させるものであり、SB10-3と共に注意を要する。

7は朝顔形の深鉢A類と同一の形態の深鉢である。中部高地ではこうした精製土器の素文化が堀之内2式以降には顕著になる。8は無文の深鉢で7とは形態が異なり、大型でもある。両者を比較すると無文のいわゆる粗製土器であっても、いくつかの系列があるらしいことがわかる。

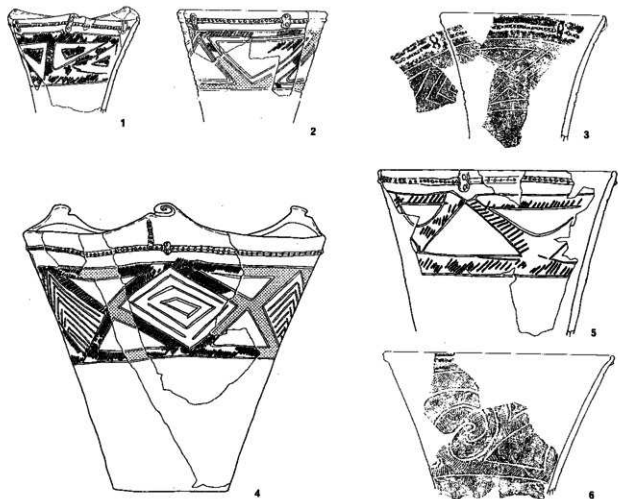


第3図 村東山手遺跡SB10出土土器

描く点であり、2・3などは斜位の沈線を充填するクセがある。これらは北陸北半地域に分布する南三十稲場式に比定できるであろう。

北陸地域の堀之内2式併行期の実態もいまだ不明確な点が多いため、北陸地域については別個に検討

第3図1～3は中部高地では異系統土器に含められる。朝顔形の深鉢であるが、口縁付近がやや外反の度合いを強めるもので堀之内2式の深鉢A類とは形態的にも異なる。2は口唇部に一条の沈線を周回させる。1はそれが不明確であるが、3点のすべてに共通するのは、胴部文様を太い沈線によって



第4図 村東山手遺跡SB08出土土器(1)

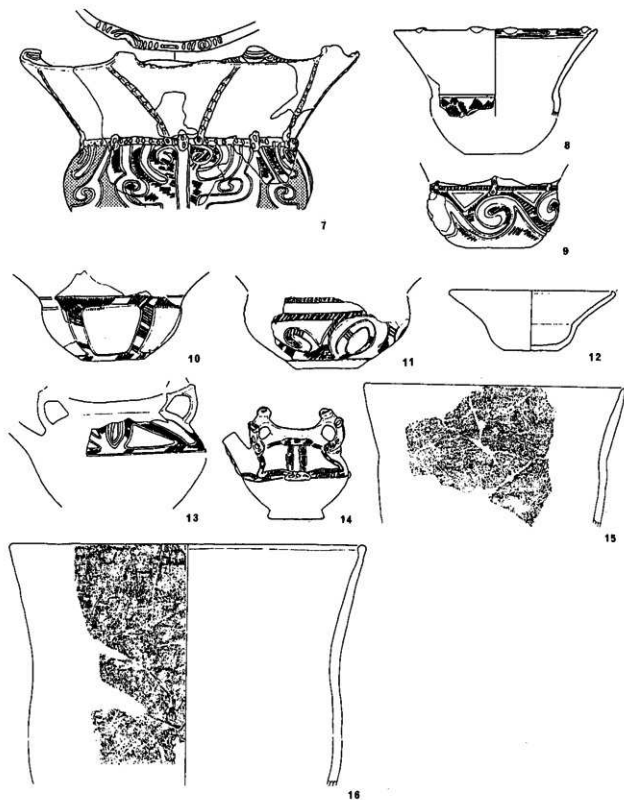
を要するが、本住居における堀之内2式古段階との共伴は、広域編年の鍵的な役割をもつという点でも重要であろう⁽²⁾。

(2) 村東山手遺跡第2段階

SB10に後続するのはSB08の一群である(第4図)。深鉢A類は幾何学文の系列と曲線文の系列が存在する。幾何学文の系列では縦区画の消失と第4図4のように空白部に充填される沈線が疎らになる。本住居から出土した幾何学文系列の土器で充填沈線をもつものは本例のみであった。

主体を占めているのは三角文の系列(1~3・5)であり、全体の資料の中でも極めて安定している。これらの文様帯の上下の区画も2本沈線による磨消縄文帯によっており、構成が画一化している点も前段階とは異なる。

曲線文の系列では横位に連結した渦巻文があり、二本単位の沈線によって流麗にモチーフが描かれていて、縄文の充填も画一化している。破片資料も観察すると少量ではあるが、両系列において、主文様間にはパネル状の縄文部が設けられているものがある。総体としては、充填沈線やパネル状表出など、主文様間の空白部分の処理方法の退化的な様相が指摘できる。第一段階の口唇部文様帯の特徴のひとつとして指摘した口唇部沈線に施された刻み手法は、この段階では完全に消滅しており、「8」字貼付文を施した刻みを施した隆線となっている(第4図1~5)。



第5図 村東山手遺跡SB08出土土器(2)

7～12は深鉢B類である。大型のもの(7)と小形のもの(8～12)といったように、サイズに極端な違いが認められる点には注意する必要がある。

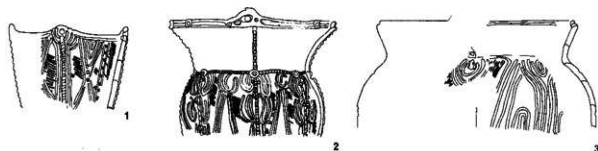
7は頸部の区画と口縁部から「V」字状に垂下する隆線をもつ。胴部下半を欠損しているが、おそらく下部端は区画しないで開放するであろう。大形の一群にはこの文様構成が多く認められる傾向がある。7の胴部文様構成は頸部の隆線に貼付された「8」字貼付文の下に縦位の区画が対応しており、基本的にはこの無文部分が胴部文様帯を縦位に区分しており、その間に入り組み文を描くものが一般である。

これに対して、小形の一群(8, 9, 11)は横位の連結文様を主体としており、文様を縦位に区分する基軸線が本来存在しない。これは時間差というよりも系列差と捉えた方が良いだろう。さらには全く文様の失われたもの(12)がこの段階以降に出現してくるのも、以後の変遷を見通す場合には見逃せない特徴である。

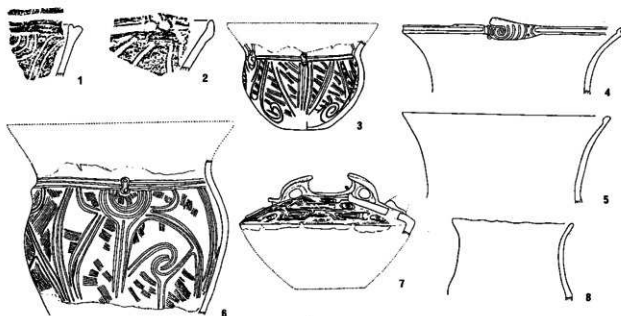
中部地方ではこの器種の盛隆が特色の1つとされているが、その大半は小形のものである。本遺構から小形の深鉢B類の出土が目立つのは、こうした動向を反映したものと捉えられる。反対に第1段階の指標としたSB10では破片を含めても小形品の存在が低調である点は、この予測を保証する現象かもしれない。

2 村東山手遺跡の段階区分と型式の細別

村東山手遺跡の土器群の型式学的な検討を豊富な個体を出土した2軒の住居の比較からおこなったが、



第6図 長野県川光房遺跡14号住居址出土土器

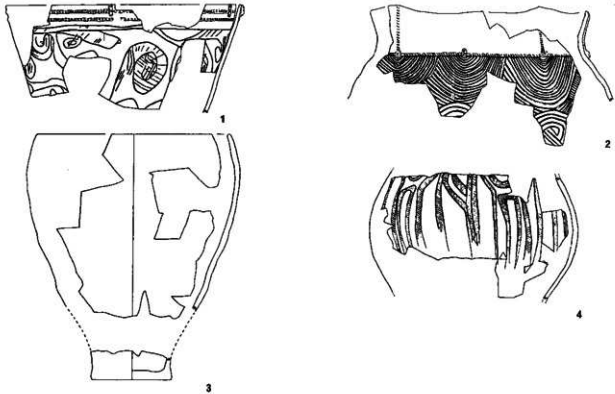


第7図 長野県平石遺跡第15号住居址出土土器

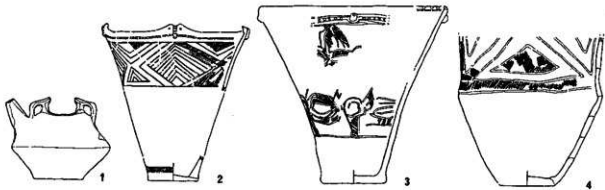
両者には相互に関連しながらも、いくつかの差異が認められた。そしてそれらは、相互にまったく関係しない特徴ではなく、ある一定の方向に向かう変化の線上において位置づけられるものである。したがって、両者は年代的には連続するものであって、かつ相互に区別される可能性が高い、ということが予測できた。

村東山手遺跡における段階区分を他の遺跡と比較検討してみよう。そして村東山手遺跡の土器群に特有の特徴と、堀之内2式土器の特徴のなかで村東山手遺跡には認められない、あるいはその変形として説明できる要素についても、前後の土器群を比較することによって検討する。そうすることによって、村東山手遺跡の土器群のもつ堀之内2式の中での位置について説明することが可能となるであろう。

村東山手遺跡第1段階に先行する土器群は円光房遺跡14号住居址の一群（第6図）と平石遺跡第15号住居址の一群がある（第7図）。ともに住居址内から出土した資料であるが、深鉢B類が多い反面、深鉢A類は少ない。円光房遺跡第14号の深鉢A類（1）は、縦位の隆線や空白部分に縄文を充填する特徴から堀



第8図 長野県宮の本遺跡敷石住居址出土土器



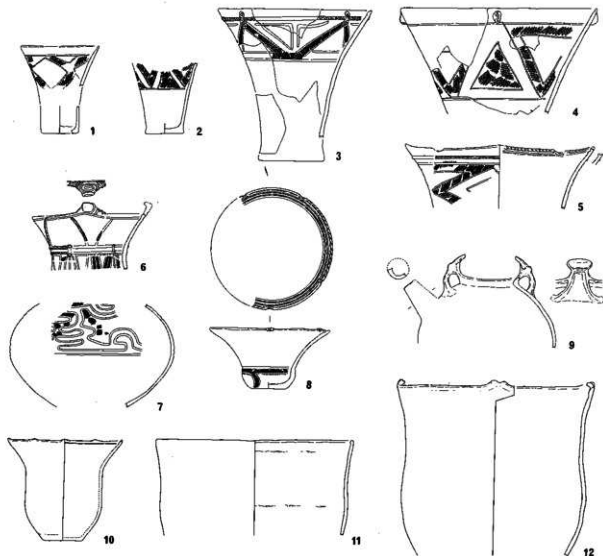
第9図 長野県御堂垣外遺跡第3号住居址出土土器

之内1式の後半段階に相当する。これに伴った深鉢B類(2・3)は、口唇部沈線をもち口縁断面形態が「く」字形に内折している。頸部の垂下する隆線が胴部文様帯にまで貫入して胴部文様の縦区画を成している点は村東山手遺跡第1段階に系譜が繋がる特徴である。しかしこれ以外の部分にも垂下隆線が配されるのは堀之内2式には見られない。深鉢B類の文様描線は太く、堀之内2式の沈線とも異なる。

平石遺跡15号住居址の土器群の深鉢B類は文様描線が細く、より堀之内2式に近い。またこの住居では1点の注口土器が相伴しているが、その文様は堀之内2式の古い部分に酷似しており、型式学的な判断は微妙である。ただし縄文充填部分の相互の連結の不十分な点が2式とは異なる。以上の検討を整理するならば円光房遺跡と平石遺跡とのあいだには時間的な前後関係が考えられるであろう。

村東山手遺跡第1段階に併行するのは、宮の本遺跡敷石住居址出土の土器(第8図)と、御堂垣外遺跡第3号住居の土器が対応する(第9図)。宮の本遺跡の深鉢A類(1)はモチーフの構成が曲線の系列にありながらも極めて不定形であり、また二本単位の縄文充填部の形成が認められず相互の沈線が癒着している部分が多い。これは関東地方の堀之内2式の初頭に見られるクセと同じである。深鉢B類には沈線により重弧文を描くもの(2)と磨消縄文の系列(4)が存在する。

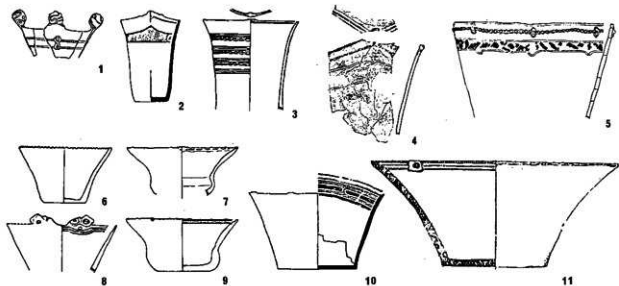
御堂垣外遺跡の深鉢A類(第9図2, 3)は共に胴部文様帯の上下の区画が一本の沈線により行われ、



第10図 長野県林山腰遺跡第4号住居址出土土器



第11図 長野県坪ノ内遺跡第490号土坑出土土器



1: 坪ノ内 2: 徳久利 3-6-9: 千鹿頭社 4: 茂沢南石堂 5: 古屋敷C 10-11: 東原

第12図 埴之内2式集成図

これは村東山手遺跡第1段階の特徴でもあった。2は幾何学文系列であり、縄文の空白部分に沈線を充填する手法も村東山手遺跡に類例がある。なお幾何学文系の文様の空白部分に充填される沈線は、古い段階では御堂垣外例(第9図2)のように菱形の空白部に「へ」字状沈線を重ねるものが多い。これが新しくなると、磨消縄文の外形を録取るように三角形や菱形の図形をパネル状に重ねる沈線に変化する。

村東山手遺跡第2段階に併行するのは林山腰遺跡第4号住居址の土器である(第10図)。比較的豊富な深鉢A類を見るならば、幾何学文の系列は空白部分に沈線を充填する手法は途絶え、かわりにパネル状に区画された内部に縄文を充填するもの(4)が出現する。

深鉢B類は良好な個体がないが、この段階から小形品が増加して、胴部の縮小して外反する頸部が発達するような形態変化が顕著になる(8)。また無文の深鉢は胴部上半が外反する形態のもの(10・12)と直胴形のもの(11)の両者が存在し、前者は口縁に小さい突起をもつものなどがあり、その特徴は深鉢B類土器に近似している。これは深鉢B類が素文化することによって成立した無文土器の系列と考えられる。

村東山手遺跡第2段階に後続するのは、県内においてはいまのところ一括出土例に乏しい。坪ノ内遺跡490号土坑の土器は破片資料であるが、若干の前段階の混入を差し引くならば、村東山手遺跡第2段階より後出的な要素をもつ(第11図)。すなわち胴部文様の幅狭化とパネル状表出の消失や口縁の紐線の多

条化といった点が区分の主な指標となるだろう。これに併行する個体資料を第12図に集成した。

深鉢A類は胴部文様の帯状化が顕著であり(1~5)、帯縄文の代わりに連鎖状沈線が出現する(3)。また深鉢B類では大形のものが増減する一方で、小形ものが増加し、それらは胴部文様を欠失したり(6・7・9)、さらに胴部の膨らみが直線的になり、退化するもの(6)なども出現し、器種構成も前段階に比較して変化する傾向が指摘できる。

すなわち深鉢B類の減少と形態変化である。これにかわって出現するのは浅鉢形土器であり、それは加曾利B1式土器へと連続する。この器種は関東地方においても堀之内2式土器に直接的な系譜を求めることが難しい。取えてその対象を推測するならば、先述した深鉢B類の形態変化と胴部文様の無文化が関係するであろう。なお明確な共伴事例は少ないが、この時期にも無文の深鉢が共伴し、これは加曾利B1式にまで継続して、中部高地の後期の粗製土器として顕著な地域性の指標となる。

3 中部地方の堀之内2式土器の広域対比

(1) 関東地方との対比

関東地方の堀之内2式土器について、かつて筆者は出土例と土器自体の型式学的な観察から東部と西南部との間に初期を中心とした地域差を認めつつ、3細分した(阿部1998)。筆者の堀之内2a式は磨消縄文の確立をめぐる東西に顕著な地域差を示すが、2b式以後にこうした点の地域差は次第に薄れ、磨消縄文について限定するならば、2b式における充墳沈線とパネル縄文の消失、2c式において胴部文様の横帯化と口縁内文の発達などが目安となる。こうした変化は遺構単位の土器の出土状況や層位的な出土状態の検討においても確認できる点から、これを細別型式として提唱したのである²⁵⁾。

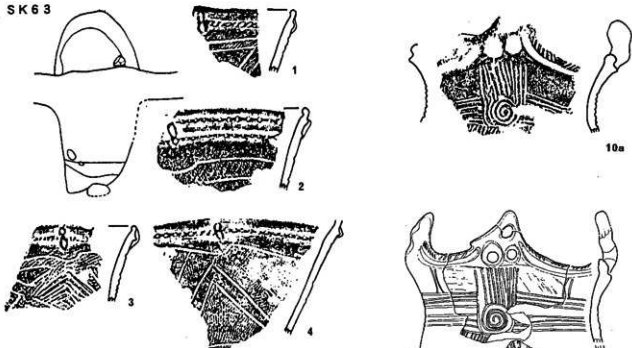
関東地方の堀之内2式土器の分類に村東山手遺跡の段階区分を当てはめた場合、第1段階は堀之内2a式に併行するであろう。ただしこの型式は関東地方内部においても、地域差が大きく、村東山手遺跡の場合は関東西南部の2a式と対比されるべきであろう。西南部の堀之内2a式の成立については、神奈川県上土棚遺跡の報告において触れたように、胴部文様の上下区画の一本沈線や、充墳沈線、パネル状文などが比定の基準になる(阿部1998)。

第2段階は村東山手遺跡SB08の資料を主体としたもので、類似例として林山腰遺跡4号住居の土器群を掲げた。村東山手遺跡SB08の中には間隔のあいた充墳沈線やパネル状の手法が2個体残存している。これらを型式学的には差し引いた場合、林山腰遺跡4号住居に見られるようにパネル手法の退化・消失する段階が中部地方にも西南関東地方と同様にして存在することが指摘できるであろう。したがって村東山手遺跡第2段階の様相は、2a式の特徴を一部に残存させるが、2b式の成立を示唆するものとして考えることができる。本来、遺構一括出土土器と土器型式の細別との関係は、前後の段階が混入または混在することが一般的であるので、村東山手遺跡SB08の土器群も堀之内2b式を主体としながらも、一部に2a式を混じえる土器群と説明するのが正しいであろう。

第2段階に後続する土器は坪ノ内遺跡など、遺構内出土例にまだ恵まれないが、個体の型式学的な特徴は先述した第1段階、第2段階のどちらにも属さないで、しかも型式学的には後出の一群である。この段階の存在を推測するならば、相互の間に過渡的な様相をもつ土器は存在するものの、中部地方の堀之内2b式は、基本的には都合3つの細別型式の連続から成ることが説明できる。

第3段階ともいべき土器群は、関東地方の茨城県上高津貝塚第XIV22層出土土器に対比されるであろう。本段階は中部地方における加曾利B1式の成立を考える場合に重要であり、さらにまた無文浅鉢や深鉢B類の消失、無文深鉢の増加など当該地域の独自の器種構成の成立を考える際に受け皿的な様相を整える時期といえる。

SK63



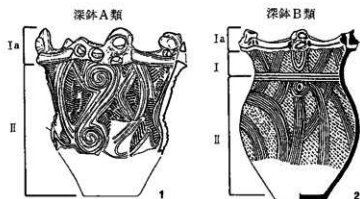
SK65



第13図 村東山手遺跡出土の南三十稻場式土器と堀之内2式土器

(2) 北陸北半地域との対比

村東山手遺跡では関東地方以外の地域との関連を示唆する資料も出土している点は重要である。とくに良好な出土状態として注意されるのは、SK63とSK65である。この2基の土坑からは、村東山手遺跡第1段階を主体とした堀之内2式土器が出土しており、その埋没時期が想定されるが、これらと共に2基の土坑からは同一個体の南三十稻場式土器が出土している(第13図)。



第14図 南三十稲場式の器種 (阿部1989)

堀之内2式の深鉢B類に類似した文様帯構成をもち口唇部には太い沈線が周回し、その上部に鋸歯状沈線が施されている。口縁の波頂部には貫通した孔がある点も南三十稲場式土器の特徴を良く示している。胸部は縦位の渦巻文が複数の沈線によって描かれており、その外枠を縁取るように列点が施される。こうした特徴は、以前に筆者が指摘した南三十稲場式の深鉢B類 (阿部1989) に対比され

るものであり、さらに相伴七器から堀之内2 a 式に併行するものであることが明確である (第13図)。

筆者は、南三十稲場式は堀之内式の後半段階に併行するもので、その変遷を考えるために2細別を考え、さらにその系統は堀之内2式期においても継続するという指摘をおこなったが、本例は堀之内2 a 式期の事例として注目されることである。

また、この他にも南三十稲場式深鉢A類の破片が包含層から出土している。これらは口唇部の形態や胸部文様の特徴、太い文様描線などの諸点から、南三十稲場式の搬入品かその模倣と考えることができる。さらに中部地方の堀之内1式併行の土器群を瞥見するならば、その多くにこうした南三十稲場式に近似する特徴を見いだすことができる。現時点において北陸北半の状況は不明確なままであり、筆者が検討した時点からあまり成果の蓄積がない。これは出土事例の蓄積の問題ではなく、むしろ分析方法上の問題である場合が多いようである⁶⁶⁾。こうした問題はひとまず置くとしても、北陸北半地域における後期前葉土器群は三十稲場式から南三十稲場式という序列がほぼ確定している一方で、両者の型式学的な系統上の断絶は顕著である (阿部1989)。その成立に東北南部の綱取2式土器を想定してみても、南三十稲場式の深鉢A類の成立は十分に説明できない。

その系譜を考察する点においても、中部地方の堀之内1式併行期の土器群の実態の解明は重要であろう。とくに関東地方の土器と近似する個体の提示と比定にとどまるのではなく、これらに相伴する土器群の解明が今後の重要な課題として意識されることになる⁶⁷⁾。

4 中部地方における堀之内2式土器の細別

村東山手遺跡の堀之内2式土器は、これまで検討の成果をふまえるならば、3細分の指標的な特徴の在り方から、SB10住居址の一群が最古の堀之内2 a 式に位置づけられるものである。さらに3細別の変遷の在り方を見通した場合、SB08住居址の一群は胸部文様の構成などから、大半が2 b 式に対比されるものである。

SB10住居址から出土した一群には、関東地方の堀之内2式土器の成立を考える際に興味深い特徴が観察できた。それは堀之内2式の深鉢A類やB類に、かなり普遍的に認められるI a 帯とした口縁部付近に巡る刻み隆線の成立を示唆する特徴である。

堀之内1式や下北原式土器は口唇部に一条の太い沈線を周回させるものがあり、さらにここに刻みを施すものが関東地方の遺跡にごく少数が認められる。筆者はかつてこの刻みを施した沈線が、堀之内2式土器のI a 帯に系譜することを指摘した (阿部1988)。しかし、堀之内2式土器にきわめて多くの類例を見ながら、堀之内1式土器のなかに堀之内2式のI a 帯の成立を物語る類例が極めて少ない点に疑問を感じていたことも事実である。おなじ疑問は先年、神奈川県の上土棚南遺跡 (阿部1998) の堀之内1式終末か

ら2式初頭の土器群の検討に際しても少し述べておいたが、この仮説に立つ場合、どうやら下総台地や相模野台地は堀之内2式初頭の1a帯の成立に関しては消極的な地域であるらしい²⁰⁰。

今回の村東山手遺跡の土器群の観察において指摘できたのは、この堀之内2式の1a帯の成立を考える上で重要な、堀之内1式土器における口唇部沈線への刻列の類例の多さと、村東山手遺跡で主体をしいた堀之内2a式の口縁における1a帯の順調な変遷であった。とくに第1図3のように、胴部の文様裝飾においても堀之内2a式の特徴を良く伝える個体の口縁部において、刻列を伴う沈線が付加される事実は、堀之内2式土器の変遷におけるこの個体の位置を示唆すると共に、当地域における1a帯の順調な成立過程を示すものとして興味深い個体である。

その背景が今後問題となるところでもあるが、堀之内2式の刻み隆線の拡散はひとまず置くとしても、当面のところ問題とされるのは、堀之内1式期における口唇部沈線の刻列の付加という特徴の成り立ちであろう。このような特徴の成り立ちが、かりに今回指摘した中部地方において現象したものであるとするならば、その背景には新潟県周辺において分布をひろげる口唇部文様帯を発達させる南三十稲場式土器が関わりをもつ可能性が高いものとする。

筆者はかつて北陸地方の後期前葉の型式を検討した際に、南三十稲場式土器の特徴のひとつに、口唇部文様帯の発達を指摘した(阿部1990)。その特徴のひとつに沈線に刻列を付加させることや、多段化がある(阿部前掲)。こうした口唇部沈線における加飾の伝統が、隣接地域のひとつである中部地方の堀之内1式土器の口唇部文様帯の構成に影響を与えた可能性が高い。事実、隣接型式の1つである東北南部の綱取2式土器における口唇部文様帯の発達も、南三十稲場式の影響によるところが多いと考えられる。こうして考えてくると口唇部の沈線の下端部に刻列を施すというわづかなクセの由来は、堀之内2式土器の特徴を説明する場合に、きわめて重要である。

土器型式の研究上で村東山手遺跡の堀之内2式土器の構成において重要な点は、以上に示したように堀之内2式土器の成立当初の特徴を良く伝えている個体が遺構内において多く発見されている点である。出土状況から推して、その全てが同じ時期に帰属するかは廃棄と製作の同時性の問題としてひとまず置くとしても、かなり短い期間のなかでの廃棄行為の累積である点は容易に推測される。その詳細はすでに述べたところでもあるが、磨消縄文を主体とした土器裝飾方法は、山梨県から神奈川県といった中部地方から、関東西部地域において広範な共通性をもつ。そして中部地方の遺跡における堀之内2式土器の出土状況の検討から、ほぼ関東西部とおなじ細別経過をたどって加曾利B1式へと連続することが予測された。

これらの細分と地域性の把握を前提として今後問題とされなければならないのは、当該地における堀之内1式期の状況ではないだろうか。村東山手遺跡ではその出土量が少なかったが、他の遺跡の土器群を見渡してみても類推できるように、堀之内2式成立以前の土器群の特徴は、むしろ関東地方とはかなり様相を異にするようである。すなわち、太い文様描線に充填縄文を多用する裝飾技法などは、関東西部においても散見できるが、一遺跡の土器群の中において決して主体的な在り方を示さないものである。さらに深鉢A類とした土器の安定的な広がりなどを視野にいれた時に、やはり注意されるのは、南三十稲場式土器との関係である。

関東地方西部を中心に分布をひろげる下北原式と関東東部の堀之内1式土器の関係(阿部1998)を視野に入れるならば、中部地方の堀之内1式併行土器群は、将来的には別型式として区分できる可能性が高いであろう。

こうした地域性を伝統として成立した堀之内2式土器は、広域な文様裝飾の共通性を保持しつつも、なお関東西部とのあいだに地域的な差異をもっている。その指標のひとつとして村東山手遺跡の堀之内2式土器の器種組成率は注目される特徴をもつ。村東山手遺跡はその中心が堀之内2a式と2b式である。そ

れによるならば、深鉢A類51%、B類28%、無文深鉢21%といったように、無文の深鉢形土器の組成率の高さが関東地方の堀之内2式とは際立つ違いとして映る。村東山手遺跡と同様にして無文深鉢の安定した組成は、山梨県富士吉田市池之元遺跡の堀之内2式中頃の土器においても確認されている(阿部1998)。したがって、器種組成率における地域性は少なくとも堀之内2式初頭以後、山梨県から長野県といった中部地方の堀之内2式土器の地域性の指標として注意されてよいだろう。

注

- 注1 磨治縄文の成立については、東関東地方の堀之内2式初頭の状況を考察した際に、地文縄文を主体とした東関東地方ではなく、西南関東地域の充気縄文手法がその成立の基盤になっていることを指摘した(阿部1998)。
- 注2 現状の土器型式の研究は個体の形態と装飾の分類と集成によって成り立ち、その系統性の追求、年代的な併行関係の解明が主流となっている。しかしこうした研究において資料を提供している個々の遺跡は豊富な土器の出土した遺跡などが権威的資料として扱われるのみであり、遺跡形成と土器型式の関係と論点としたものは皆無に近い。筆者は土器型式研究のこうした動向を真っ向から否定する立場にはないが、遺跡形成と土器の型式変化の問題は両者の研究にとっても重要であり、相補性性質のものであると考えている。縄文土器研究の視点については現在議論を作成中であるので、そちらを参照されたい。1999年縄文時代10号「道具としての縄文土器—型式・技術・機能のトライアングル」
- 注3 従来より堀之内1式の口唇部沈線(文様帯)は2式になると消失することが指摘されており、型式区分の目安とされる場合が多い。しかし、胴部文様などにおいて明らかに堀之内2式初頭の個体にも、少数ながら沈線の残存するものがある。筆者は堀之内2式の口唇部形態が内折する特徴をもつ点とその成形の形り方から、口唇部沈線が内折した口縁部断面形態を形成することを指摘し、堀之内2式の初頭には沈線自体がその性質を変化させて、内折口縁のための作業痕跡として残存する点について述べた(阿部1998)。
- 注4 北陸地方での堀之内2式の共存状態として良好な例は岩野原遺跡8PL69ピットなどがある。報告書(駒形1981)では南三十稲場式と堀之内2a式の破片が共存している。この堀之内2a式はその後の整理の進行によって底部を欠損するが胴部以上はほぼ完全に復元されており、その観察によれば口縁には貫通した円孔をもつ南三十稲場式の口唇部文様帯が付着しており、折衷的な土器として復元されていた。共存状況とともに、こうした土器の構成は興味深い。筆者は1984年に作成した卒業論文(阿部1987)の資料見学において発見と実測をおこなったことがある。
- 注5 東関東での堀之内2a式~2c式は鎌刈遺跡住居出土土器—修理山遺跡第12号住居—上高津貝塚XIV2層という指標資料によって説明でき、前二者はそれぞれ住居内一括土器によって説明し、堀之内2c式は上高津貝塚の層位的出土事例によって(阿部1998)。筆者はこれに対して関東西南部地域の変遷を一巡の整理としてまとめたことはないが、筆者がいままで分析してきた遺跡の資料によるならば、堀之内2a式の特徴は上土層遺跡第3次調査の鹿野ブロック出土資料において指摘し(阿部1998)、2b式は上土層遺跡鹿野ブロックが良くまとまっている(阿部1993)。そして2c式は下北原遺跡の第14号住居の一併によって代表させることができると考えている。
- 注6 -遺跡から出土した縄文土器を形態や装飾から分類するならば、いくつかのグループにまとめられることが普通である。それほど縄文土器は多様な要素をもつのであるが、この基礎的な分類をもって満足し、土器型式の理解と雷同したり、細割と誤解して満足する研究が多い。百人百様の型式の乱立の根源がここにある。しかし、型式とは実在する類似例の蓄積と年代的配列とを系統的整理を基本にしているから、それほど混乱を招くのは資料的な根拠にないが、筆者がいままで分析してきた自身の認識の差異による可能性の方が高い。新潟県城之腰遺跡(新潟県1995)では、三十稲場式から南三十稲場式の良好な資料が出土しているにもかかわらず、そうした配置の分析がみられない。北陸地域で再分析が鶴首される一例である。
- 注7 南三十稲場式と長野方面の土器群との関係の研究視点については、「南三十稲場式の下限については、柳取2c式以降、堀之内2式に併行する土器群においてもその命脈は連続し「S字状縄文」などを描く独自の土器系列を生成しているのである。とくに東北南部および北陸北半地域から長野県北半地域における堀之内1c式以降の土器群の検討にあたっては、これらの土器系列の理解とそれらの系統観を軽視することはできないであろう。」(阿部1993)という一文においてすでに指摘した。
- 注8 関東地方において散見される堀之内1式終期の口唇部沈線の系列は、充気縄文と沈線による曲線的な文様を胴部に描く深鉢A類の系列にはは限定されるようであり、今後は口唇部の特徴のみではなく、胴部文様の系統が問題となるであろうが、先述した胴部文様の特徴は中部地方の堀之内1式併行期において、かなり多くの類似例を見ることは注意を要するであろう。

参考 引用文献

- 阿部 芳郎 1990 「北陸北半地域における後期前葉土器型式の再検討」『信濃』第42巻第10号
- 阿部 芳郎 1987 「縄文時代後期前葉土器型式群の構造と動態」『続台史学』71号
- 阿部 芳郎 1988 「堀之内2式型式基礎論考」『貝塚博物館紀要』第15号 千葉市加曾利貝塚博物館
- 阿部 芳郎 1989 「堀之内1式土器の構成と変遷」『信濃』40巻4号
- 阿部 芳郎 1994 「西ヶ原貝塚出土の堀之内1式土器とその変遷」『西ヶ原貝塚・東谷戸遺跡』北区教育委員会
- 阿部 芳郎 1996 「1995年の学界動向 土器型式編年論 後期」『縄文時代』7 縄文時代研究会
- 阿部 芳郎 1997 「堀之内2式の器種構成と組成率」『池之元遺跡発掘調査研究報告書』富士吉田市史編纂室
- 阿部 芳郎 1998 「堀之内2式土器の構成と変遷」『縄文時代』第9号 縄文時代研究会
- 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究収録』第5冊
- 石井 寛 1993 「堀之内1式期土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・草薙台南遺跡』横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1995 「原出口遺跡20号住居址出土土器群をめぐって」『川和向原遺跡・原出口遺跡』横浜市ふるさと歴史財団
- 今橋 浩一 1979 「中妻貝塚出土の堀之内2式土器について」『取手と先史文化』上巻取手市教育委員会
- 小川 和博 1984 「堀之内2式土器編年の課題」『泰和』15周年記念論文集
- 小川 和博 1985 「堀之内2式土器の成立をめぐって」『古代』80号 早稲田大学考古学会
- 軽井沢町教育委員会 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』
- 佐久町教育委員会 1979 『宮の本』
- 斉藤 弘道 1987 「堀之内式土器研究のあゆみ」『茨城歴史館報』5 動茨城歴史館
- 戸倉町教育委員会 1990 『田光尾遺跡』
- 中村孝三郎 1975 『根立遺跡』長岡市立博物館
- 田中 耕作 1984 「所謂「三十番場式土器」の成立について」『信濃』37巻4号
- 長野県教育委員会 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』諏訪市その3
- 長野県教育委員会 1988 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 戸沢 克則 1965 「後・晩期の縄文式土器群」『井戸尻』
- 松本市教育委員会 1990 『坪ノ内遺跡』
- 松本市教育委員会 1988 『林山麓遺跡』
- 望月町教育委員会 1989 『平石遺跡』
- 山内 清男 1939 「堀之内式」『日本先史土器図譜』先史考古学会

第3節 村東山手遺跡の土器の網代痕

1 観察の対象

本遺跡では中期後半加曾利EⅢ式から後期中葉加曾利BⅠ式の時期の土器が主体をなす。但し、称名寺式は見られず必ずしも前述の期間継続した遺跡ではないと思われる。この時期の土器には底部の網代痕が多く見られることが知られており、本遺跡においても網代痕の底部が多量に出土した。底部のみでは時期を判断できないものが多いため、伴出遺物よりある程度時期が限定できるSB08・SB09・SB10・SB13・SK33の覆土出土遺物を観察対象とした。SB08～10・13はわずかに中期の土器が混入するものの、胴部破片の95%以上は後期前葉堀之内2式であり、底部も同時期のものと考えられる。SK33は中期加曾利EⅣ式及びその並行期の土器が671点に対し、後期堀之内2式の破片が4点であることから、底部破片は加曾利EⅣ式並行のものと考えられる。

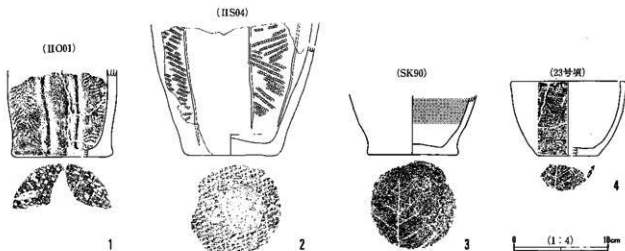
なお、上記遺構以外より出土した特殊な圧痕・網代痕についても触れたい。

2 村東山手遺跡の網代痕

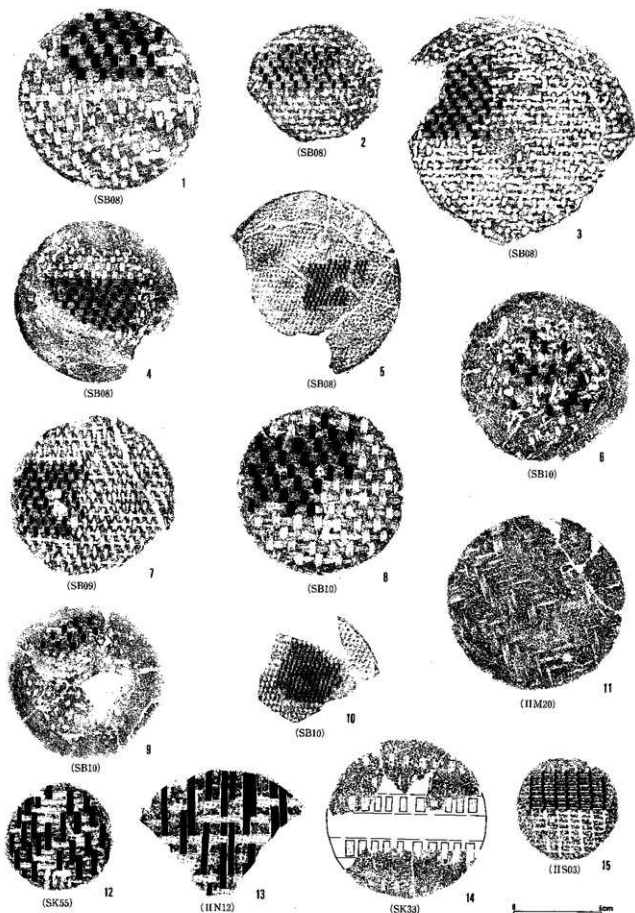
本遺跡の土器底面に見られる圧痕はほとんどが網代痕で、ほかには木葉痕（第1図3・4）と^{すざね}簾状圧痕（第2図15）と原体不明の圧痕が数点見られるのみである。縄文時代後期と確認できる資料では、網代痕以外のものは見られない。

網代痕の出現率

第3図に時期別・遺構別の網代痕の割合を示した。中期末葉のSK33では底部破片36点中5点の網代痕が確認されているものの、底部自身から時期が解るものは無い。2点は上層より出土したもので後期の土器も伴出しており、出土状況から中期と断定できるものは下層出土の3点である。遺構外では加曾利EⅣ式の土器底面に網代痕が確認されたものがある（第1図1・2）。中期末葉加曾利EⅣ式並行の時期には、本遺跡において網代痕は例外的な存在で一般的ではないと考えられよう。

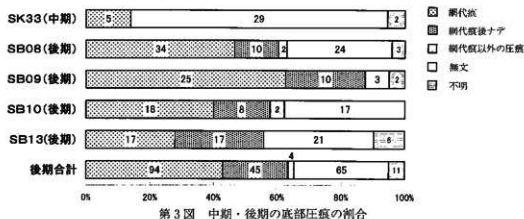


第1図 村東山手遺跡の木葉痕土器と中期の網代痕土器

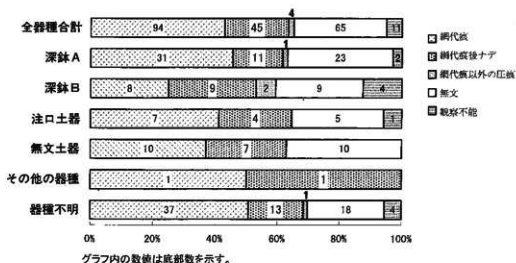


第2図 村東山手遺跡の網代痕と縄状圧痕

後期堀之内2式のSB08～SB10・SB13の資料では214点中139点の網代痕が確認された。原体不明の圧痕が4点確認されたものの、後述の山梨県池之元遺跡で見られた「網代+木葉痕」のものは認められない。網代痕は底部全面に見られるもの(第2図1～3など)と、周縁部の網代痕がナデ消されているもの(第2図4・6など)と、底面をナデで網代痕が不明瞭になっているものがある。網代痕がナデにより不明瞭になったものを「網代痕後ナデ」とした。底部資料は小破片も1点とカウントしたため、周辺部の網代痕がナデ消されるものは小破片の場合無文底と認識しており、網代痕がない無文底の割合が実際よりも多くカウントされるため、後期堀之内2式の網代痕の割合はさらに高かったと考えられる。



次に後期土器の各器種の網代痕の出現率であるが、底部破片のみでは器種の認定が困難なものも多く、注口土器と深鉢Bと浅鉢、深鉢Aと無文土器など分類の基準があいまいなものもあり、必ずしも明確な分類ではないことを断っておきたい。このような事情を鑑みたとしても、各器種に網代痕は認められ、網代痕出現率の器種による大きな差異は認められない(第4図)。



第4図 器種別の底部圧痕の割合(後期土器)

網代痕の種類

網代痕の分類は山梨県池之元遺跡の網代痕の分類に従い(須賀1997)、池之元遺跡に見られない網代痕は新たに名称を付けた^(注1)。網代痕の観察は粘土による型おこしを行い、以下の分類は網代原体の編み方を説明したものである。

1類：「2本越え、1本潜り、1本送り」のもの。送りが左下がりのものを1a類、右下がりのものを1b類とした。

2類：「2本越え、2本潜り、1本送り」のもの。

3類：「3本越え、3本潜り、1本送り」のもの。

4類：「3本越え、2本潜り、1本送り」のもの。

5類：「3本越え、3本潜り、2本送り」のもの。

6類：「1本越え、1本潜り、1本送り」のもの。

7類：「編み方が不規則なもの」

8類：「1本越え、1本潜り、1本送り」のもので、経と緯が異なった形状の素材を編みこんだもの。

第5図に後期土器の器種別に網代痕の種類別の割合を示した。分類不能のものを除くと、1類が93.3%、6類が4.5%、2類・3類がそれぞれ1.1%で、1類が大半を占める。4類・5類は認められない。住居址内の資料で見える限り、本遺跡の後期前葉の網代痕は1類が主体となる。

中期には8類が1点確認されているが(第2図14)、他は1類又は6類で編み方に後期との差は見られない。資料は少ないが、中期の底部は底面周縁部に明瞭に網代痕を残し、中央部は不明瞭になる傾向がある。中期と後期の網代に明確な差は見られないが、網代痕の付き方に差があるのかもしれない。

次に器種別・遺構別・底径と網代原体の幅との関係を第1表に示した。原体の幅は、より明瞭に圧痕として残る経または緯どちらか一方の最大幅の所を測定し、その値とした。なお、経・緯で原体の幅が明瞭に異なるものは数少ないことを確認しておく。網代の原体幅は0.6mm~4.1mmのものがあり、1mm~3mm未満のもので6割以上を占める。器種・遺構・底径などの要素との明確な相関関係は認められない。資料数が少ないので断定はできないが、1mm以下の原体が深鉢Aに多く見られ、深鉢Bと無文土器には見られず、山梨県富士吉田市池之元遺跡と同じ傾向を示す。



1類

2類

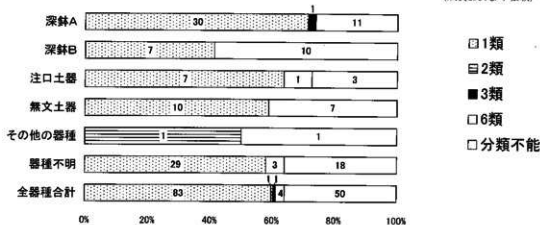
3類

4類

5類

6類

(須賀1997より転載)



グラフ内の数値は資料点数を示す。データはSB08~SB10・SB13出土資料を集計した。

第5図 網代痕の分類と後期土器における組成率

第1表 器種別・出土地別・底径別の網代痕

器種別の網代痕

器種	1m以下	1.1~2m	2.1~3m	3.1~4m	4.1~5m	不明	合計
深鉢 A	10	13	10	3	2	4	42
深鉢 B		7	6	2		2	17
注口土器	3	1	4	1		2	11
無文土器		3	7	3	1	3	17
その他			2				2
不明	9	18	14	6		3	50
合計	22	42	43	15	3	14	139

出土地別の網代痕

出土地	1m以下	1.1~2m	2.1~3m	3.1~4m	4.1~5m	不明	合計
SB08	9	9	12	2	2	10	44
SB09	7	9	12	4	1	2	35
SB10	4	10	5	5		2	26
SB13	2	14	14	4			34
合計	22	42	43	15	3	14	139

底径別の網代痕

底径	1m以下	1.1~2m	2.1~3m	3.1~4m	4.1~5m	不明	合計
6cm以下	1		4	1			6
6.1~8.0cm	6	7	7			2	22
8.1~10.0cm	2	8	9	5	1	1	26
10.1~12.0cm	3	8	4	5	2		22
12.1~14.0cm	3	3	8				14
14.0cm~	1	2	5	1			9
底径不明	6	14	6	3		11	40
合計	22	42	43	15	3	14	139

網代痕の地域性における村東山手遺跡の位置付け

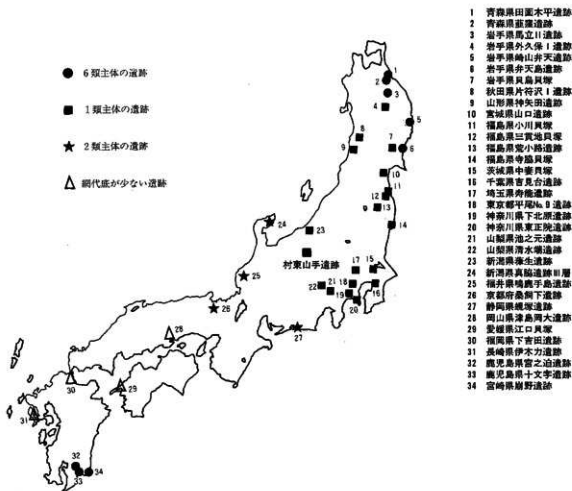
網代痕の地域性については先学の蓄積があり⁽²²⁾、後期前半の地域性については須賀博子氏が大きく4地域のまとまりを示している(須賀1997)。本遺跡の網代痕は2本越え1本潜り1本送りが主体であり、東北中部から南部、関東、北陸に広がる大きな地域的まとまりに属する(第6図)。岐阜県などの事例が確認されていないが、本遺跡は網代痕が示す地域的まとまりの西端に位置していると考えられる。

3 善光寺平周辺の網代痕の時代的変遷

善光寺平周辺の網代痕出現率の変遷は明らかにされていないが、本遺跡で見える限り加曾利EIV式期にはわずかに網代痕が認められ、堀之内2式期には顕著に網代痕が確認される。

中期前葉~中葉を主体とする千曲川下流の風呂屋遺跡(豊田村)では、網代痕の底部が数点出土しているものの、後期の土器がわずかに出土していることから、網代痕は後期である可能性が高い⁽²³⁾。八ヶ岳西南麓では諏訪郡原村大石遺跡16号住居の猪沢式と同村弓張口向遺跡7号住居の藤内式土器に網代痕が確認されているものの、中期の網代痕の出現率はきわめて低いということが指摘されている(長沢1987)。八ヶ岳西南麓の状況をそのまま善光寺平周辺に当てはめることには問題があるが、経験的に概ね同じ状況であろうことは推定される。さらに、本遺跡の資料から加曾利EIV式並行期までは網代痕の出現率はきわめて低いと考えておきたい。

後期では、本遺跡で堀之内2式の網代痕の出現率が高いことを確認したが、堀之内1式、称名寺式並行期の出現率は未確認である。関東地方では称名寺式~堀之内1式の時期にかけては網代痕の比率が低いこ



第6図 後期前半の主体となる網代の編み方の分布(須賀1997に加筆)

とが指摘されており(荒木1968)、善光寺平周辺においても同じ状況にあった可能性も今後検討しなくてはならない。

晩期にも長野市宮崎遺跡、更埴市屋代清水遺跡などで網代痕は確認されているが、網代痕の出現率、主体となる編み方などは不明である。報告書掲載資料を見る限り、1類と6類が確認される。善光寺平から離れるが茅野市御社宮遺跡では晩期後葉の深鉢456点のうち網代痕240点、木葉痕18点、その他の圧痕5点が確認された。網代痕の種類では100点のうち1類が59点、2類が7点、3類が18点、5類が1点、6類が9点、その他特殊なものが6点である。本遺跡と比べると、木葉痕が見られること、1類以外の編み方がある程度見られ、編み方のバラエティーが豊富であること、などの違いが見られる。これが時期的な差であるのか、地域的な差も含むものなのか、今後の資料の蓄積が待たれる。

4 おわりに

後期前葉の網代痕から見た地域性と善光寺平周辺での網代痕の変遷を考えてみたが、時間的制約と資料的制約により他遺跡のデータを十分に集めることができなかった。報告書のみでは統計的データが得られないものも多く、資料の提示法の検討が求められる。

本遺跡でも、単純に1類～8類の類型化を行なったが、経・緯の間隔や原体の幅など、さらに考慮される要素はある。本遺跡では1類が主体となったが、他の類型がわずかに認められた。これらは器種が不明

確なものも多く、類型と器種の関係を明らかにするには良好な資料の増加を待たねばならない。網代底の違いが何に起因するのかを検討することにより、土器製作と消費のメカニズムの一端が明らかになってくるのかもしれない。

註

- 1) 池之元遺跡は土器の器種組成と型式学的特徴が類似しており、比較検討のため同じ分類名称を用いた。網代の経・緯は原体の数を多く越えるほうを緯とし、編み方を経の糸に対する緯の糸の越えと潜り、緯の糸の送りの本数によって分類した。
- 2) 坪井正五郎1899「日本石器時代の網代影編み物」『東京人類学会雑誌』14-161、小林行雄1964『続古代の技術』、荒木ヨシ1970「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』15、高橋亜貴子1988「外久保Ⅰ遺跡出土縄文時代土器底部について」『外久保Ⅰ遺跡』滝沢村教育委員会、荒木ヨシ1995「縄文時代に於ける分業の考察—編物の分析を通して—」『物質文化』58、岡元満子1986「底部圧痕を有する縄文式土器について—南九州におけるいわゆる網代底とその背景—」『庶大考古』5、須賀博子1997「土器底面の網代痕跡に関する基礎的な観察と編み方の地域性」『池之元遺跡発掘調査研究報告書』などの研究がある。
- 3) 整理担当者の石原州一氏の証言による。

参考文献

- 荒木ヨシ 1968 「縄文時代の網代編み」『物質文化』12 物質文化研究会
- 長沢宏昌 1987 「山梨県内出土縄文土器の底部圧痕について」『研究紀要4』山梨県考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 須賀博子 1997 「第4節 土器底面の網代痕に関する基礎的な観察と編み方の地域性」『富士吉田市史資料叢書14 池之元遺跡発掘調査研究報告書』富士吉田市史編さん室
- 鍋田典昭・石原州一・中島英子 1998 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14 中野市内その3・豊田村内一牛出遺跡・蒸山遺跡・風呂屋遺跡他」『山梨県埋蔵文化財センター他』

第4節 村東山手遺跡出土縄文土器の胎土分析

河西 学

1 はじめに

村東山手遺跡は、長野盆地東部奇妙山西麓における崖錐地形末端部の谷地形上に位置し、出土する縄文時代の遺物は草創期から後期末までおよぶが、遺構は縄文中期末から後期前半が中心とされる。長野盆地内においてすでに、北平1号墳出土の御屋敷式土器および松原遺跡の箱清水式土器の胎土分析（バリノ・サーヴェイ、1996）、篠ノ井遺跡群出土の弥生時代・古墳時代・古代土器の胎土分析（植田ほか、1997）、風呂屋遺跡出土縄文土器・平安時代土器および牛出遺跡出土平安時代土器の胎土分析（藤根・古橋、1998）などが報告されている。また浅間火山南麓の塚田遺跡出土縄文早期～前期土器の分析例も報告されている（水沢、1994）。

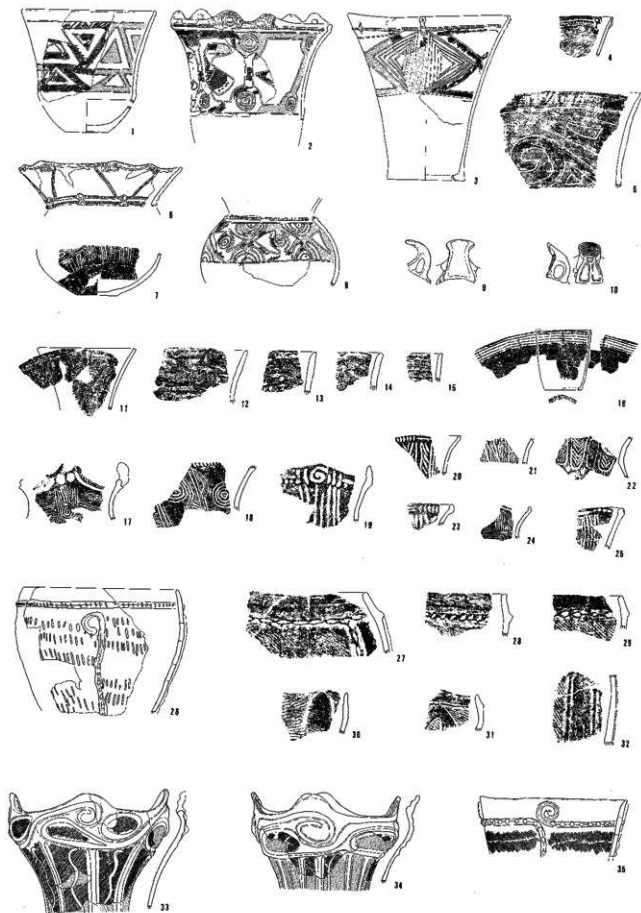
今回は村東山手遺跡出土縄文後期の堀之内2式土器と南三十稻場式土器を中心にして、比較試料として縄文中期の丘塚隆帯文系土器、加曾利EⅢ～IV式土器を抽出し、各型式土器の胎土の特徴を明らかにし、型式間の胎土組成の比較、また器種間の比較、あるいは他地域データとの比較などを目的とし薄片による岩石学的胎土分析を行った。さらに周辺地域の地質との比較によって土器の産地についても若干考察する。

2 試料

分析試料を第1表、第1図に示す。

第1表 試料表

試料番号	整理番号	取上番号	器種	時期	型式・系統	備考
No.1	SB10-70	6	深鉢A	後期前葉	堀之内2式	
No.2	SB10-67	4	深鉢A	後期前葉	堀之内2式	胎土に火山岩が入り、他と異なる。
No.3	SB10-71	17	深鉢A	後期前葉	堀之内2式	
No.4	SB10-03		深鉢A	後期前葉	堀之内2式	
No.5	SB10-43	16	深鉢A	後期前葉	堀之内2式	
No.6	SB10-45	15	深鉢B	後期前葉	堀之内2式	
No.7	SB10-39	14・17	深鉢B	後期前葉	堀之内2式	SB10-51と整合
No.8	SB10-44	11・13	深鉢B	後期前葉	堀之内2式	
No.9	SB10-81		注口土器	後期前葉	堀之内2式	
No.10	SB10-82		注口土器	後期前葉	堀之内2式	
No.11	SB10-64	5	無文土器	後期前葉	堀之内2式	
No.12	SB10-66	12	無文土器	後期前葉	堀之内2式	
No.13	SB10-86	12	無文土器	後期前葉	堀之内2式	
No.14	SB10-85		無文土器	後期前葉	堀之内2式	
No.15	SB10-84		無文土器	後期前葉	堀之内2式	
No.16	外-31		深鉢A	後期前葉	堀之内2式(新)	
No.17	SK65-1			後期前葉	南三十稻場式	
No.18	E T18c*71-1			後期前葉	南三十稻場式	
No.19	外-135			後期前葉	南三十稻場式	
No.20	SB10-07			後期前葉	南三十稻場式	
No.21	SB10-27			後期前葉	南三十稻場式	
No.22	外-166			後期前葉	南三十稻場式	
No.23	外-228			後期前葉	南三十稻場式	
No.24	外-171			後期前葉	南三十稻場式	肉眼観察で他の南三十稻場式と胎土が異なる。
No.25	外-196			後期前葉	南三十稻場式	
No.26	SK33-50			中期末葉	丘塚隆帯文系	
No.27	SK33-40			中期末葉	丘塚隆帯文系	
No.28	SK33-44			中期末葉	丘塚隆帯文系	
No.29	SK33-48			中期末葉	丘塚隆帯文系	
No.30	SK33-23			中期末葉	加曾利EⅣ式	
No.31	SK33-28			中期末葉	加曾利EⅣ式	
No.32	SK33-12			中期末葉	加曾利EⅣ式	
No.33	SK77-1			中期後葉	加曾利EⅢ式	
No.34	SK77-3			中期後葉	加曾利EⅢ式	
No.35	SK77-4			中期後葉	丘塚隆帯文系	



第1図 縄文中期・後期胎土分析試料一覽



第2図 土器断面X線透過写真(数字は試料番号、上方が土器上方、No.6は右側が土器外面、他は左側が土器外面)

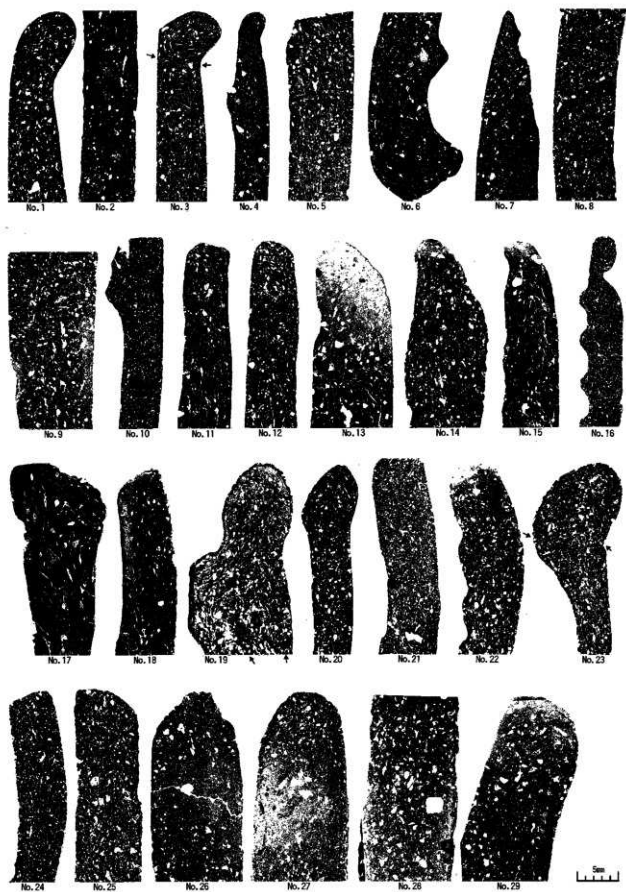
3 分析方法

土器試料は、以下の方法で薄片を作製した。土器試料は、切断機で3×2.5cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片試料はエポキシ樹脂を含浸させて補強し、土器の器壁に直交する断面切片を切断し、X線透過写真を撮影後、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。次に以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.33mm、短辺方向に0.40mmとし、各薄片で2,000ポイントを計測する。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス(「粘土」)部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含める。

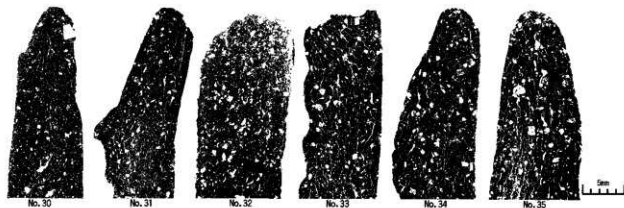
4 分析結果

(1) 土器断面に見られる特徴

第2図に土器切片のX線透過写真を示す。X線透過写真は、日立メディコ社製文化財X線透視検査装置で、40KV、2mA、照射時間180秒で、富士工業用X線フィルム#50に撮影し、白黒印画紙に密着焼きし



第3図 土器断面実体顕微鏡写真(1)
 (偏光板不使用、上方が土器上方、No.6は右側が土器外面、他は左側が土器外面、矢印は推定胎土接合部)



第4図 土器断面実体顕微鏡写真(2) (偏光板不使用、上方が土器上方、左側が土器外面)

たものである。土器切片の厚さは約3mmである。第3・4図に土器薄片の実体顕微鏡写真を示す。土器切片は1個体の土器から複数切断したので、X線透過写真と実体顕微鏡写真は同一試料であっても必ずしも同一切片ではない。以下の記述は主として実体顕微鏡での薄片観察をもとに行う。

Nos. 1, 2, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 20, 22, 24, 26, 27, 28, 29, 32は、部分的に不規則な空隙が存在するもの、柳葉状のわれの発達が不良である。

No.3は、口縁部の屈曲部において明瞭な三角形空隙が存在する。この空隙を境界として口縁部先端では、柳葉状われが同心の楕円状に分布していることから、口縁部屈曲部に断面がほぼ円形の粘土紐を貼り表面両面をなでつけて接合したことが考えられる。なお第2図では胎土境界が直線的な空隙で認められる。綾瀬市上土棚南遺跡出土の下北原(新)式深鉢Bの口縁部においても、胎土接合に関連する三角形空隙が認められているが、本遺跡No.3に見られるような同心状の組織は顕著ではない(河西、印刷中)⁽²¹⁾。

Nos. 5, 11, 12, 13, 14, 15, 17, 18, 21, 25, 30, 31, 33, 34, 35は、柳葉状のわれが器壁に平行あるいは斜交して配列している。

No.16は、口縁部に4本の隆線が存在し、口縁部先端の内側に沈線が認められる。全体に器壁に平行から低角で斜交する柳葉状のわれが分布している。口縁部内側の沈線部分においては接合境界が認められない。外側の隆線は、本体と隆線部分とで柳葉状われが低角度で斜交すること、あるいは本体と隆線部分の含砂率が異なる場合が認められることなどから、器壁にはほぼ平行した境界によって本体に接合している可能性がある。

No.19は、外側約4mm程度の幅に器壁に平行する柳葉状のわれが顕著に配列している。肥厚部下部の外側表面から約4mmほど内側の部分に不規則な空隙が存在する。また肥厚部直上のくびれ部の胎土中央部には三角形空隙が存在する。後者の空隙を3重点として逆Y字状の境界によって3つの胎土塊が接している可能性がある。この場合柳葉状われが顕著に分布する厚さ約4mmの帯状部分が外側の胎土塊に相当する。第2図においても同様の状況が認められる。

No.23は、口縁が肥厚している。肥厚部下部から下では柳葉状われが器壁に平行して分布するが、肥厚部下部において柳葉状われが屈曲する傾向があり、また不規則な空隙が認められる。肥厚部中上部では柳葉状われが顕著でないことから、肥厚部下部において器壁に高角度で斜交する緩やかな曲線状の境界をもつ胎土の接合が推定される。ただし第2図では肥厚部上部中央と下部中央に胎土接合に関連しそうな三角形空隙～不規則な空隙が認められることから、接合境界はかなり複雑である可能性が高い。

(2) 胎土組成における特徴

分析結果を第2表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合(粒子構成)、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第5図に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。岩石組成

折れ線グラフを第6図に示す。この折れ線グラフは、変質火山岩類(含「緑色変質火山岩」)・玄武岩・安山岩・デイサイト⁽⁹⁾・花崗岩類・変成岩類(含ホルンフェルス)・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント数の総数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである。折れ線グラフの第1・第2ピークの組み合わせによって土器を分類した結果を第3表に示す。

クラスター分析の樹形図を第7図に示す。クラスター分析は、折れ線グラフと同様の10種のうち炭酸塩岩を除く9種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。第7図は、本道跡試料と、堀之内式土器の胎土分析結果が得られている綾瀬市上土棚遺跡(阿部・河西, 1994)・上土棚南遺跡および富士吉田市池之元遺跡(河西, 1997a)資料とを比較した。便宜的に1~15の番号をクラスターに付した。以下に土器型式・器種ごとの胎土の特徴について述べる。

堀之内2式深鉢A (Nos. 1~5)

胎土全体の粒子構成に占める砂粒子の含有率(以下含砂率)は、20.5~26.6%を示し、赤褐色粒子は0.6~3.3%と少ない。

No.2は、岩石鉱物組成において、安山岩(11.1%)・変質火山岩類(14.0%)・泥岩(16.2%)などが多く、花崗岩類(7.1%)・砂岩(5.1%)・デイサイト(2.2%)・火山ガラス(3.1%)などを伴い、石英・カリ長石・斜長石が他の深鉢Aより少ない特徴が認められる。安山岩は斑状、新鮮で斜長石・輝石を伴う。重鉱物組成は、単斜輝石(42%)・斜方輝石(13%)が優勢で、角閃石・黒雲母・不透明鉱物などは他試料より少ない。第3表ではMD-V群に含まれ、第7図ではクラスター6を単独で構成している。

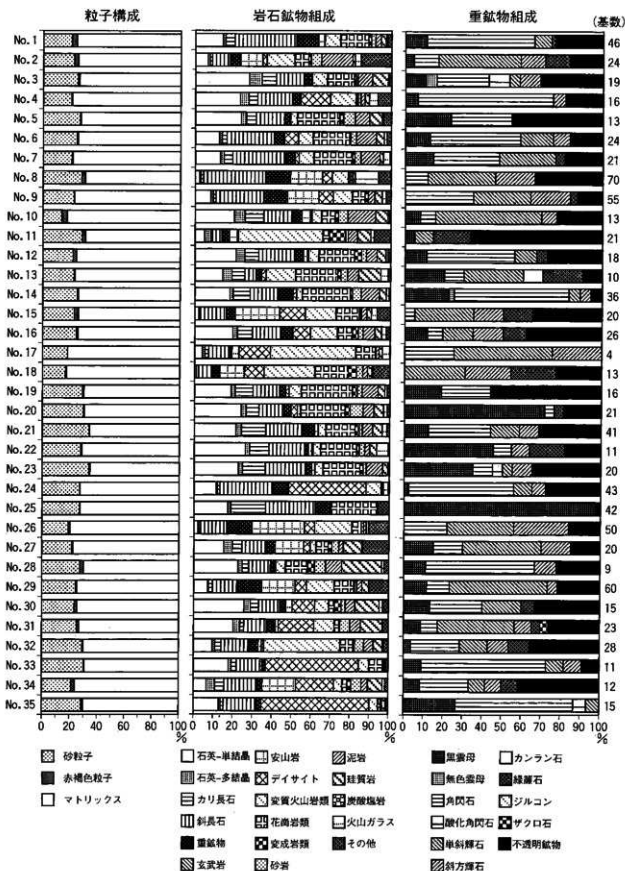
No.4は、岩石鉱物組成においてデイサイト(14.9%)・変質火山岩類(13.2%)・石英(27.3%)・斜長石(17.6%)を多く含み、重鉱物組成では角閃石(69%)が卓越することで特徴づけられる。石英は、多くが清澄でときに融食を示し、β型(高温型)外形を呈する石英が含まれていることから、デイサイト・デイサイト質変質火山岩類などの地質に由来するものと推定される。デイサイトは、やや変質したものが含まれるが、ガラス質の石基からなり、自形の石英・斜長石の大きい斑晶をもち、黒雲母・カリ長石を伴う。変質火山岩類では、石基がカリウム染色反応⁽¹⁰⁾を示すデイサイト質の粒子が多い。第3表ではD-V群に含まれる。第7図ではクラスター11に属するが、池之元遺跡堀之内2式粗製深鉢Nos.13~17や上土棚遺跡堀之内2式精製深鉢No.15などデイサイトよりも変質火山岩類の多い土器との類似性はあまり高くない。

Nos.1, 3, 5は、岩石鉱物組成において石英(15.6~33.7%)・斜長石(14.0~31.2%)・花崗岩類(14.0~21.6%)などが多く、変質火山岩類・泥岩・珪質岩・砂岩・ホルンフェルスなどを伴い、重鉱物組成では、角閃石(26~54%)・不透明鉱物(24~46%)・黒雲母(11~23%)などから主として構成される特徴がある。ただしNo.1では安山岩がやや多く含まれること、No.3では重鉱物として酸化角閃石・斜方輝石・単斜輝石・無色雲母などを伴うことなど試料ごとに若干異なる点もある。第3表において、No.1はG-V群に、No.3はG-si群に、No.5はG-md群に含まれる。第7図でNos.1, 5はクラスター1に、No.3はクラスター2に、それぞれ村東山手遺跡出土の他器種とともに属している。

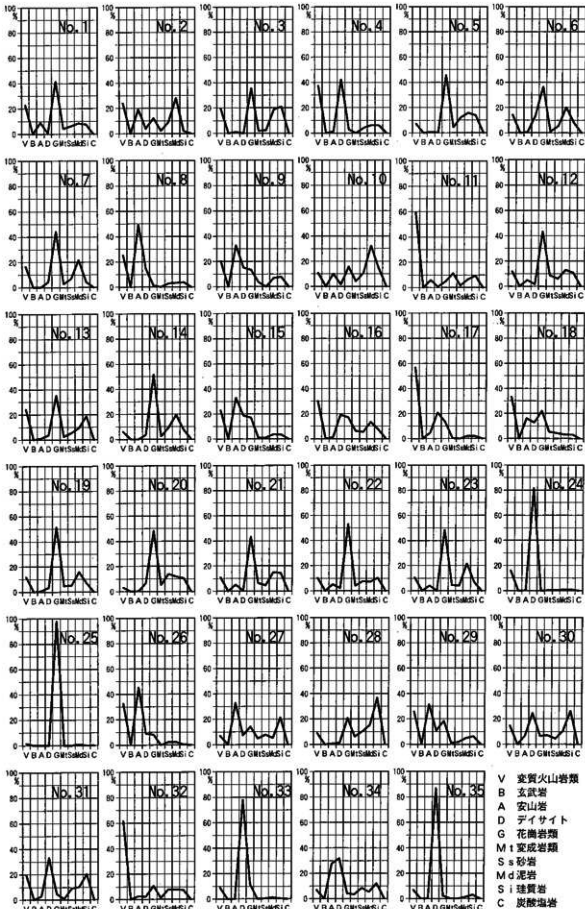
以上堀之内2式深鉢Aの胎土組成は、3つに大別された。これらは、地質の地域性を反映した複数の異なる原料産地を示しているものと推定される。

堀之内2式深鉢B (Nos. 6~8)

Nos.6, 7は、含砂率21.0~24.4%、赤褐色粒子0.6~0.7%である。岩石鉱物組成は、斜長石(23.8~26.7%)・花崗岩類(18.7~19.8%)・石英(13.8~14.8%)・泥岩(9.8~10.3%)・変質火山岩類(7.4%)で特徴づけられ、デイサイト・珪質岩・砂岩などを伴う。重鉱物組成は、角閃石(33~46%)・単斜



第5図 土器胎土の岩石鉱物組成



第6図 岩石組成折れ線グラフ

第3表 岩石組成折れ線グラフによる土器の分類

分類	折れ線グラフの特徴		試料番号
V-d群	変質火山岩類の第1ピーク	アイサイトの第2ピーク	16, 17
V-g群		花崗岩類の第2ピーク	18, 32
V-mt群		変成岩類の第2ピーク	11
A-v群	安山岩の第1ピーク	変質火山岩類の第2ピーク	8, 9, 15, 26, 29
A-si群		珪質岩の第2ピーク	27
D群	デイサイトの第1ピーク	顕著な第1ピーク	24, 33, 35
D-v群		変質火山岩類の第2ピーク	4
D-a群		安山岩の第2ピーク	34
D-si群		珪質岩の第2ピーク	31
G群	花崗岩類の第1ピーク	顕著な第1ピーク	25
G-v群		変質火山岩類の第2ピーク	1, 13, 22
G-sa群		砂岩の第2ピーク	20
G-md群		泥岩の第2ピーク	5, 6, 7, 12, 14, 19, 21, 23
G-si群		珪質岩の第2ピーク	3
MD-v群	泥岩の第1ピーク	変質火山岩類の第2ピーク	2
MD-g群		花崗岩類の第2ピーク	10
SI-d群	珪質岩の第1ピーク	アイサイトの第2ピーク	30
SI-g群		花崗岩類の第2ピーク	28

輝石 (17~29%)・不透明鉱物 (17~19%)・黒雲母 (13~14%) などから主として構成される。2試料は、第3表でG-md群に、第7図でクラスター1に含まれ、極めて類似性の高い組成を示す。

No.8は、含砂率27.8%、赤褐色粒子3.0%である。岩石鉱物組成は、斜長石 (31.5%)・安山岩 (16.2%)・火山ガラス (12.1%)・変質火山岩類 (8.3%)・デイサイト (4.9%) などが多く、重鉱物量 (12.6%) も多い。重鉱物組成は、単斜輝石 (34%)・斜方輝石 (20%)・不透明鉱物 (34%) が多く、角閃石は少ない。安山岩は、斜長石・単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物を痕品とし、石莖は塊間状を示す。No.8は、第3表でA-v群に、第7図で同型式注口土器No.9、同型式無文土器No.15、庄真隆帯文系Nos.26, 29などとともクラスター8に含まれる。

以上堀之内2式深鉢Bの胎土組成は、2大別された。それらは、クラスター1とクラスター8で代表される異なる産地が推定される。両クラスターは、どちらも他地域の堀之内式土器が含まれず、本遺跡試料のみから構成されている特徴を示すことから、これらの示す土器胎土は、本遺跡周辺地域における堀之内2式土器の地域性を示している可能性がある。

堀之内2式注口土器 (Nos. 9, 10)

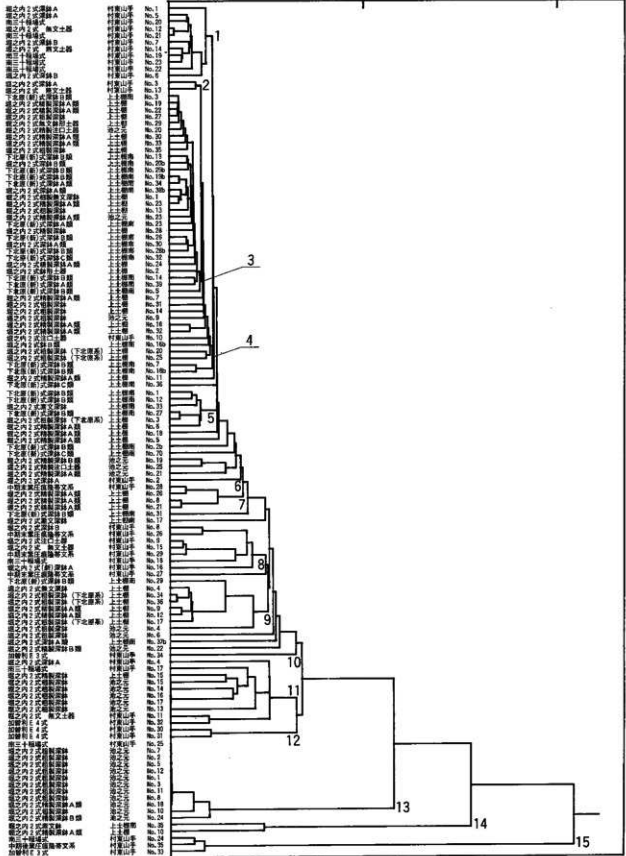
No.9は、含砂率22.5%、赤褐色粒子0.3%である。岩石鉱物組成は、斜長石 (24.1%)・安山岩 (15.8%)・デイサイト (7.3%)・変質火山岩類 (9.8%)・重鉱物 (12.2%) などが多く、花崗岩類・珪質岩・泥岩・ホルンフェルスなどが伴う。重鉱物組成は、角閃石 (35%)・単斜輝石 (29%)・斜方輝石 (20%)・不透明鉱物 (13%) などから主としてなり、緑簾石を伴う。第3表ではA-v群に、第7図ではクラスター8に含まれる。

No.10は、含砂率13.7%ととても低く、赤褐色粒子4.0%である。岩石鉱物組成は、石英 (25.5%)・斜長石 (14.6%)・カリ長石 (9.5%)・泥岩 (14.2%)・珪質岩 (6.6%)・花崗岩類 (6.9%) などが多く、安山岩・変質火山岩類・砂岩などを伴う。重鉱物組成は、単斜輝石 (54%) が多い。第3表ではMD-g群に、第7図では上土棚・上土棚南遺跡の多くの試料とともにクラスター4に含まれる。

両者は構成岩石鉱物において類似性が認められるものの、同一産地のものとはいえない。

堀之内2式無文土器 (Nos. 11~15)

No.11は、含砂率がやや高く28.4%、赤褐色粒子2.5%である。岩石鉱物組成は、変質火山岩類 (42.7%) が卓越し、ホルンフェルス (8.3%)・珪質岩 (6.8%)・安山岩・泥岩・花崗岩類などを伴う。重鉱



第7図 土器のクラスター分析樹形図

物組成は、不透明鉱物(67%)が多く、緑簾石・単斜輝石・黒雲母を伴う。第3表ではV-mt群に、第7図ではクラスター11に含まれ、加曾利EIV式No32と類似性が高い。

Nos.12, 14は、含砂率21.9~24.8%、赤褐色粒子0.8~2.4%である。岩石鉱物組成は、花崗岩類(18.3~24.6%)・石英(19.6~25.4%)・斜長石(14.5~18.5%)が多いことで特徴づけられ、泥岩・珩質岩・砂岩・変成岩類・変質火山岩類などを伴う。重鉱物組成は、角閃石(44~58%)・黒雲母(11~22%)が多く、単斜輝石・不透明鉱物などを伴う。第3表ではG-md群に、第7図ではクラスター1に含まれる。

No13は、含砂率22.6%、赤褐色粒子0.6%である。岩石鉱物組成は、花崗岩類(21.7%)・変質火山岩類(14.8%)・石英(18.8%)・珩質岩(11.5%)などから構成され、泥岩・砂岩・デイサイトなどを伴う。重鉱物組成は、単斜輝石・緑簾石・黒雲母がやや多く、角閃石・カンラン石・不透明鉱物などがわずかに含まれる。第3表ではG-v群に含まれ、第7図では堀之内2式深鉢AのNo3とともにクラスター2を構成する。

No15は、含砂率22.9%、赤褐色粒子2.8%である。岩石鉱物組成は、安山岩(22.8%)・デイサイト(12.9%)・変質火山岩類(15.8%)・花崗岩類(11.9%)から主として構成される。重鉱物組成は、単斜輝石(30%)・斜方輝石(15%)・不透明鉱物(35%)が多く、緑簾石・角閃石を伴う。第3表ではA-v群に、第7図ではクラスター8に含まれる。

以上、堀之内2式無文土器では、胎土組成が4分類された。No11を除く無文土器は堀之内2式深鉢A・B・注口土器あるいは南三十稻場式と類似性が高い傾向が認められる。

堀之内2式(新)深鉢A (No16)

No16は、含砂率24.5%、赤褐色粒子0.9%である。岩石鉱物組成では、石英(21.9%)・斜長石(14.7%)・変質火山岩類(13.9%)・デイサイト(8.8%)・花崗岩類(7.8%)などから主として構成される。重鉱物組成では、不透明鉱物(38%)が多く、単斜輝石・斜方輝石・黒雲母・角閃石・緑簾石などを伴う。第3表ではV-d群に、第7図ではクラスター8に含まれる。しかしクラスター8を構成するほとんどの試料で安山岩を多く含むのに対して、No16にはほとんど安山岩が含まれていないことから産地は明らかに異なる。No16は、同じV-d群に含まれる南三十稻場式No17、あるいは堀之内2式深鉢ANo4などと類似性が認められるが、重鉱物組成では類似性が乏しい。

南三十稻場式深鉢A (Nos.17~25)

Nos.17, 18は、他の南三十稻場式土器と多くの点で区別される。含砂率が16.7~18.1%と少なく、赤褐色粒子は0.1~0.7%である。岩石鉱物組成では、石英・斜長石などが少なく、変質火山岩類(25.8~43.4%)・デイサイト(9.9~13.0%)・安山岩(3.6~12.6%)・花崗岩類(10.2~17.1%)などから主として構成される。重鉱物組成では、単斜輝石・斜方輝石が多い傾向が共通する。No17は、第3表ではV-d群に、第7図ではクラスター11に含まれる。No18は、第3表ではV-g群に、第7図ではクラスター8に含まれる。両者は個々の岩石鉱物の構成比率では若干異なるものの、胎土組成の傾向は類似性が高く、類似した地域に産地が推定される。

Nos.19~23は、含砂率がやや多く28.9~34.0%で、赤褐色粒子0.3~1.3%である。岩石鉱物組成は、花崗岩類(15.0~26.3%)・石英(20.8~28.2%)・斜長石(12.7~20.6%)・カリ長石(6.4~12.4%)などが主体を占め、泥岩・珩質岩・砂岩・変質火山岩類などを伴う。重鉱物組成は、黒雲母(12~71%)・不透明鉱物(18~56%)・角閃石(5~32%)が特徴的で、輝石・緑簾石がわずかに伴う場合がある。第3表において、Nos.19, 21, 23はG-md群に、No20はG-ss群に、No22はG-v群に含まれる。第7図ではすべてがクラスター1に含まれる。Nos.19~23は、ほぼ同様の産地をもつものと考えられる。

Na24は、含砂率27.1%、赤褐色粒子0.2%である。岩石鉱物組成では、デイサイト (39.7%)・斜長石 (26.9%)・石英 (12.0%)・変質火山岩類 (7.7%)・火山ガラス (2.6%) から主として構成され、重鉱物 (7.9%) も多い。石英はほとんどが澄澄で周縁に火山ガラスが付着したものが多く、 β 型外形石英を多く含む。デイサイトは、極めて発泡の良好な無色ガラスを石基とし斜長石・ β 型外形石英・角閃石・斜方輝石・不透明鉱物などの自形斑晶を含む。変質火山岩類はデイサイト質粒子が多く、それらはカリウム染色反応はあまりなく、ときに脱ガラス作用を受けている。重鉱物組成は、角閃石 (53%)・不透明鉱物 (28%) が多く、単斜輝石・斜方輝石・黒雲母を伴う。第3表ではD群に、第7図ではクラスター15に含まれる。デイサイト～流紋岩質岩体に極めて近い地域に産地が推定される。

Na25は、含砂率27.1%、赤褐色粒子0.2%である。岩石鉱物組成では、花崗岩類 (23.7%)・斜長石 (25.3%)・石英 (18.8%)・カリ長石 (17.7%)・重鉱物 (7.8%) などから構成される。重鉱物組成は、黒雲母 (98%) がほとんどを占める。第3表ではG群に含まれ、第7図ではクラスター13に含まれる。花崗岩類に由来する粒子からほとんどが構成されることから花崗岩質岩体に極めて近い地域が産地として推定される。

南三十稲場式土器において胎土は4区分された。花崗岩類で特徴づけられる土器が多い傾向がある。堀之内2式土器深鉢A・Bあるいは堀之内2式無文土器などと類似性が認められる土器もある。

圧痕隆帯文系土器 (Nos.26, 27, 28, 29, 35)

Nos.26, 27, 29は、含砂率19.1～24.6%、赤褐色粒子0.7～1.2%である。岩石鉱物組成は、安山岩 (14.5～26.5%)・変質火山岩類 (3.0～19.2%)・デイサイト (3.2～5.9%) で特徴づけられ、花崗岩類・珪質岩・泥岩・砂岩などを伴う。重鉱物組成は、単斜輝石 (34～50%)・斜方輝石 (5～28%)・不透明鉱物 (15～22%) が主体をなし、角閃石・黒雲母を伴う。第3表においてNos.26, 29はA～v群に、Na27はA～si群に含まれる。第7図ではすべてがクラスター8に含まれる。クラスター8においてNos.26, 27, 29は堀之内2式・南三十稲場式の一部と類似性がある。

Na28は、含砂率が27.5%とやや高く、赤褐色粒子2.5%である。岩石鉱物組成は、石英 (24.8%)・珪質岩 (20.4%)・花崗岩類 (11.5%)・泥岩 (8.4%) などが多く、砂岩・変質火山岩類・ホルンフェルスなどを伴う。重鉱物組成は、角閃石 (56%) が多く、不透明鉱物・黒雲母・斜方輝石を伴う。第3表ではSI-g群に、第7図ではクラスター7に含まれる。

Na35は、含砂率28.5%、赤褐色粒子1.1%である。岩石鉱物組成は、デイサイト (55.4%) が卓越し、斜長石 (16.7%)・石英 (13.9%)・変質火山岩類 (4.4%) を伴い、他の圧痕隆帯文系土器と明らかに異なる。デイサイトは、新鮮で、斑晶として石英・斜長石・角閃石・黒雲母などのほか酸化角閃石やカリ長石も含まれ、石基は無色塊状ガラス質～細粒でカリウム染色反応が認められ、溶岩のほか火砕流堆積物～凝灰質組織を呈するものが含まれる。重鉱物組成では、角閃石 (60%)・黒雲母 (27%) が多く、酸化角閃石・単斜輝石を伴う。第3表ではD群に、第7図では南三十稲場式Na24と加曾利E III式Na33とともにクラスター15に含まれる。Na35は中期後葉とされ、Nos.26～29の圧痕隆帯文系の中期末葉とは時期が若干異なる。中期後葉の試料が1点だけなので、同時期における胎土組成の多様性はわからない。今回認められる圧痕隆帯文系土器の時期差と胎土組成差との対応は、偶然による可能性が高い。

加曾利E IV式 (Nos.30～32)

Nos.30,31は、含砂率23.6～25.2%、赤褐色粒子1.5～1.9%である。岩石鉱物組成は、石英 (23.8～29.0%)・デイサイト (11.7～18.1%)・珪質岩 (11.1～12.5%) などが多いことが特徴で、変質火山岩類・泥岩・砂岩・花崗岩類・安山岩などを伴う。重鉱物組成では、単斜輝石・角閃石・黒雲母・不透明鉱物・緑簾石などが共通し、Na31では斜方輝石・ザクロ石が検出された。第3表ではNa30がSI-d群に、Na

31がD-si群に含まれる。第7図では両者が融合してクラスター12を構成する。

No.32は、含砂率29.1%、赤褐色粒子0.8%である。岩石鉱物組成は、変質火山岩類(39.2%)が多く、斜長石・石英・花崗岩類・砂岩・泥岩・珪質岩を伴う。重鉱物組成は、不透明鉱物(36%)・角閃石(25%)のほか、単斜輝石・斜方輝石・緑簾石・黒雲母を伴う。第3表ではV-8群に、第7図では堀之内2式無文土器No.11と融合してクラスター11に含まれる。

加曾利EⅢ式 (Nos.33, 34)

No.33は、含砂率30.1%、赤褐色粒子0.9%である。岩石鉱物組成では、デイサイト(47.7%)が卓越し、石英・斜長石・花崗岩類・変質火山岩類などを伴う。デイサイトは、やや変質して汚れており、斜長石・石英(ときにβ型外形)・黒雲母・角閃石・不透明鉱物などの斑晶鉱物を伴い、石基は無色ガラス質から細粒でカリウム染色反応を示す。重鉱物組成は、角閃石(64%)が多く、黒雲母・単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物を含む。第3表ではD群に、第7図では南三十稲場式No.24と庄旗隆帯文系No.35とともにクラスター15に含まれる。

No.34は、含砂率21.3%、赤褐色粒子2.6%である。岩石鉱物組成では、デイサイト(19.5%)・安山岩(17.2%)・斜長石(16.7%)が多く、珪質岩・砂岩・変質火山岩類・泥岩などを伴う。重鉱物組成では、不透明鉱物(42%)・角閃石(25%)が多く、黒雲母・単斜輝石・斜方輝石・緑簾石を含む。第3表ではD-a群に、第7図では単独でクラスター10を構成する。

縄文中期の庄旗隆帯文系、および加曾利EⅢ～Ⅳ式土器は、縄文後期の堀之内2式および南三十稲場式土器とは個別的に類似性が認められる場合がある。後期土器においては花崗岩類が多く含む土器が特徴的であるのに対し、中期土器において花崗岩類はわずかに含まれる特徴があり、今回の試料においては若干の組成差が存在する。

5 土器の産地推定

以上の分析結果から、各型式ごとに複数の異なる胎土組成を示すこと、型式が異なっても類似した胎土組成を示す場合があること、同一型式で器種ごとに特徴的な組成が限定されるわけではなく、同一器種でも複数の胎土組成を示すこと、花崗岩類の含有率に関して中期土器と後期土器とで差異が認められることなどが明らかになった。これらのことから各時期ごとに複数の産地が存在し、土器が各地でつくられていたものと考えられる。

加藤・赤羽(1986)¹⁹⁾および日本の地質「中部地方I」編集委員会(1988)によると、長野盆地南東部の河東山地には安山岩、緑色変質した火山岩類、礫岩・砂岩・泥岩・凝灰岩・花崗岩類(石英閃緑岩)などが分布し、盆地西側の西部山地にはデイサイト・安山岩・礫岩・砂岩・泥岩・凝灰岩などから構成される。地域ごとに地質の特徴が認められることから、土器の産地推定が可能であると考えられる。土器の産地推定をする場合、土器の岩石鉱物組成や重鉱物組成と地質図上での特徴とを直接的に比較することは必ずしも容易ではない。土器の産地推定では、河川砂との比較が有効である(例えば増島, 1979、天野・大場, 1984、河西ほか, 1989)。河川砂は上流地域に複雑に分布する地質が風化・運搬・堆積作用によって混合されて堆積したものであり、広範で複雑な上流地質の特徴を代表させることが可能である。また河川砂は、土器胎土に含まれる砂粒子と粒径がほぼ同一であることから土器胎土との比較資料として適している。しかし長野盆地周辺地域における河川砂の比較データは充分ではないことから、ここでは主として地質図資料を参考にして定性的に考察し、問題点を述べていく。

クラスター15に含まれるNos.24, 33, 35はデイサイトで特徴づけられる。No.24はデイサイトが発泡している点でNos.33, 35とは異なっている。長野盆地西縁に広く分布する中新世後期の小川層中の榎花凝

灰岩層は、流紋岩質～デイサイト質の溶岩・凝灰岩・凝灰角礫岩などからなり、特徴的な大規模岩体である。河東山地では内村層森部層中にデイサイト質凝灰岩を4層挟在している。また長野盆地全域にわたって分布する風成ローム層中にもデイサイト質テフラが挟在されている。これら複数の地域が遺跡周辺地域においては産地候補となりうることから今後調査が必要である。同時に同様の地質的特徴をもつ他地域からの搬入についても考慮する必要がある。

デイサイトがやや多い試料Nos. 4, 31, 34なども上記のデイサイト分布地域およびその下流地域などとの比較を検討する必要がある。

No25は、ほとんどが花崗岩類とその構成鉱物で構成されていることから、花崗岩質岩体に極めて近い地域に産地が推定される。河東山地には主に石英閃緑岩からなる花崗岩質岩体が点在し、周縁部では花崗斑岩であるとされる。遺跡にもっとも近い小岩体は奇妙山西麓にある。やや大きい岩体は松代町東部の堀切山周辺、須坂市の妙徳山および米子山周辺、真田町大松山周辺などに分布し、ほかに更埴市周辺にも点在する。これら河東山地に分布する石英閃緑岩は、斜長石・角閃石を主体とし少量の石英・カリ長石からなるとされる。しかしNo25は、角閃石を伴わず黒雲母を含み、石英・カリ長石の含有も少ないことから花崗岩組成に近い花崗岩類地域に由来すると考えられる。したがって産地が河東山地の石英閃緑岩地域に関係する可能性は低いものと推定される。今後周縁部の花崗斑岩との比較も必要である。南三十稲場式土器の分布は主に新潟県から福島県におよび、本地域は分布の南限付近に位置している。新潟県の東側には、朝日山地・飯豊山地・三国山地から湯沢東方の山地などにかけて広く花崗岩類が分布している。南三十稲場式土器分布圏内のこれらの地域も産地候補として今後検討する必要がある。さらに千曲川上流域の霧ヶ峰一美ヶ原高原地域の諸岩体あるいは甲府岩体などとの比較も重要である。

No25を除く花崗岩類で特徴づけられる土器Nos. 1, 3, 5, 6, 7, 12, 13, 14, 19, 20, 21, 22, 23は、クラスター1・2に含まれている。クラスター1・2は、上土棚・上土棚南遺跡および池之元遺跡試料が含まれていないことから、村東山手遺跡を含む範囲での地域的な胎土組成を示している可能性がある。クラスター1に含まれる南三十稲場式では、黒雲母・カリ長石の含有率がやや多く花崗岩類含有鉱物として黒雲母が含まれるのに対し、クラスター1・2中の堀之内2式では、黒雲母・カリ長石がやや少ない傾向にあり、花崗岩類含有鉱物として黒雲母・無色雲母などを伴うものと角閃石を伴うもの（No12）とが認められ、両者に微妙な差異がある。カリ長石が少なく斜長石・角閃石が主体をなす河東山地に点在する石英閃緑岩との岩質の比較が今後の産地推定の大きな課題である。No12の組成は、河東山地の地質と調和性が認められる。南三十稲場式Nos.19～23は、河東山地の地質と若干調和性に乏しい可能性がある。No25の場合と同様に広範な地域を視野に入れての比較検討の中から慎重に産地を推定していく必要がある。

安山岩で特徴づけられるNos. 8, 9, 15, 26, 27, 29は、すべてクラスター8に含まれている。クラスター8は、上土棚・上土棚南遺跡および池之元遺跡試料が含まれていないことから、村東山手遺跡周辺地域における特徴的な胎土組成を示している可能性がある。河東山地では、奇妙山火山岩、別所層中の輝石安山岩（松代町鳥打峠付近、松代町象山からその南西地域）、皆神山火山岩（角閃石含有普通輝石系紫輝石安山岩）などの安山岩が分布している。盆地西部山地には、聖山火山岩・荒倉山火砕岩などの安山岩が広く分布している。安山岩で特徴づけられる胎土のほとんどに花崗岩類・デイサイトが含まれているが、花崗岩類の分布は河東山地に集中していることから在地的土器である可能性がある。Nos. 8, 9, 15, 26は、黒雲母が計数されずカリ長石が少量である点で河東山地の石英閃緑岩の岩相とも調和する。Nos. 27, 29では黒雲母が角閃石と同数計数されているもの花崗岩類中の含有鉱物が角閃石であることから同様に河東山地の石英安山岩の岩相と類似する。バリノ・サーヴェイ（1996）は、千曲川河川砂（篠ノ井東

福寺付近)、姪川河川砂(松代赤紫地点、松代屋地地点)の重鉱物組成を報告している。3河川砂とも単斜輝石・斜方輝石が多く、角閃石は少なく、姪川河川砂は緑簾石が含まれる特徴がある。これらの河川砂の重鉱物組成は、方法が異なるため比較には若干注意を要するが、本遺跡の安山岩で特徴づけられる土器の重鉱物組成と調和的である。

変質火山岩類の多い試料Nos.11, 16, 17, 18, 32は、甲府盆地西部や丹沢山地周辺など南部フォッサマグナ地域の河川砂に多く見られる変質が進んだ緑色変質火山岩類がほとんど認められないことから、緑色変質のほとんど進んでいない第三紀～第四紀火山岩類の風化物に由来する地質と関連性が高いと推定される。安山岩・デイサイトが広く分布する河東山地や西部山地とその周辺地域を検討する必要がある。

泥岩の多いNos. 2, 10,あるいは珪質岩の多いNos.28, 30などでは、砂岩・泥岩・珪質岩などの堆積岩とともに安山岩・デイサイト・変質火山岩類・花崗岩類などを伴うことが特徴である。これらの岩石種はクラスター1・2・8などを構成する土器胎土と共通するものであることから、Nos. 2, 10, 28, 30の産地はクラスター1・2・8土器の産地と何らかの関連性のある流域に存在する可能性があるかもしれない。泥岩・珪質岩は、長野盆地周辺地域に分布する第三系～第四系中に砂粒として混入している場合のほか、子曲川上流域南佐久郡南部の四万十帯や秩父帯を構成していることから両地域をそれぞれ検討する必要がある。そのほかNos.10, 28は、相模川多摩川間の地域で在地的と推定される上土棚遺跡・上土棚南遺跡出土の堀之内2式土器と類似性が高いことから南関東地域との関連性も今後検討する必要があるかもしれない。

6 おわりに

村東山手遺跡出土縄文中期後葉～後期前葉土器の胎土分析から複数の胎土組成が存在することが明らかになったが、比較資料が充分でないことから産地推定に関しては多くの課題を残した。長野盆地の地質において地域の特徴が明瞭であることから、産地推定の精度を向上させるために今後各地点での河川砂などとの比較が期待される。また今回は遠方の土器との比較を試みたが同様の分析手法に基づいてより近距離の立地の異なる遺跡間で比較することによって、各時期ごとの胎土組成の分布状況から土器の生産や移動の様子がより明らかにされる可能性がある。

注

- 1) 河西学(印刷中) 綾瀬市上土棚南遺跡出土縄文後期土器の胎土分析。綾瀬市史研究、6。(1999年3月刊行予定)
- 2) ここではデイサイト・流紋岩を含む珪質変質火山岩の総称としてデイサイトを使用する。
- 3) コリウムの存在する岩石鉱物がコバルト重硫酸ナトリウムと反応して染色される。
- 4) 通産省工業技術院地質調査所監修(1991)『日本地質図大系中部地方』(朝倉書店)より引用。

文献

- 阿部方郎・河西学(1994) 綾瀬市上土棚遺跡出土の縄文後期土器の胎土分析。綾瀬市史研究、新刊号、21-52。
 天野哲也・大橋孝信(1984) 岩石学的方法による土器の分類と製作地推定の試み。北方文化研究、16、125-163。
 藤根久・古橋美智子(1998) 風呂屋遺跡・牛出遺跡の土器の胎土材料。『牛出遺跡・釜山遺跡・村面所遺跡・飛山遺跡・大谷地遺跡・八号埴遺跡』、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書28、255-270。
 河西学(1997) 池之元遺跡の堀之内2式土器の胎土分析。池之元遺跡発掘調査報告書、富上吉田市史資料叢書、14、154-168。
 河西学・藤原功一・大村昭三(1989) ハッ谷南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期土器群の胎土分析。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、第1集、1-64。
 加藤碩一・赤羽貞幸(1986) 長野地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)、120p.,地質調査所。

増島 淳 (1979) 土器中の砂粒産物から見た上白石遺跡出土土器の製作地について。上白石遺跡発掘調査報告書, 中伊豆町教育委員会, 130-142。

水沢教子 (1994) 塚田遺跡出土土器の胎土分析について。『塚田遺跡』, 御代田町教育委員会, 292-310。

日本の地質【中部地方】編集委員会 (1989) 『日本の地質4 中部地方』, 332p., 共立出版。

バリノ・サーヴェイ (1996) 北平1号墳より出土した土器の胎土の特徴。『大屋山古墳群・北平1号墳』, 長野県歴史文化財センター発掘調査報告書20, 152-159。

植木真吾・田中義文・辻本崇夫・馬場健司 (1997) 胎土分析の結果。『篠ノ井遺跡群』, 長野県歴史文化財センター発掘調査報告22, 74-82。

第5節 村東山手遺跡の石器群の検討

1 村東山手遺跡出土の石器

調整加工を施した道具としての石器が1721点出土した。この他に剥片7128点、石核369点が出土した。検出された遺構と出土した土器量から、中期末葉（加曾利EIV式併行期）と後期前葉（堀之内2式併行期）の石器が多数を占めると予想されるが、縄文時代草創期、早期（押型文系土器、貝殻条痕文系土器、絡条体丘底文系土器の時期）、前期初頭から前葉（塚田式～関山式並行期）、中期前葉（深沢タイプなどの時期）、中期後葉（加曾利EIII式併行期）、後期中葉（加曾利B1式併行期）、晩期（佐野式、氷式）の石器が混在していると考えられる。特に、早期後半の縄カ島台式、前期初頭から前葉の未命名型式の土器が比較的多数出土しており、これらの時期の石器が多く含まれていると思われる。

第1・2図に本遺跡出土の石器の器種とその細分の概要を示した。詳細は2章7節4項の記述を参照していただきたい。この分類に基づいて、周辺遺跡の出土例との比較を行い、各器種の時期を検討し、本遺跡の主体をなす中期末葉から後期前葉の石器群をできる限り抽出し、当該期の石器群を検討することを本節の目的とする。

2 周辺遺跡の石器群

(1) 周辺遺跡の石器群の時期

各器種の所属時期を検討する為に、千曲川流域を中心として、単一な時期の石器群の様相を示すと考えられる以下の遺跡を比較対象とした。

向陽台遺跡（塩尻市）：押型文土器を主体とし、早期前半の石器群の様相を示す。

鳥林遺跡（更埴市）：押型文土器を主体とし、早期前半の石器群の様相を示す。

向六丁遺跡（坂北村）：絡条体丘底文土器を主体とし、早期後半の石器群の様相を示す。

塚田遺跡（御代田町）：塚田式、関山式、神ノ木式を主体とし、前期初頭と中葉の石器群の様相を示す。

石川条里遺跡（長野市）：縄文施文の尖底土器を主体とし、前期前葉の石器群の様相を示す。

風呂屋遺跡（豊田村）：深沢タイプの土器を主体とし、中期前葉の石器群の様相を示す。

松原遺跡（長野市）：加曾利EIV式～加曾利B1式並行の土器を出土し、中期末から後期前葉の石器群の様相を示す。

栗林遺跡（中野市）：加曾利EIV式～加曾利B1式並行のを主体とし、中期末から後期前葉の石器群の様相を示す。

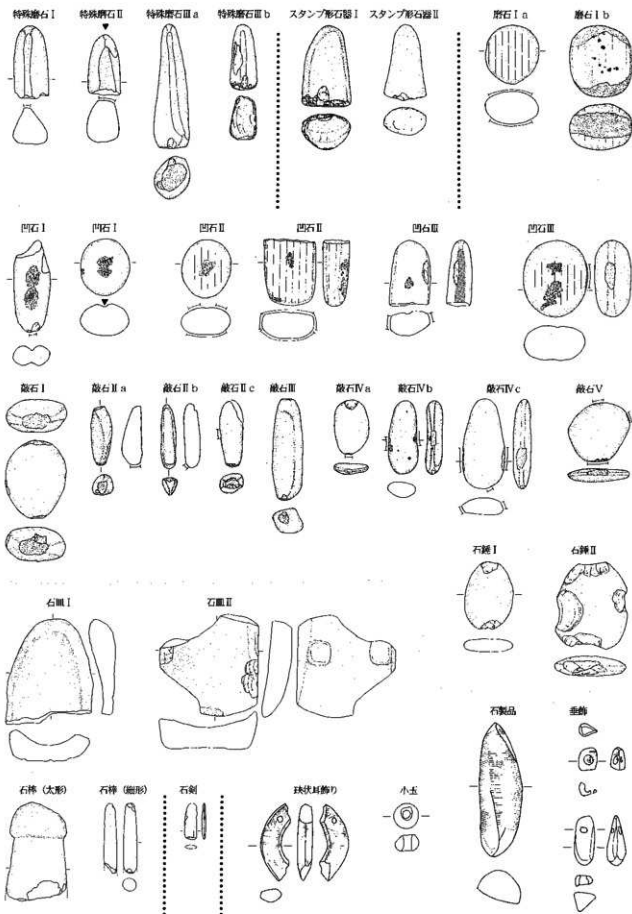
北村遺跡（明科町）：加曾利EIII式～加曾利B1式土器を出土し、中期後葉から後期前葉の石器群の様相を示す。

宮崎遺跡（長野市）：佐野式・氷式を出土し、晩期の石器群の様相を示す。

これらの遺跡の出土石器数を第1表にまとめた。石器は報告者により名称や器種の範疇が異なっており、できる限り本報告書の器種分類に沿って出土点数を提示したため、各報告書記載の出土点数と若干のずれがあることを断っておきたい。なお、以下の本文中で記述する細分類は本遺跡の分類名である。

(2) 早期前半の石器

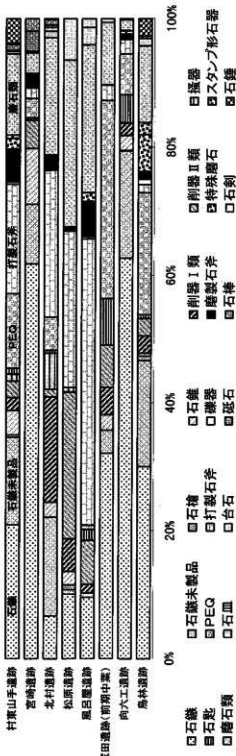
鳥林遺跡は出土土器片数の9割が押型文土器で、立野式、極沢式、細久保式が主体となる。他に沈線文系土器、早期末から前期前葉の土器、晩期の土器が約1割程と、加曾利E式、堀之内式が数点出土してい



第2図 村東山手遺跡出土の石器群 (2)

第1表 周辺遺跡の石器組成

遺跡名	対象資料	時期	+は出土しているが数値が不明なもの、?は存在するか否か不明なものを示す。PEQはピエス・エスキュー・ユを示す。													備考									
			石 鏃	石 錐	石 斧	石 刀	石 鏃	石 錐	石 斧	石 刀	石 鏃	石 錐	石 斧	石 刀	石 鏃		石 錐	石 斧	石 刀						
村東山手遺跡	全出土石器	早期前～晩期	266	174	5	49	25	33	14	12	148	218	5	64	21	7	160	5	2	0	12	2	49	黒形石鏃1点、鏃石2点、刃器状剥片13点、半月形石器1点。	
鳥林遺跡	全出土石器	早期前半	255	141	6	4	23	23	5	162	11	7	10	49	16	101	10	3					23		
西園寺遺跡	1～3・10号住居	早期前半	17							154	1	+	2	23		19	2	26							
西園寺遺跡	全出土石器	早期後半	968	259	1	35	31	+	67	98	35	+	12	9		26	2					1			
西園寺遺跡	11～14住居	前期前半～中葉	42	3	6	3	+	17	4	2	+	1			15	1									
塚田遺跡	前期初頭	前期初頭	16	1	1	4	+	1	9	2					3										
塚田遺跡	前期中葉	前期中葉	53	6	4	7	11		12	51	4				16	1									
石川森里遺跡	全出土石器	前期初頭～前葉	4	2	3	9	10		12	1	2	6		25	3	1									
黒呂屋遺跡	全出土石器	前期中葉	28	2	4	20		5	2	131	1	16	4	67	8	4									
松原遺跡	全出土石器	中期主～後期前葉	14	1	3	7	32		1	0	34	1	0	0	36	0	9	0	0						
豊林遺跡	全出土石器	中期末～後期前葉	410	270	45	?	?	70	10	?	160	?	90	+	60	29	2	?	37						
北村遺跡	全出土石器	中期後葉～後期中葉	195	62	68	484	34	165	14	152	671	71		533	28	18	10	24	4						
宮崎遺跡	5号住居	晚期前半	210	35	+	33	+	10	0	2	16	0	?	7	0	0	2	1	0	4	2	0			
宮崎遺跡	2号住居	晚期後半	38	5	+	6	0	0	1	3	?	2	0	0	8	0	0	0	5						
宮崎遺跡	20・21号住居	晚期主体	573	86	+	81	+	41	0	3	28	15	?	21	0	0	30	2	0	29	18	0			



る。石鏃はⅠ類146点、Ⅱ類35点、Ⅳ類2点で、この内計測可能なものでは小型が大半を占め、大型は1点のみである。黒曜石が85%を占める。石鏃未製品は本遺跡に類似するものも見られるが、黒曜石製のものが多く本遺跡の石鏃未製品と石材組成が異なる。石鏃は4点出土しており、Ⅰ類が1点、Ⅲ類が3点である。石匙は5点出土したが、つまみ部が不明瞭で石匙とは認めがたいものも含まれ、本遺跡出土の石匙とは異なる。磨製石斧は、Ⅰ類と礫の一端を磨いたⅡ類に含まれる礫石斧が見られるが、本遺跡で主体となるⅢ類・Ⅳ類は報告書では確認されない。石材はおもに蛇紋岩を用いる。

向陽台遺跡は早期押型文の竪穴住居址4棟が検出されており、その周辺から中期・後期・晩期の遺物がわずかに出土している。70m離れた別の調査区では中越式の竪穴住居址が4棟確認されている。他時期の石器の混入を避けるため、押型文期の1～3・10号住居の石器を資料とした。実測図が掲載された3号住居の石器をみると、石鏃はⅠ類・Ⅱ類のみで全て黒曜石である。計測可能な16点中13点が小型で、1.6cm以下のものが主体となる。石鏃はⅢ類が確認されるのみである。磨製石斧は2点出土しており、いずれも刃部小破片でⅠ類と思われる。

(3) 早期後半の石器群

向六工遺跡は当該期の竪穴住居址5棟、集石5基、焼土址8基、土坑茶碁が検出され、早期後半の条痕文系土器の点数が全体の95%を占める。この他には、押型文土器、五領ヶ台式、加曾利E式から堀之内式の土器片が出土している。遺物は上・中・下3段のテラス上の地形に分布しており、早期後半の遺物は上段に集中しており、他時期の土器が殆ど見られない。石鏃は分類可能なものの9割がⅠ類（門基）の小型と中型で、Ⅱ類（平基）は小型と中型が主体となるが、Ⅰ類に比べて数が極めて少ない。大型は計測可能なものうち1割であるが、他時期の混入品の可能性がある。石鏃と石鏃未製品では内訳が不明であるが、74%が黒曜石製で、25%がチャートである。打製石斧は35点出土しているが、33点は中期・後期の土器が出土する中段・下段から出土しており、早期後半の土器が最も出土する上段部では数点しか出土していないことから、多くの打製石斧は中期・後期の遺物と考えられる。早期後半には打製石斧が存在しないと考えられるが、実測図中に側面と基部のみを加工した直刃のトランシェ様石器に類似したものが1点見られる。早期の他地域にはトランシェ様石器または直刃斧が存在しており、向六工遺跡においても検討を要する。石匙はⅡ類が5割以上を占め、黒曜石製が多い。磨製石斧はいずれも本遺跡分類Ⅱ類に相当し、9割以上が蛇紋岩である。出土地点は早期の土器が集中する上段のテラスに集中しており、いずれも早期の磨製石斧である可能性が高い。石鏃はⅠ類が23点、Ⅲ類が12点でⅡ類は出土していない。

なお、向六工遺跡は条痕文系土器群後半期の絡糸体圧痕文系土器の時期を主体とした石器群であり、本遺跡で多数出土した条痕文系土器群前半期の鶺鴒島台式土器に伴う石器群を抽出できる遺跡を見つけることができない。

(4) 前期初頭から前期中葉の石器

向陽台遺跡では早期と別地点で前期中越式の竪穴住居址が4棟検出された（11～14住）。他時期の石器の混入をできるだけなくすために、住居内の石器を資料とした。石鏃はⅠ類中型が主体となり、Ⅱ類は極めて少ない。石鏃は黒曜石が89%を占める。これに対し石匙はチャート52%、黒曜石30%と石材の利用状況が異なる。磨製石斧はⅡ類である。打製石斧が2点出土しているが、当該期に属するものか検討を要する。特殊磨石、スタンプ形石器は見られず、前期には消滅した器種と考えられる。石皿はⅢ類が見られる。

塚田遺跡は前期初頭塚田式と前期中葉開山式・神之木式の住居が検出されており、それぞれの時期の住居内出土石器を資料とした。調査区からは押型文土器、沈線文系土器、条痕文系土器（鶺鴒島台式を含む）などが出土している。前期初頭では12棟の竪穴住居址が検出された。石鏃はⅠ類中型が主体を占める。報告書で打製石斧と報告されたものは、本遺跡の打製石斧とは異なり、礫器と器種認定した。これらは鳥

林遺跡（早期前半）の礫器と類似する。

前期中葉では12棟の竪穴住居が検出された。石鏃は前期初頭と同様Ⅰ類中型を主体とするが、大型の石鏃が増加してくる。黒曜石製を主体とする。石鏃はⅠ類が主体で、Ⅲ類が1点見られるが、Ⅱ類は出土していない。打製石斧は細形で小形のⅢ類に分類されるものであるが、石器組成に占める割合は低い。磨製石斧が出土していない点が特徴的である。石皿はⅠ類が出土しており、前期初頭とは異なる様相が見られそうである。

石川桑里遺跡は前期初頭から前葉と思われる尖底の縄文施文の石器群が出土している。この石器群の編年的位置付けが確定していないため初頭から前葉としたが、比較的短期間に限定される様相を示していると考えられる。口縁端部に刺突がなされる本遺跡第Ⅵ群2類土器が特徴的にみられ、胎土も本遺跡のものと類似する。包含層と遺構検出面は地表下2.5mで、他時期の土器の混入は見られず、出土した石器群は純粋に当該期の石器群の様相を示している。竪穴住居3棟、土坑5基、焼土2基などが検出された。資料とする石器は、前期土器が出土した⑤-1・2区、⑧-2区の資料のみとした。一部出土地点が不明なものもあり、若干の誤差はご理解頂きたい。石鏃の4点は全てⅠa類で、Ⅱ類~Ⅳ類は見られない。石材は黒曜石、チャート、安山岩である。石鏃は3点で、Ⅱ類とⅢ類が見られ、Ⅰ類は無い。石鏃Ⅲ類は本遺跡と比べ鏃部が短い。打製石斧が2又は3点出土しているが、いずれも細形のⅢ類と推定される。磨製石斧はいずれもⅡ類である。

(5) 中期前葉の石器

風呂屋遺跡は中期前葉の深沢タイプの土器を主体とし、早期絡条体瓦紋文土器、前期黒浜式・諸磯式並行の土器、後期堀之内式の土器がわずかに出土する。土器片数では中期前葉が97%を占める。当該期の遺構は検出されず、全て包含層の遺物である。各時期の土器はほぼ同じ範囲より出土しており、石器にも早期、前期、後期のものがわずかに混入していると考えられる。石鏃は28点出土し、ほとんどがⅠ類で、Ⅱ類とⅣ類が1点ずつ確認されるのみである。黒曜石を主体とする。石匙はⅢ類のみで、早期・前期に見られたⅠ類・Ⅱ類は出土していない。打製石斧は131点出土し、Ⅰ類が主体で、Ⅱ類・Ⅲ類がわずかに見られる。磨製石斧はⅢ類の定角式が主体で、村東山手遺跡で見られる幅2cm前後の小形のⅣ類は見られない。

(6) 中期後葉から後期中葉の石器

松原遺跡は沖積地に立地しており、層位と地点を別にして3つの文化層が確認された遺跡である。即ち、早期末葉から前期後葉、前期末葉から中期初頭、中期末葉から後期前葉の3時期である。中期末葉から後期前葉では竪穴住居7棟（堀之内式期3棟）、焼土13基、土坑84基、掘立柱建物址、杭列状遺構が検出された。土器は加曾利EIV式~堀之内2式のものが見られる。村東山手遺跡とほぼ同時期に集落が営まれたと考えられるが、敷石住居は検出されていない。これらの遺構は厚いシルト層にバックされており、当該時期以外の石器が混入することは考えられず、これらの遺構に伴出した石器はすべて中期後葉から後期前葉に限定される。石鏃はⅠ類を主体としⅡ類・Ⅲ類がわずかに見られるものの、Ⅳ類は出土していない。また、本遺跡で多く出土したⅡ類の小型は見られない。本遺跡に出土したⅡ類小型の多くは中期末葉から後期前葉以外のものである可能性を検討しなければならない。また、道具として認定できる石器の出土点数が159点と少ないものの、ピエスエスキュー、石鏃未製品がみられないこと、磨製石斧はⅣ類が1点出土したのみであることなど、本遺跡や後述の栗林遺跡・北村遺跡と異なる点がある。また、石鏃などの小形切片石器の石材について、松原遺跡の中期初頭の石器群と比較すると、中期初頭は黒曜石主体であるのに対し、中期末葉から後期前葉ではチャート主体に変わることが確認される。

栗林遺跡は中期後葉加曾利EIV式から加曾利B1式の時期を主体とし、わずかに中期前葉の深沢タイプの土器が見られる。他の時期の土器は報告されておらず、石器も概ね中期末葉~後期中葉のものと考えら

れる。土坑、土器埋設遺構とともに、中期1棟、後期4棟の竪穴住居址が検出され、そのうち3棟は敷石住居である。居住域に面した谷部には水さらし場状遺構1基と、貯蔵穴と思われる土坑71基が検出された。石鏃、石鏃未製品、打製石斧、磨製石斧、凹石・磨石類が多いなど村東山手遺跡に近い器種組成を示す。わずかではあるが、特殊磨石など早期の石器と思われるものが含まれる。各器種の詳細な内容が不明なため、第2表の器種別細分類別の点数は報告書に実測図が掲載された石器の点数を資料とした。

北村遺跡は加曾利EⅢ式並行から加曾利BⅠ式並行の遺構・遺物を主体とする。遺構検出面は2mを越える堆積層にバックされており、竪穴住居址58棟、墓壇469基、土坑352基などの遺構が検出された。竪穴住居址は称名寺式並行から堀之内2式並行期がピークとなり、29棟の竪穴住居址で敷石が確認されている。上記以外の時期の土器が見られないことから、出土した石器は加曾利EⅢ式～加曾利BⅠ式の時期に限定できる。石鏃は、I類(凹基)が136点、II類(平基)が56点、III類(凸基)が4点で、チャート製のものが主体(約9割)を占める。IV類(有茎)は出土していない。石鏃は、I類からIII類が存在し、チャート製が主体(92%)を占める。石匙は、報告書に掲載されたものを見る限り、粗雑な作りのI類とII類で、III類は報告されていない。また、器種組成に占める割合も極めて低い。削器I類と搔器はチャートが主体(約9割)を占め、石鏃、石錘などと同じ石材組成率を示す。打製石斧は、V類が確認されないものの、I類からIV類は村東山手遺跡とほぼ同じ割合で存在し、石材は粘板岩・頁岩などを主体とする。削器II類は粘板岩・頁岩を主体とし、打製石斧と同じ石材組成を示す。磨製石斧は大半がIII類とIV類で、I類・II類・V類は殆ど見られず、蛇紋岩が6割以上を占める。磨製石斧III類では基部端に平坦面があるもの(IIIb類)と平坦面がないもの(IIIa類)の両者が存在する。石皿はI類からIII類が存在する。砥石は砂岩製の大型の置砥石と思われるものが主体である。石錘は2点で、切り目石錘と有溝石錘で、礫石錘は報告されていない。なお、土錘が4点出土している。石棒は村東山手遺跡と同様に大型のものと小型のものが出土している。

以上の松原遺跡、栗林遺跡、北村遺跡は村東山手遺跡とほぼ同時期に集落が営まれた遺跡と考えられる。

(7) 晩期の石器

宮崎遺跡は尾根を挟んで村東山手遺跡の2km東方に位置する。トレンチ調査により中期末葉～晩期の遺構・遺物が検出された⁽⁴¹⁾。出土土器は晩期を主体としており、遺構は中期末葉の竪穴住居址1棟、後期の敷石住居1棟、後期から晩期にわたる石棺墓8基、晩期前半の住居址1棟、晩期後半の土坑墓11基などである。これらの遺構遺物は時期毎に地点を異にしており、トレンチにより主体となる土器型式が異なる。晩期前半佐野式が主体となる第5トレンチと2号住居より出土した石器を晩期前半の石器群、晩期後半氷式が主体となる第20号・21号トレンチより出土した石器を晩期後半の石器群として捉えた。前者では後期と晩期後半の土器が混入しており、後者では晩期前半の遺物が混入するものの中期・後期の土器は殆ど見られない。器種組成は晩期前半と後半ではほぼ同じく、石鏃を主体とした組成を示す。石鏃はIV類(有茎石鏃)が主体となり、前半期には74%、後半期では97%を占める。石材は両時期ともチョコレート色の珪質頁岩が一番多い。前半期の石鏃はI類14点、II類18点、III類16点、IV類136点で、I類～III類は長さ1.8cm以下の小形のものは殆ど見られず、2.5cm以上の大型のものが主体となる。後半期では無茎石鏃が1点のみで、晩期後半はすべて有茎石鏃になったと考えてよいであろう。石匙は出土点数も少なく、形が整った丁寧な調整加工のものは存在しない。打製石斧は全体で15点出土しているが、中期の住居址より出土したものを除くと11点である。調査区からは中期・後期の土器がわずかに出土していることを考えると、善光寺平の佐野式・氷式に打製石斧は器種として存在していないと考えるべきであろう⁽⁴²⁾。磨製石斧はII類に類するものが数点見られるが、III類・IV類が主体となる。

3 村東山手遺跡の石器群

(1) 各器種の時期の検討

以下に主要な器種について、所属時期とその特徴を検討していきたい。

石鏃：早期では前半・後半ともⅠ類を主体とし、前半には小型が大半を占めるのに対し、後半には小型と中型が主体となる。前期初頭以降はⅠ類中型が主体となり、早期から前期初頭にかけて石鏃の大型化傾向が見られる。なお、前期前葉～中葉の石川条里遺跡では小型が主体となっており、大型化の傾向に反している。前期中葉から後期前葉は中型を主体としながらも、大型と小型のものが一定量存在しており、石鏃の法量分化が明確になる。早期から中期初頭はⅠ類を主体とし、Ⅱ類が少数見られる。中期末葉から後期前葉にはⅠ類を主体にしながらも、Ⅱ類の割合が大きくなる。晩期前半にはⅣ類（有茎石鏃）が主体を占め、Ⅰ類Ⅱ類は大型が多くなる。晩期後半にはⅠ・Ⅱ類は見られなくなり、殆ど全てがⅣ類になる。なお、Ⅳ類が善光寺平に主体的に見られるのは晩期以降であり、少なくとも加曾平B1式までは存在しないか、客体的な存在である。

村東山手遺跡の細分類別の組成は、中期末葉から後期前葉を主体とする栗林遺跡、北村遺跡の様相に類似している。早期から中期初頭の石鏃も含まれるが、本遺跡の石鏃の様相は大局的には中期末葉～後期前

第2表 器種別細分類の出土点数

	石鏃Ⅰ大	石鏃Ⅰ中	石鏃Ⅰ小	石鏃Ⅱ大	石鏃Ⅱ中	石鏃Ⅱ小	石鏃Ⅲ	石鏃Ⅳ	石鏃Ⅴ	石鏃未製品	石鏃Ⅰ	石鏃Ⅱ	石鏃Ⅲ	石鏃Ⅳ	石鏃Ⅴ	磨製石斧Ⅰ	磨製石斧Ⅱ	磨製石斧Ⅲ	磨製石斧Ⅳ	磨製石斧Ⅴ	石皿Ⅰ	石皿Ⅱ	石皿Ⅲ	備考						
村東山手遺跡	23	73	43	3	31	40	2	8	47	174	4	2	6	24	7	18	94	11	25	9	5	4	14	28	6	1	2	3	2	石鏃は計測可能なものの数値。石匙は図示されたもの。
鳥林遺跡	1	5	32	0	5	9	0	2	?	141	3	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	石鏃は計測可能なものの数値。石匙は図示されたもの。
向陽台遺跡(早期前半)	▲	△	◎	▲	△	○	0	0	?	0	0	0	0	0	0	◎	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	石鏃は計測可能なもの。磨製石斧は図示されたもの。
向六丁遺跡	△	◎	◎	△	△	△	?	△ ₁₀	?	259	8	37	15	24	0	11	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	石鏃は計測可能なもの。磨製石斧は図示されたもの。
向陽台遺跡(前期前葉)	4	17	8	1	2	0	0	0	4	+	11	4	1	0	1	5	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧は報告書に掲載された石器の点数。
栗田遺跡(前期初頭)	1	6	1	0	3	3	0	0	+	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧は報告書に掲載された石器の点数。
栗田遺跡(前期中葉)	5	15	8	1	6	2	0	0	+	6	6	1	4	2	0	1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧は報告書に掲載された石器の点数。
石川条里遺跡	0	1	3	0	0	0	0	0	1	2	6	2	1	0	1	2	0	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧は報告書に掲載された石器の点数。
風呂屋遺跡	4	15	4	0	1	0	0	1	1	-	0	1	4	1	-	◎	△	△	-	-	0	2	13	1	0	8	0	4	石鏃に鉤状の縁辺のもの有り	
松原遺跡	4	5	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	-	1	1	◎	△	△	△	-	0	0	0	1	0	0	0	石鏃・石匙・石匙は報告書に掲載された石器の点数。石鏃は磯石種14点、有茎石鏃2点。
栗林遺跡	12	28	28	0	16	19	0	4	?	270	1	1	3	15	4	3	◎	△	○	△	-	0	?	◎	○	-	20	9	2	石鏃・石匙は報告書に掲載された石器の点数。石鏃は磯石種14点、有茎石鏃2点。
北村遺跡	12	9	11	0	4	4	0	+	452	1	3	7	19	8	41	100	17	11	8	7	0	1	46	8	0	12	16	18	石鏃・石匙は報告書に掲載された点。打製石斧は完形品の個体数。	
宮崎遺跡(晩期前半)	9	2	1	4	8	2	9	136	?	35	2	0	0	○	◎	?	0	0	0	0	0	?	+	+	0	0	1	0	石鏃・石匙は報告書に掲載された点。打製石斧は完形品の個体数。	
宮崎遺跡(晩期後半)	0	0	0	0	0	1	0	36	?	5	0	0	0	+	+	?	▲	0	▲	0	0	0	?	+	+	0	0	0	石鏃・石匙は報告書に掲載された点。打製石斧は完形品の個体数。	

細分類不能なものに点数に含まれないので表中の合計と実際の出土点数とは異なる。

数字0は出土していないことが確認されたもの。-は図版に掲載されておらず出土していないと想定されるもの。?は存否が確認できないもの。

◎は主体を占める。○は主体ではないが一定量存在する。△は極少量。

▲は類似しているが異なる器種と考えられるもの。+は出土しているが点数が不明であるもの。

業の様相を示しているものと考えられる。なお、同時期の松原遺跡は石銼点数も少なく、細別組成の様相も本遺跡と異なっている。松原遺跡は本遺跡と近接しており、地域的な差は考えられず、敷石住居が検出されていないなど、本遺跡とは異なった性格の活動が営まれた結果の差であろうか。

石匙：早期前半には殆ど見られず、早期後半にⅡ類を主体として器種組成に一定の割合を占めるようになる。前期前業・中業にはⅠ類が主体となり、Ⅲ類はほとんど見られず、全体の形状が不整形で、つまみ部が粗雑な作りが多い。ただし、塚田遺跡前期中業では整った形のものが見られる。中期初頭以降は石匙の数も少なくなり、Ⅲ類が主体となる。晩期には殆ど見られなくなる。

本遺跡出土の石匙には、中期末業から後期中業以外の石匙が多く含まれていると推定されるが、北村遺跡・栗林遺跡の出土例を考えると、中期末業～後期前業の石匙も存在すると考えておきたい。

石錐：早期前半にはⅢ類のみで、烏林遺跡のⅠ類は他時期の混入の可能性がある。早期後半から前期にⅠ類が見られるようになる。Ⅱ類も前期前業にわずかに確認される。ただし、本遺跡のⅡ類のようにつまみ部まで調整加工を施す例は中期末業以降に限られるようである。中期末業から後期前業にかけてはⅠ類からⅢ類まで見られ、特にⅠ類は栗林遺跡・北村遺跡で安定している。晩期にはⅠ類・Ⅱ類が多く、特にⅡ類が主体を占め、十字形の特徴的なものが見られる。

早期後半の向六工遺跡では多数の石錐が確認されているが、本遺跡で当該期の土器はわずかであり、早期前半・前期・中期初頭・晩期の土器の出土量を勘案すると、本遺跡の石錐にはこれらの時期のものが混在するとしても、器種組成に大きな変化は無いと推定される。

搔器：本遺跡では草創期の土器はわずかに出土しており、これらの土器に伴うと思われる尖頭器や局部磨製石斧などの石器が出土している。その時期の石器群には搔器が伴っており、本遺跡の搔器の中に草創期のものが含まれていると思われる。この他の時期では栗林遺跡、北村遺跡など中期末業から後期前業を主体とした遺跡からの出土例が確認されるのみで、他の時期には搔器が見られない。本遺跡では、第2章の第77図156のような所謂母指状搔器と、同図157～159のような直刃的な搔器が見られ、前者は旧石器時代から縄文時代草創期に見られる。後者の搔器は中期末業から後期前業のものと考えられる。

打製石斧：早期・前期初頭には見られず、前期中業に少数の出土例がある。中期前業以降は器種組成に大きな割合を示す。今回提示した資料では扱わなかったが、前期後業諸磯b式並行期には打製石斧が多数出土する。晩期には見られなくなることから、本遺跡の打製石斧は殆ど全てが中期末業～後期前業の石器と考えられる。

磨製石斧：早期前半に磨製石斧が存在することは確実であるが、破片資料が多く全体の形状が解る資料は少ない。烏林遺跡のⅠ類は直刃であるが分厚いもので、局部磨製石斧が早期まで残る例であろうか。烏林遺跡のⅠ類を除くと、早期から前期中業までは全てⅡ類である。中期前業にはⅢa類とⅢb類が確認される。Ⅲ類は晩期まで安定して存在する。Ⅳ類は中期前業の風呂屋遺跡に1点確認されるが、第2章の第83図248のような極小のものは見られない。Ⅳ類は中期末業～後期前業に安定して存在するようになる。晩期も後期と同様Ⅲ類・Ⅳ類が主体となる。

本遺跡ではⅢ類を主体としながらも、Ⅱ類の磨製石斧が多く出土している。上記の検討からⅡ類は前期以前に見られる形態であり、中期以降は一般的ではない。本遺跡のⅡ類も前期以前のものであると考えられる。Ⅲ類・Ⅳ類は、中期以降のものであり、本遺跡の中期前業と晩期の土器はわずかであることから、大半は中期末業～後期前半に属するものと考えられる。なお、Ⅰ類は神子柴型石斧であり、草創期に属する石器、Ⅴ類は中部地方では前期に見られるものと思われる。

磨石類：特殊磨石は早期前半に集中しており、向六工遺跡、風呂屋遺跡でも少数出土するが、押型土器がわずかに出土しており、それぞれの遺跡の主体となる時期のものではないと思われる。本遺跡の特殊

磨石は早期の石器と断定できる。磨石・凹石・敲石は早期から晩期まで存在しており、時期を限定できる要素が少ない。本遺跡でも複数の時期のものが混在していると思われるが、本遺跡と主体とする時期が同じ栗林遺跡、松原遺跡、北村遺跡ではこれらの石器が多数出土しており、器種組成における割合は本遺跡より多い場合もある。このことから、他時期の混在はあるものの、中期末葉～後期前葉の器種組成を大きく変えているとは考えられない。

石皿：早期から前期初頭はⅢ類の所謂台石のみであるが、前期中葉の塚田遺跡にⅠ類が見られるようになり、中期前葉にはⅠ類が安定して存在する。Ⅱ類は中期末から後期前葉に出現している。Ⅰ類が安定してくる中期前葉の土器は数十点であり、住居址などの遺構が検出されていないことから、本遺跡出土石皿Ⅰ類・Ⅱ類は中期末葉から後期前葉のものと考えられる。

以上のように、本遺跡より出土した石器器種組成は大局では中期末葉から後期前葉の石器群の様相を示しているといえるが、尖頭器、尖頭状石器、母指状搔器、半月形石器、磨製石斧Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅴ類、特殊磨石、スタンプ形石器、など当該期には存在しない石器も含んでいることを確認した。また、打製石斧、石鏃未製品、石棒・石剣などは殆ど全てが中期末葉から後期前葉のものであると推定される。他器種に比べ、石鏃と磨石類などに中期末葉から後期前葉以外の石器の混入が多いことが予想されるが、土器の出土量を考えると、全体の石器組成に大きな影響は無いと考えられる。

(2) 村東山手遺跡石器群の石材利用について

これらの中期末葉から後期前葉の石器群は石材と製作場所とにより以下のような四つのグループに分けることができる。

A群：黒曜石、チャート、硅質頁岩を主体的に用いる石鏃、石鏃未製品、石匙、石錐、削器Ⅰ類、搔器、ピエス・エスキューなどで、遺跡内に石器製作に関わる剥片・砕片・石核・原石が多量に確認される。素材剥片の獲得から石器製作まで集落内で行われたと考えられる石器である。なお、本遺跡のA群の石器には中期末葉から後期前葉以外のものも含まれており、当該期の石材利用状況をつかむのは困難である。しかしながら、SB11・12で出土した多量の砕片は当該期の石材利用状況をより明確に示している。すなわち、石鏃未製品などとともにSB12の埋壺周辺に一括遺物と考えられる多量の砕片が出土した。これらはチャート(245g)、黒曜石(164g)、硅質頁岩(7g)などで、中期末葉の石器製作の残滓であると判断される。少なくとも中期末葉の石器にはこれらの石材が用いられていたことが明らかとなる。

B群：頁岩、安山岩を主体的に用いる打製石斧、削器Ⅱ類、刃器状剥片などで、遺跡内に石器製作に関わる剥片・砕片がわずかに確認される。石核は出土せず、最終的な調整加工もしくは刃部再生加工のみが集落内で行われたと考えられる石器である。頁岩と安山岩は簡単な肉眼観察では石材の区別が困難なものもあり、剥片の出土点数はまとめて集計したが、打製石斧の主体的な石材である頁岩の剥片は少なく、ガラス質安山岩の剥片が多い印象を受けた。ガラス質安山岩は草創期の石器の中にも見られ、周辺の地域では旧石器時代から縄文時代前期に多く用いられる石材であるとする予測を持っている。安山岩の剥片は早期から前期前葉の所産である可能性がある。

C群：安山岩、花崗岩、砂岩などの自然礫を素材とした凹石、磨石、敲石、石鏃などで、礫の形状を変更することなく石器としたものであり、遺跡内に石器製作に関わる資料は残されない。

D群：緑色片岩、蛇紋岩、ヒスイ、安山岩などを主体的に用いる石棒、磨製石斧、石皿、垂飾りなどの玉類。遺跡内に石器製作に関わる石核、剥片、工具などが見られず、集落外で石器が生産され製品の形で遺跡内にもたらされたと考えられる石器である。D群の中には磨製石斧などのように、集中的に生産した遺跡が周辺地域で確認されているものもあり、完成品の石器が交換財として機能していたと考えられるものが含まれる。最近では、石皿や石棒を集中的に生産する遺跡が確認されており、これらも交換財であっ

た可能性がある³³⁾。

(3) 各器種の出土状況の検討

統計的な処理である為、100点以上出土した器種を中心に、出土地点の偏りを見ていきたい。なお、古墳墳丘より多数の石器が出土しているが、これらの石器は古墳築造に伴い、原位置を大きく変更されている可能性があり、検討の対象から除外する。蛇足であるが、出土点数が多いのは、古墳の調査精度がそれ以外の包含層に比べ精緻であったことも一因であると考えられる。

石鏃：ⅢK11周辺³⁴⁾、SB10、SB12、IIT14（遺物集中区6）などでまとまって出土した。

石鏃未製品：SB12、ⅢK11周辺、IIT14（遺物集中区6）、SK33などでまとまって出土した。

打製石斧：SK33、ⅢK11周辺、SB12、IIT14（遺物集中区6）、IIO20などでまとまって出土した。

石核：ⅢK11周辺、SB11、SB13、SB12、SK33、SB05などでまとまって出土した。石核の多くはチャート、黒曜石であり、石鏃の製作に関わるものと思われる。

上記の出土地点を見ると、ⅢK11周辺とSB12とIIT14（遺物集中区6）はいずれの器種においても出土点数が多い。これに対して、特定の器種のみが多い出土地点がある。SB10は石鏃や二次加工のある剥片は多いが、打製石斧は出土していない。SB13は石核が多いものの、打製石斧、石鏃未製品などは少ない。SK33は打製石斧、刃器状剥片、石鏃未製品、石核が多く、石鏃などその他の器種は少ない。

これらの偏りが何を示しているのか解らないが、以下のような解釈が考えられる。

仮説①：廃棄場と石器製作址、といったような場の利用目的の違いに起因する。すなわち、ⅢK11周辺とSB12とIIT14（遺物集中区6）などの全ての器種が多数出土する地区は廃棄場、SB13、SB15などのように石核が多く石鏃・打製石斧などが少ない地区は石器製作に関わる場であるか、これらの残片が遺棄された状況を示す場と考えられる。

仮説②：打製石斧が多く見られるのは中期末葉の遺構を中心としており、後期の遺構からは打製石斧はあまり出土していない。このことから、中期末葉と後期前葉では器種組成率が異なっていたことに起因する。

仮説③：中期末葉と後期前葉の器種組成率の違いではなく、各器種の廃棄方法が中期末葉と後期前葉で異なっていたことに起因する。

これらの仮説を検証する手段は持たないが、仮説①の場合SB12の資料は廃棄されたものと解釈されるが、SB12の石鏃未製品や破片類は床下より出土したとされるものを多く含んでおり、SB12出土の全ての石器を廃棄したものと考えることはできない。詳細な出土状況は不明であり、これ以上の検討はできない。

4 おわりに

単一時期の石器群を検討するには、本遺跡は決して良好な遺跡とはいえない。できる限り単一時期の石器群を抽出し、検討を行なったが、資料的な限界、時間的な制限により、十分な検討がなされたとは言いがたい。また、村東山手遺跡では中期末葉と後期前葉の集落が営まれたと理解しているが、土器編年上断絶する時期があり、両者の石器群が共通するものであったとする確証は何もない。各時期の遺構出土の遺物には他時期の土器の混入が多く見られ、中期末葉と後期前葉の石器群を区別することはほとんど不可能に近い作業である。今後良好な資料が発見されることを期待したい。

注

- 1 宮崎遺跡は1985年と1987年に長野市教育委員会による発掘調査が行われた。その後、立命館大学により、継続的な発掘調査が行われている。本項では長野市教育委員会による発掘調査についてのみ資料とした。
- 2 長野県内でも中信・南信地方では晩期に打製石片が器種組成で大きな割合を占めるのに対し、北信地方では打製石片が無いことが予想される。(鶴田典昭1988「V遺物2石器」宮崎遺跡」長野市教育委員会)
- 3 石皿、石棒などの敲打調整による石器は、剥片・石核が無いという根拠だけでは、完成品の形で遺跡内に持ち込まれた石器であると断定できない。集中的な生産とその周辺での拡散的な消費を検証する為には、石材の産地と集中的に生産する遺跡の関係、周辺地域での石材の斉一性の確認などの検討を要する。
- 4 「III K 1 1 周辺」としたものは道路の付け替え工事に伴う調査で、23号境東側の道路部分より出土したものである。遺物が集中して出土した面積は、8 m × 8 m グリッドが2から3区画分に相当すると考えられる。

参考文献

- 高田町教育委員会 1996 『西日市遺跡II』長野県小県郡高田町埋蔵文化財調査報告書第7集
- 高田町教育委員会 1997 『西日市遺跡III』長野県小県郡高田町埋蔵文化財調査報告書第9集
- 塩尻市教育委員会 1988 『一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 鈞長野県埋蔵文化財センター他 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12 向六工遺跡・十二遺跡・野口遺跡・古司遺跡・子地入遺跡』鈞長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書15
- 鈞長野県埋蔵文化財センター他 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 北村遺跡』鈞長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14
- 鈞長野県埋蔵文化財センター他 1994 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13 烏林遺跡・小坂西遺跡・鶴巻七尋岩陰遺跡・赤沢城跡他』鈞長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書16
- 鈞長野県埋蔵文化財センター他 1994 『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栄林遺跡・七瀬遺跡』鈞長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19
- 鈞長野県埋蔵文化財センター他 1997 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡 第1分冊』鈞長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26
- 鈞長野県埋蔵文化財センター他 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14 牛出遺跡・蒸山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡他』鈞長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書28
- 鈞長野県埋蔵文化財センター他 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4 松原遺跡 縄文時代』鈞長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書27
- 長野市教育委員会 1988 『宮崎遺跡』長野市の埋蔵文化財第28集
- 御代田町教育委員会 1994 『塩野西遺跡群 塚田遺跡』

第6節 村東山手遺跡出土の人骨

京都大学霊長類研究所 茂原信生

1 はじめに

村東山手遺跡は長野県長野市にある遺跡で、平成2年に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。その際人骨が5体出土している。

本報告はその際出土した人骨に関するものである。奈良時代に属するSM04を除いてすべて縄文時代後期の人骨である(表1)。石棺内に埋葬されていたSK66は再葬の可能性もあるという。

人骨の計測はマルチン(馬場;1991)に、歯の計測は藤田(1949)にしたがった。

第1表 村東山遺跡出土の人骨の概要

SB06 (縄文時代後期)	1体? 詳細不明
SB09 (縄文時代後期)	1体 成人男性(やや高齢)
SK53 (縄文時代後期)	1体 20歳代性不明
SK66 (縄文時代後期)	1体 成人性不明
SM04 (奈良時代)	3体 不明
IIN-10グリッド (時代不明)	1体 成人男性

2 出土状況

どの人骨も保存状態は悪く、全身にわたって詳細な観察が出来るものはない。一部で歯が残っていたり、四肢骨骨幹の残りが良かったりしてわずかに観察が出来る程度である。

3 出土人骨の形態的特徴

(1) SB06人骨

歯冠だけが残っている。比較的保存の良いものが2本でそれ以外は細片化している。下顎の大白歯が2本で、これらの咬耗はあまり進んでいないようである。さほど高齢ではない。性別などの詳細は不明である。

(2) SB09

縄文時代後期(規之内2式~加曾利B1式)の人骨である。膝を深く曲げ、股関節もほぼ直角に曲げており、顔面は左を向いている横臥屈葬である。左右の肘は軽く曲げている。保存状態は悪い。頭蓋骨および四肢骨の一部が出土している。

頭蓋骨

右半分は保存状態が悪くほとんど失われているが、左半分は比較的残りがよい。顔面はほとんど失われている。眉弓は比較的発達していたようである。乳様突起は比較的大きく、側頭線に続く耳道上稜も発達している。外耳道骨腫などはない。

下顎骨は普通であるが、内面に下顎隆起が見られる。歯は下顎の右第2切歯から第3大白歯までと上顎の左第2大白歯までの計7本である。咬耗はかなり進んでおり下顎の第1大白歯には咬合面のエナメル質はほとんどない。第3大白歯の咬合面も平坦化している。比較的高齢であろう。破損して失われているが、歯槽は第3大白歯まで確認できる。残っている右の犬歯から第2小臼歯までは咬耗が進んでおり、象牙質が大きく露出している。歯槽骨の辺縁は狭く盛り上がっており年齢を感じさせる。下顎体は正中部から次第にその高さを減じている。下顎枝角は比較的大きそうである。

四肢骨

下肢骨が出土している。左右の大腿骨と脛骨、および腓骨である。大腿骨はさほど太くない。後面の粗線は骨体から連続して張り出している。上部は殿筋隆起がやや発達しているが、上横径は28.1ミリ、上矢状径は22.6ミリであり扁平指数は80.4で扁平大腿骨ではない。

この個体は成人であり、比較的年齢が進んでいると判断される。全体にさほど頑丈ではないが、頭蓋の形態は男性的な印象を与える。

(3) SK53人骨

縄文時代後期のものと考えられている。土壌の床直から出土している。大腿骨と脛骨が膝を折り曲げた形で平行して出土していることから判断して、下肢を強く曲げた屈葬と思われる。

下顎骨は頑丈で、下顎体も高い。オトガイ隆起は良く発達している。主に右側が残っているがそこでは抜歯はみられない。第3大臼歯まで萌出している。第1大臼歯の歯冠は破損している。咬耗は軽度であり、小臼歯や第2大臼歯では象牙質の露出はみられない。切歯、犬歯、小臼歯にエナメル質減形成がみられる。エナメル質減形成は歯冠が形成される時期に何らかのストレス、例えば栄養不良や病気などを受けてエナメル質の石灰化不全がおこったことによるものである(山本:1988)。この個体でみられるのは線状のものである。犬歯では数本の線状のエナメル質減形成が観察される。残っている歯には隣接面も含めてう蝕(虫歯)はみられない。

頭部の形質から判断される年齢は青年程度(20歳代)であろう。

四肢骨では、肩甲骨の肩甲棘基部が残っているが特記すべきことはない。下肢骨で残っているのは、右大腿骨と脛骨および腓骨である。大腿骨後面の粗線は発達していない。また、上部も扁平ではない。骨は厚い。脛骨は扁平のようであるが詳細は不明である。

この個体は20歳代の成人と思われる。觸触などは見られない。エナメル質減形成が観察された。

(4) SK66人骨

縄文時代後期の人骨である。石棺に埋葬されていた。保存状態は非常に悪く、頭蓋骨の一部と四肢骨の一部が残っているだけである。石棺の長径は約1メートルである。屈葬であろう。

頭蓋骨・歯

頭蓋骨は頭蓋冠と側頭骨の一部が残っているだけであるが、形態の観察に耐えるようなものではない。歯は左の下顎歯の歯冠が2個残っている。第2大臼歯と第3大臼歯であろう。ともに4咬頭性である。咬耗はやや進んでおりともに歯冠表面が平坦化しているが象牙質の露出は第2大臼歯だけである。

四肢骨

挽骨の骨幹、大腿骨および脛骨の骨幹の一部が出土している。大腿骨は左側で、太い。上部の殿筋隆起は良く発達している。後面の粗線は5ミリほどの幅を持った稜状に発達している。脛骨については不明である。

この個体は第3大臼歯も萌出しており、四肢骨の形態からも成人であることは予測されるが、性別や詳細な年齢は不明である。

(5) SM04人骨

奈良時代の人骨と考えられている。発掘時には頭蓋骨が2つ出土しており、2体分が出土したとされているものである。

顔面の鼻根と眼窩上縁、ならびに上顎歯槽部のごく一部だけが残っている。歯は右の第2小臼歯から第1大臼歯にかけてが残っているが、第1大臼歯は歯根だけである。咬耗が非常に進んでおり、小臼歯では歯冠の舌側半が咬耗によって失われている。大臼歯でも舌側部が大きく咬耗している。かなり年齢が進

んだ個体であろう。

別に下顎歯が6本、上顎歯が3本出土している (Na14, Na14-1)。上顎歯は右の第1・2大臼歯と左の第2小臼歯で、ともに咬耗が進んでおり象牙質が露出している。ただし、第2大臼歯の咬耗は少ない。第2大臼歯は3咬頭性である。小臼歯は咬合面が平坦化している。下顎歯は左右の第1・第2大臼歯と左の第3大臼歯、および右第2小臼歯である。左の第3大臼歯は歯冠の表面だけが歯槽骨から出ており、他の下顎大臼歯の咬耗が進んでいることを考えると埋伏歯であった可能性がある。この歯はかなり小さい歯である。これらの歯の植立している下顎骨は頑丈である。

下顎歯が他に8本出土している (Na4)。左右の第1・第2・第3大臼歯と右の第1小臼歯、及び右犬歯である。左の第3大臼歯は変形している。咬耗はさほど進んでいないが第1・第2大臼歯では咬頭が確認できる程度である。

下顎の左右の第1・第2大臼歯と下顎左の犬歯が出土している (Na7)。これらの歯の咬耗は比較的軽度である。

いずれにせよ、下顎の大臼歯は3個体分ある。大臼歯の位置の同定をたとえ誤っていたとしても合計で15本の大臼歯があり、下顎大臼歯は一人が6本持っているのが普通であるからこの点でも少なくとも3個体は埋葬されていたことになる。

四肢骨では脛骨の骨幹の一部が残っているが詳細は不明である。

(6) II N-10人骨 (時代不明)

左右の大腿骨と脛骨、ならびに腓骨の骨幹である。大腿骨の後面の粗線は5ミリ程度の幅を持っておりやや発達している。上部には殿筋隆起はわずかに張り出しているが、扁平大腿骨ではない。骨は厚い。脛骨の骨間線は発達しているが、後面の鉛直線はさほど発達していない。これらは男性的な四肢骨である。

4 まとめ

村東山手遺跡から出土した人骨は縄文時代後期のもの4体と奈良時代のもの3体の計7体である。他に詳細不明のものが2体分ある。

骨の保存状態は悪く、詳細な観察が出来たものはない。年齢や性別のわかるものは少ない。したがって、時代的な特徴なども明らかではない。SB09人骨は成人の男性と思われるものであり、SK53は20歳代の成人であるが性別は不明である。エナメル質減形成が観察された。SK66は成人であるが性別は不明である。SM04の奈良時代人骨は下顎大臼歯の数から推定して少なくとも3体が埋葬されていた。どれも成人であることは明らかであるが、性別等の詳細は不明である。II N10人骨 (時代不明) は成人男性であるが詳細は不明である。

この人骨を観察する機会を与えていただいた長野県埋蔵文化財センターの方々から心から感謝いたします。特に鶴田典昭氏には本稿をまとめるにあたってお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

第2表 村東山手遺跡発掘の人骨の上顎歯の計測値 (単位mm)

	時代	性別	P2		M1		M2		備考
			m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	
村東山手遺跡 SK53	縄文後期	不明	7.7	10.1					
村東山手遺跡 SM04	奈良時代	不明	7.8	9.4	10.8	11.9	10.5	11.9	右 左
北村遺跡 (長野県) (茂原、1993)	縄文	男性	6.7	9.1	10.3	11.8	8.7	11.6	
		女性	6.5	9.2	10.0	11.8	8.7	11.3	
関東地方縄文人 (松村、1989)	縄文	男性	6.52	9.17	10.16	11.71	9.22	11.59	
		女性	6.24	8.88	9.92	11.40	8.94	11.20	
日本人 (横田、1959)	現代	男性	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	
		女性	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	

第3表 村東山手遺跡発掘の人骨の下顎歯の計測値(単位mm。m-d:近遠心径、b-l:頬舌径)

	時代	性別	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3		備考	
			m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l		
村東山手人骨 S K 53 S K 66	縄文後期	不明	5.1	6.4	5.8	6.7	7.3	8.5	7.4	8.6	7.6	8.7			10.9	10.7				
	縄文後期	不明													11.3	11.2	9.9	9.9		
北村遺跡(長野県) (茂塚、1993)	縄文	男性	-	5.8	-	6.2	6.5	7.6	6.5	7.5	6.3	8.2	11.1	10.9	10.1	9.9	9.2	9.0		
		女性	-	-	-	6.0	-	7.4	6.4	7.0	6.7	7.9	11.7	10.9	10.6	9.8	10.2	9.5		
関東地方縄文人 (松村、1989)	縄文	男性	5.28	5.94	6.78	6.27	6.85	7.06	6.93	7.95	6.98	8.40	11.59	11.19	10.94	10.51	10.47	9.94		
		女性	5.19	5.70	5.69	6.19	6.58	7.33	6.71	7.74	6.76	8.24	11.26	11.01	10.65	10.24	10.15	9.65		
日本人 (權田、1959)	現代	男性	5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28		
		女性	5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02		

参考文献

馬場悠男(1991):人骨計測法。人類学講座別巻1、「人体計測法」,雄山閣,江藤盛治編集;159-358。

藤田恒太郎(1949):歯の計測規準について。人類学雑誌, 61:1-6。

權田和良(1959):歯の大きさの性差について。人類学雑誌, 43(1):151-163

Matsumura, H. (1989): Geographical Variation of Dental Measurements in the Jomon Population. J. Anthrop. Soc. Nippon, 97(4):493-512.

茂原信生(1993):北村遺跡出土の人骨の形質。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 14, 「北村遺跡」, 259-402。

山本美代子(1988):日本古人骨永久歯のエナメル質減形成。人類学誌, 96(4):417-433。

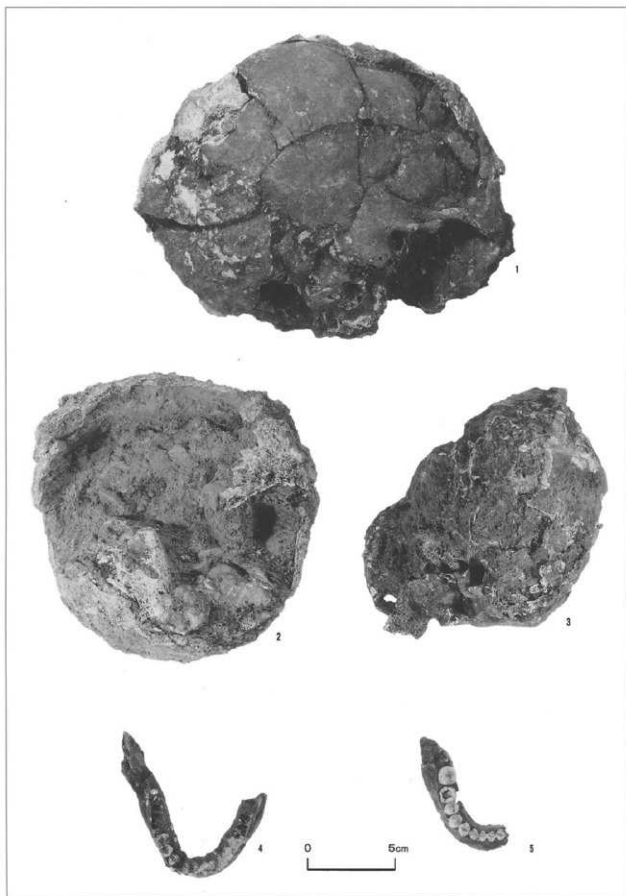


写真1. 村東山手遺跡出土の人骨

1: SB09 頭蓋骨右側面観(中央やや右下方に外耳孔が見える)、2: SK66 頭蓋骨内面(土がつまっている)、
3: SM04 頭蓋骨後面観、4: SB09 下顎骨上面観、5: SK53 下顎骨上面観

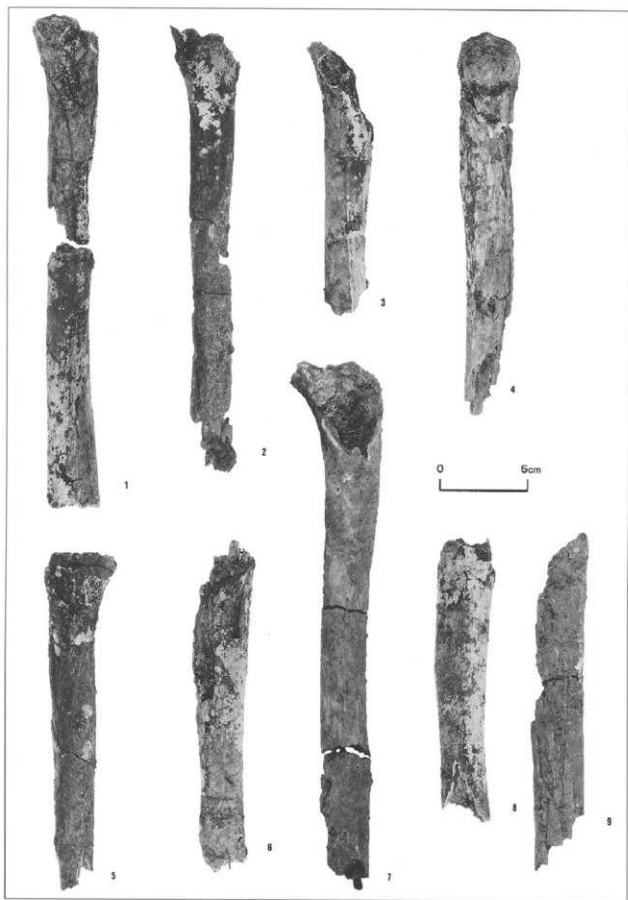


写真2. 村東山手遺跡出土の人骨

1: IIN-10 右大腸骨、2: SB09 大腸骨、3: IIN-10 大腸骨、4: SK66 左大腸骨、5: SB09 大腸骨、
6: IIN-10 脛骨、7: SK53 右大腸骨後面、8: IIN-10 脛骨、9: SK53 脛骨。

第7節 村東山手遺跡出土の動物遺存体

獨協医科大学第1解剖学教室 櫻井秀雄
京都大学霊長類研究所 茂原信生

1 はじめに

村東山手遺跡は長野県にある遺跡で、上信越自動車道の工事に伴い、平成2年に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。その際人骨と動物骨が出土している。本報告はその際出土した動物骨に関するものである。この遺跡の時代は縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である。獣骨はおもに縄文時代後期のものであり、それ以外にはわずかに古墳時代や平安時代のウマなどが出土している。

2 脊椎動物遺存体の状況(表1、2)

出土動物骨の全量は、平箱一杯に満たない量であり、骨の総重量は1828グラムである。破片や細片がほとんどで保存状況は良くない。焼けている骨がかなり多く認められるが、生骨も混在している。同定された骨の点数は93点で、その重量は992グラムである。重量比では同定率は54.3パーセントにもなるが、点数が少ないにも関わらずこの値が高いのは、出土して同定されたものではウマの歯が50パーセント以上を占めるためである。同定された骨には解体痕や咬痕は見られない。

3 出土した脊椎動物遺存体の種類

同定された脊椎動物は哺乳類だけで、以下の2目3種である。

偶蹄目Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ(あるいはブタ) *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

奇蹄目Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

なお、ここでイノシシ(あるいはブタ)としたものは、出土した骨が細片でありブタとの区別はつかないと考えるので、こう記した。これからイノシシとしたものはすべてブタの可能性があることをお含みいただきたい。

4 脊椎動物遺存体の出土状況と特徴

検出された動物骨はニホンジカが最も多く、次いでイノシシ、ウマの順であった。縄文時代のものがほとんどで、わずかに古墳時代と平安時代のウマが出土している。

ニホンジカは54点の骨が同定された。すべて縄文時代後期のものである。出土部位に大きな偏りはなく、ほぼ全身の部位の骨が出土しており、歯が最も多く出土している。IIN03地点から出土している下顎骨と下顎歯は同一個体のものである。この下顎骨には、萌出途中の切歯が認められるのでかなり若い個体であ

る。ニホンジカで焼かれた骨は14点確認されているが、出土部位、出土地点も様々であり一定の偏りはみられない。焼かれていない骨は主にHN03とSK52の2地点から出土しているが、SK52から焼骨はまったく出土していない。

イノシシは23点が同定された。やはり、縄文時代後期に相当する地層から見つかったものである。ニホンジカと同様に歯が最も多く9点が検出された。四肢骨の破片や手足の関節骨も見つかっており、特に偏りはない。焼かれている骨は15点確認されている。

ウマは同定された16点のすべて歯である。古墳時代(SK88)の1点とそれ以外は平安時代のものである。1点だけ下顎骨の一部に積立した状態の第2大臼歯(M2)と第3大臼歯(M3)があるが、それ以外はすべてバラバラに出土した遊離歯である。焼かれている歯はない。上顎右第1大臼歯(M1)が3本出土しているので、出土したウマの最少個体数は3である。

第1表 村東山手遺跡出土の脊椎動物遺存体 (出土位置別-2)

(左:鏡片, c:壳形, ph:近位半, dh:遠位半, ps:近位骨端, ds:遠位骨幹, ds:遠位骨端)

出土地点	地上番号	層位	年月日	種名	骨名	左右	面の上下	番	状態	C	ph	ds	ps	ds	dh	備考
SK52(備文後期?)			90.07.11	ニホンジカ	上顎骨	左	上	4q2	f							
SK52(備文後期?)			90.07.11	ニホンジカ	上顎骨	左	上	M1	f							
SK52(備文後期?)			90.07.11	ニホンジカ	上顎骨	左	上	M3	f							
SK52(備文後期?)			90.07.11	ニホンジカ	上顎骨	右	上	M2	f							
SK52(備文後期?)			90.07.11	ニホンジカ	中足骨	右	上	P3	f							
SK52(備文後期?)				ニホンジカ	中足骨	右	上		f							
SK52(備文後期?)			90.07.11	ニホンジカ	中足骨	左	上		f							大きい
SK52(備文後期?)			90.07.11	ニホンジカ	中足骨	左	上		f							
SK52(備文後期?)			90.07.11	ニホンジカ	中足骨	右	上		f							
SK52(備文後期?)			90.06.27	イノシシ	上顎骨	左	上	M2	f							
SK52(備文後期?)				ニホンジカ	下顎骨	左	下	P3, P4	f							II N034レオのものはSK52又はSK682の可能性がある。
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	下顎骨切歯部+骨	左	下	4p2, 4p3	f							若年
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	下顎骨切歯部+骨	右	下	13	f							若年
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	下顎骨	左	下	12	f							
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	下顎骨	右	下	11	f							
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	下顎骨	左	下	11	f							
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	下顎骨	右	下	11	f							
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	第3主手骨	左	上		c							
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	第3主手骨	右	上		c							
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	第4主手骨	左	上		c							
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	第4主手骨	右	上		c							
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	中足骨	左	上		f							若年
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	中足骨	右	上		f							若年
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	中足骨	左	上		f							若年
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	中足骨	右	上		f							若年
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	末節骨	左	上		f							若年
II N025(備文後期?)				ニホンジカ	末節骨	右	上		f							若年
II N10(時代不明)			90.06.13	イノシシ(ブタ)	白歯片	左	上		c							
SK682(半安?)	3)			ウマ	上顎片	右	上		f							
SK682(半安?)	3)			ウマ	下顎骨+歯	右	上		f							
SK682(半安?)	3)			ウマ	下顎骨	右	上		f							
SK682(半安?)	3)			ウマ	上顎骨	左	上		f							
SK682(半安?)	3)			ウマ	上顎骨	右	上		f							
SK685(古橋時代)			90.09.27	ウマ	歯片	左	上		f							
II T23(SK485?)			90.08.27	ウマ	歯片	右	上		f							
II N07(時代不明)			90.06.14	ニホンジカ	角片	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)			90.08.22	ウマ	下顎骨片	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)			90.08.22	ウマ	歯片	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)			90.08.22	ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)			90.08.22	ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)			90.08.22	ウマ	歯片	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	左	上		f							
II N1-1区(時代不明)				ウマ	上顎骨	右	上		f							



写真1. 村東山手遺跡出土のニホンジカ（縄文時代後期）

1：前頭骨、2：後頭骨、3：上顎骨および第1大白歯～第3第白歯、4：左右の下顎骨尖端部、5：頸椎、6：椎骨、7：中手骨、8：第III・IV手根骨、9：脛骨、10：踵骨、11：距骨、12・13：中足骨前面、14：基節骨、15・16：中節骨、17：末節骨



写真2. 村東山手遺跡出土のイノシシ（ブタ）（縄文時代後期）とウマ（平安時代？）

（1～12：イノシシ（ブタ）、13～20：ウマ）

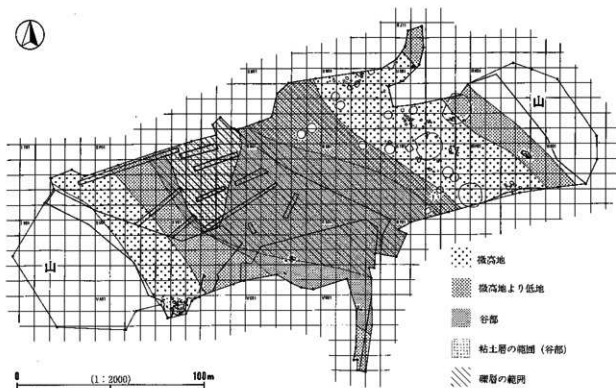
1：上顎骨、2：右上顎第2切歯、3：右上顎第2臼歯、4：左上顎第2大臼歯、5：左下顎第3大臼歯、6：左下顎体および第2大臼歯、7：脛骨、8：尺骨、9：第III中手骨、10：大腿骨、11：踵骨、12：第IV足根骨、13～17：ウマの上顎臼歯の咬合面、18～20：ウマの下顎臼歯の咬合面。

第8節 村東山手遺跡の縄文時代後期住居址の検討 —遺跡形成論的検討—

1 遺構の立地

本遺跡は尾根に挟まれた谷状の地形に位置している。遺構は谷筋に沿った微高地上に立地している。第1図に示した地形区分は縄文時代にはすでに形成されていた地形であると推定された。したがって、調査区内の遺構分布状況は縄文時代の様子を概ね示しているものと判断される。すなわち、谷部に遺構が確認されていないが、削られて遺構が消失したのではなく、調査区内の谷部には遺構が存在しなかったものと考えられる。詳細は第2章1節を参照していただきたい。

微高地は東側と西側に見られるが、両側を尾根にさざぎられており、幅が広く、日当たりの良い東側の微高地に集落を構えたものと考えられる。西側の微高地には弥生時代後期の墓と奈良時代の竪穴住居址が検出されたが、縄文時代中期・後期の遺構は検出されず、遺物量もわずかであった。



第1図 地形区分と遺構配置

2 敷石住居について

(1) 村東山手遺跡の住居跡

本遺跡では中期末葉2棟、後期前葉～中葉10棟の竪穴住居址が検出された。中期の竪穴住居址(SB11・12)は炉と埋燵が確認されたのみで、形状はまったく不明である。敷石と思われる平石がわずかに確認されるが、敷石住居であったと断定はできない。後期の竪穴住居址(SB05～10・13～16)はいずれも敷石住居である。SB09は加曽利B1式に廃絶されたもので、他はすべて堀之内2式の時期に廃絶されたと考えられ、きわめて限定された期間に営まれた集落である。中期の住居址は不明な点が多

いため、本項では後期の竪穴住居址のみを検討の対象とする。敷石住居以外の施設は確認されていないが、本遺跡は、礫を多量に含んだ黒色土中に竪穴住居が掘り込まれており、遺構の検出が極めて困難であるため、敷石のない竪穴住居址や掘立柱建物址などの施設は、発掘調査技術の限界により確認されなかった可能性もある。第2章中に示した遺物集中地区の中で竪穴住居址であったものがあるかもしれない。また、確認された敷石住居も、住居プランが明らかにされたものは1棟もなく、敷石と炉の位置関係から竪穴の規模や形状を推定したに過ぎない。このように、個々の遺構の構造を検討するには良好な遺跡ではない為、住居址の変遷過程を、敷石の再利用という観点から検討してみたい。

(2) 敷石住居の遺構間接合の可能性

整理作業の当初には各敷石住居間の敷石の接合関係を追うことにより、住居の構築の前後関係をつかむことができるかもしれないと考え、敷石の遺構間接合作業を予定していた。時間的制約と、最も遺存状態が良好であったSB08が屋外展示に利用されており、接合作業が困難な状況にあったことなどで、敷石の遺構間接合は断念した。

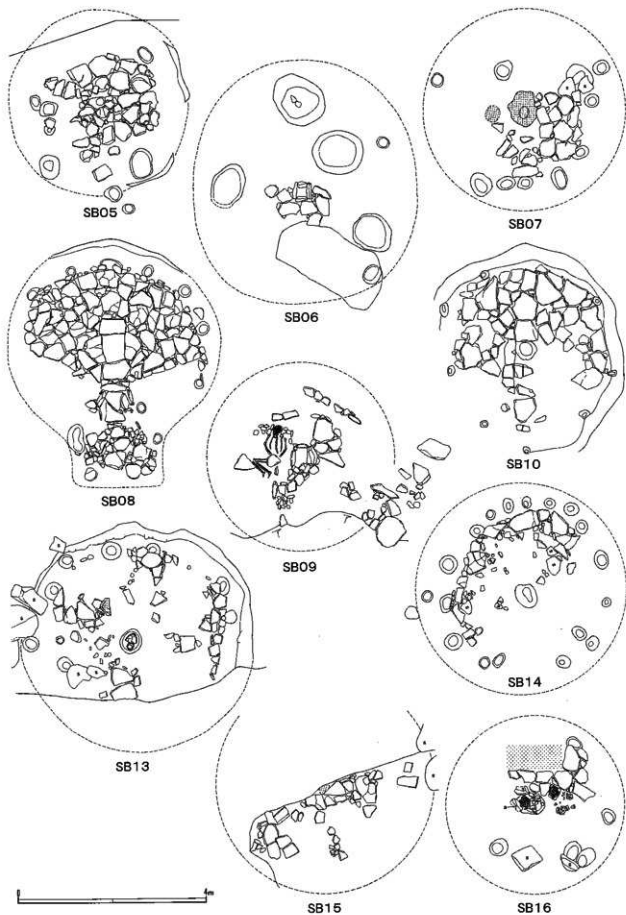
第2図に本遺跡の敷石住居を示した。SB08は住居の全容がイメージできるほど敷石が残されているが、他の住居址の敷石は空白部分が多く、使用時の様子をそのまま残しているとは思われない。すなわち、住居の廃絶後に敷石が抜かれていると考えられる。問題はいつ敷石が抜かれたかである。後世の攪乱により抜き去られていることも十分考えられる。しかしながら、本遺跡では、縄文時代後期の集落が継続している間に敷石が抜き去られていると判断できる遺構が検出された。

SB09とSB10はほぼ同じ位置に重複して構築された敷石住居で、それぞれの敷石の間に約30cmの覆土が堆積している。下方のSB10は堀之内2式の敷石住居で、上方のSB09は加曾利B1式の時期に、おそらく廃屋裏として埋葬が行われた敷石住居である(PL4参照)。SB09はある程度敷石を残しており、下位にあるSB10の覆土が攪乱されていないことを保証している。しかし、SB10の敷石が抜かれていると想定される部分は、上位のSB09の敷石もない部分であり、後世の攪乱による敷石の抜き取りを完全に否定できるわけではない。

次にSB10の敷石表面の磨耗と変色の状況を観察したところ第3図のような結果が得られた。(第1表)。磨耗の度合いを以下のような区分で表現した。①細かな凹凸の凹部まで磨耗が及んでいる特に顕著な磨耗のもの、②凹凸の凸部に磨耗が見られるもの、③わずかに磨耗が観察されるもの、である。変色は被熱によると思われ、黒色または赤褐色に変色する。また、観察表に斑点状の剝離としたものは、打点が認められない島状の剝離痕で、被熱による現象かと推定される。

表裏面の磨耗と変色の状況を比較すると、必ずしも一様に磨耗または変色している訳ではない。磨耗も変色もまだら状に観察される。Na32・Na33・Na78の周辺の敷石は変色しているにも関わらず、島状に変色しない部分が残されている。変色も一様に黒色または赤褐色になるのではなく、まだらに変色しており、原位置での変色とは考え難い(巻頭カラー図版参照)。表表面に磨耗または変色が観察されるものが数点確認される。Na3のように裏面の磨耗が進んでいるものも見られ、裏面に磨耗しているもの多くが変色していることも指摘できる。また、Na78のように磨耗面と変色面が一致しない例もある。このような状況は、敷石がSB10のみで使用されたものではなく、SB10の敷石に設置した段階ですでに磨耗と変色が進んでいたことを示すと考えられる。すなわち、他の住居で使われていた敷石が再利用されていたことを示しているのである。なお、敷石の石材は輝石を中心に含む安山岩で、何れも遺跡が立地する谷に面した山体を構成する岩石で、調査区周辺で多量に見られる石材である。ちなみに、大室古墳群の積石はこれらの岩石が用いられている。

さらに、SB10の住居内接合を試みたところ、Na87とNa55、Na30とNa31が接合した。Na87は他の敷石



第2図 後期敷石の遺存状況



図中の番号は散石観察表の番号に対応する。



表面の摩耗



裏面の摩耗

- 特に顕著な摩耗有り
- 摩耗有り
- ▨ わずかな摩耗もしくは摩耗無し
- 摩耗無し



表面の変色



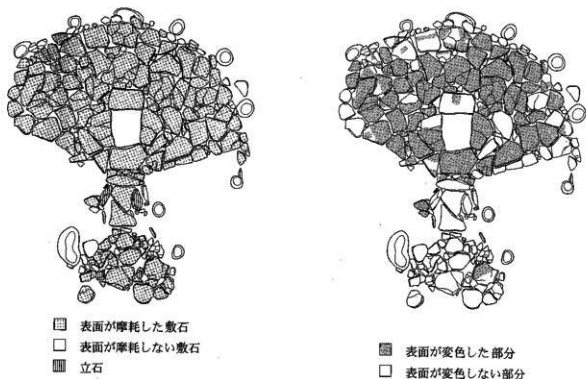
裏面の変色

- 黒色又は赤色に変色
- 変色無し

第3図 SB10 散石の使用痕

上に置かれており、住居使用時には別の位置に設置されていたものと思われる。これらの接合の様子から、敷石を敷く際に周辺部を加工して、必要な形状を作り出す作業を行っていたと推定することができ、接合するもののいずれかが他住居に持ち込まれて敷石として設置された場合、敷石の遺構間接合の可能性がでてくる。実際、敷石の周辺部に形状を整えるための加工痕跡を持つものがある。

敷石の遺構間接合は、諸事情により行うことができなかったが、別な機会に試みてみたい方法である。多くの敷石住居址の場合、後世の攪乱による抜き取りが介在していると思われ、敷石が抜かれた時期を特定することは困難である。より、良好な資料の出現を待って、方法論を練り上げる必要がある。



第4図 SB08敷石の使用痕

第1表 SB10 敷石観察表

◎は特に顕著な摩耗痕、○は摩耗痕あり、△はわずかな摩耗痕、×は摩耗痕無しを示す。Bは黒色の変色、Rは赤褐色の変色を示す。

番号	石材	厚さ (cm)	表 摩耗	裏 変色	裏 摩耗	裏 変色	側面加工	備考
1	複輝石安山岩	3.9	◎	B	△	B		
2	複輝石安山岩	2.5	◎	R	×	なし		裏面は割れ面
3	閃輝石安山岩	7.6	△	なし	◎	R		裏面は割れ面
4	複輝石安山岩	4.8	◎	なし	◎	なし		
5	複輝石安山岩	4.0	◎	R	×	なし		
6		2.5						一面に削片割れ加工がみられ縁切を加工して
7		2.0						小円礫(12.5×7.5cm)
8		3.5						小円礫(8.0×5.0cm)
9	複輝石安山岩	5.1	◎	BR	×	×		小礫(11.0×8.0cm)
10	複輝石安山岩	4.5	◎	なし	◎	B		
11	複輝石安山岩	5.1	◎	BR	×	なし		
12	複輝石安山岩	4.9	◎	B	×	B	一切自然面	
13		5.5	◎	B	×	なし		
14	複輝石安山岩	5.8	△	なし	◎	なし	全面自然面	
15	複輝石安山岩	4.7	◎	B	×	なし		
16	複輝石安山岩	3.7	◎	なし	×	×	一部摩滅	
17		2.2						小円礫(8.0×4.0cm)
18	複輝石安山岩	2.5	◎	BR	×	なし		裏面は割れ面
19	複輝石安山岩	3.7	◎	R	×	なし		裏面は整理面
20	複輝石安山岩	5.2	◎	BR	×	なし		
21	複輝石安山岩	4.7	◎	BR	◎	なし	一切自然面	
22	複輝石安山岩	6.0	◎	BR	×	×	一切自然面	他は割れ面
23		3.0						表面は割れ面
24	複輝石安山岩	5.1	◎	なし	×	×	一切自然面	小円礫(9.0×7.0cm)一部黒色に変色
25		2.8						小円礫(9.0×4.0cm)
26	複輝石安山岩	8.2	◎	B	×	なし		表面被熱による斑点状の割れ
27	複輝石安山岩							
28	複輝石安山岩	1.7	×	なし	×	なし		
29	複輝石安山岩	5.5	◎	B	×	なし		表面被熱による斑点状の割れ
30	複輝石安山岩	2.4	◎	B	×	なし		裏面は整理面(Na31に接合)
31	複輝石安山岩	1.5	◎	B	×	なし		裏面は整理面(Na30に接合)
32	複輝石安山岩	5.2	◎	なし	×	なし	二辺自然面	
33	複輝石安山岩	8.0	◎	なし	×	なし		
34	角閃石—普通輝石安山	13.0	◎	なし	×	なし	一切自然面	
35	複輝石安山岩	8.7	◎	BR	◎	BR		裏の方がよく磨れている
36	複輝石安山岩	9.0	◎	なし	×	なし		
37	複輝石安山岩	3.0	×	なし	◎	B		裏面は割れ面
38	複輝石安山岩	1.7	◎	なし	×	なし		
39	複輝石安山岩	3.9	◎	B	×	なし		
40	複輝石安山岩	5.0	◎	BR	×	BR		
41	複輝石安山岩	6.6	◎	なし	×	なし		
42	複輝石安山岩	6.0	◎	BR	△	BR		
43	複輝石安山岩	5.9	◎	B	×	なし		裏面は整理面 表面被熱による斑点状の割れ
44	角閃石—普通輝石安山	2.0	◎	B	×	B		
45		2.2	◎					小円礫(13.0×5.0cm)
46	複輝石安山岩	3.0	◎	R	×	なし		裏面は割れ面
47	複輝石安山岩	5.0	◎	B	◎	BR		表面被熱による斑点状の割れ
48	複輝石安山岩	4.3	◎	B	×	なし		裏面は整理面
49		2.2						小円礫(8.5×4.0cm)
50	複輝石安山岩	2.5	◎	B	×	B		
51		2.0						小円礫(6.0×4.2cm)
52		2.0						小円礫(6.8×7.5cm)
53		4.0						小円礫(6.8×5.0cm)
54	角閃石—普通輝石安山	2.5	◎	B	◎	B	一切自然面	他は割れ面
55	複輝石安山岩	3.0	◎	B	×	なし		裏面は割れ面 裏石上面(Na87)と接合
56	複輝石安山岩	5.7	◎	B	×	なし		表面被熱による斑点状の割れ
57	複輝石安山岩	4.0	◎	BR	×	BR	自然面あり	
58	複輝石安山岩	3.0	◎	BR	×	なし		
59	複輝石安山岩	2.8	◎	B	×	なし		
60	複輝石安山岩	2.3	◎	×	なし	◎		裏面は割れ面
61	複輝石安山岩	2.3	◎	なし	◎	なし		
62	複輝石安山岩	6.4	◎	なし	×	なし	三辺自然面	
63	複輝石安山岩	2.7	◎	B	×	なし		裏面は割れ面
64	複輝石安山岩	4.5	◎	B	×	なし		裏面は割れ面
65	複輝石安山岩	4.1	◎	B?	×	なし		裏面は割れ面
66	複輝石安山岩	4.5	◎	B	×	なし		裏面は割れ面
67	角閃石—普通輝石安山	6.0	◎	B	×	なし		表裏面被熱による斑点状の割れ
68	複輝石安山岩	4.5	◎	B	×	なし		
69	複輝石安山岩	4.5	◎	B	×	なし		
70	角閃石—普通輝石安山	6.0	◎	B	×	なし		
71	複輝石安山岩	4.5	◎	B	×	なし		
72		3.0						小礫(5.0×4.0cm)
73	複輝石安山岩	4.0	×	なし	◎	R		
74	複輝石安山岩	5.8	◎	なし	×	B		
75	複輝石安山岩	6.3	◎	BR	×	B		
76	複輝石安山岩	3.2	◎	BR	×	なし		
77	複輝石安山岩	7.9	◎	B	×	なし		
78	複輝石安山岩	6.0	◎	BR	×	なし		
79	複輝石安山岩	3.5	◎	B	×	なし		裏面は整理面
80		2.8						小円礫(9.5×5.0cm)
81	複輝石安山岩	2.5	◎	BR	×	なし		裏面は割れ面
82	複輝石安山岩	4.5	◎	B	×	なし		裏面は整理面 Na55と接合

第4章 結語

平成元年度、平成2年度の二年間にわたり発掘調査が行なわれ、10年の年月を経て報告書の刊行をすることができた。調査より長年が過ぎ、発掘調査担当者と報告書担当者が異なるなど、発掘当時意図されていたことをどれだけ報告書の中に盛り込めたのか、不安が残る。しかしながら、遺物、遺構の観察を通して、村東山手に暮らした人々の様子をわずかながら垣間見ることができた。本遺跡は縄文時代後期堀之内2式期の集落跡を主体としているが、それ以外の時期の遺構・遺物についても考古学的に興味深い資料が認められる。本文中では十分に触れることができず、心残りなどもあるが、以下に、時代をおって調査成果をまとめ、結語としたい。

縄文時代草創期：資料は少ないが、爪形文土器、押圧縄文土器とそれに伴う石器群など善光寺平では希少な資料を提示した。近接して宮ノ入遺跡、笹付遺跡などで種子柴型の石斧と尖頭器が知られており、今後の新遺跡の発見が期待される。

縄文時代早期：早期後半の鶴岡島台式土器のまとまった資料が出土し、中部地方における鶴岡島台式土器の土器組成を明らかにした。さらに、土器組成、調整技法などで関東地方とは異なることが明らかになった。また、土坑内より同型式の完形土器が出土するなど、中部地方の当該期では希少な資料である。

縄文時代前期：初頭から前葉と推定される、口唇部に刺突列があり、尖底の縄文施文の土器が出土した。このような特徴の土器が近隣した遺跡からもまとまって出土しており、本地域で見られる未命名型式の土器群であろう。他型式との共伴関係が明らかでなく、編年の位置が明確にされていないが、今後注意される土器群である。また、この土器群と前後する時期の新潟地方、南信地方などの土器が少量出土しており、これらは未命名型式の土器群と関連するものと推定している。

縄文時代中期・後期：集落跡が営まれた時期である。中期末葉2棟、後期前葉10棟の住居址が調査された。当初、土器・石器などの遺物の分析に加え、敷石の遺構間接合による住居の前後関係を検討したいと考えていたが、時間的制約から果たすことができなかった。敷石の再利用の状況が見出され、新たな研究方法の視点としての可能性を指摘したに過ぎないが、今後の調査研究の中で再度検討したい課題である。土器群では、阿部芳郎氏により、中部地方における堀之内2式の細分案が示され、新潟地方の南三十稻場式との関係が整理された。また、土器組成率に示される長野県内の堀之内式土器群の在り方を知ることができた。石器群では中期末葉から後期前葉の石器群の輪郭を示した。長野県内では、近年堀之内式期の遺跡の調査例が増加しており、堀之内式期の土器・石器のより詳細な検討が期待される。

弥生時代後期：本遺跡は大室古墳と重なっており、古墳時代に墓域であったことが知られている。今回の調査により、遺跡が所在する谷は弥生時代後期に墓域であったことがほぼ確認された。出土遺物では箱清水式に混じて東海系のS字口縁甕や北陸系の擬凹線文の甕などが僅かに出土しており、周辺地域との関係が問題とされる。また、土坑墓から出土した鉄剣は希少な資料であり、今後の調査研究により、村東山手に作られた墓の意味が解明されてくることであろう。隣接する、川田条里遺跡の方形周溝墓、山上に構築された前方後方形の厨溝が巡る北平1号墳など弥生時代後期の墓制を考える上で重要な資料が蓄積されてきた。

古墳時代：大室古墳の調査成果はすでに報告されているが、新たに1基の古墳が確認され、大室古墳では調査例が少ない埴輪を伴う古墳であった可能性を指摘した。また、土坑内で検出した須恵器・土師器は、

古墳の築造に関わる何らかの行為が行なわれていたことを示しており、一緒に出土した馬の骨片は大室古墳群のあり方を考える上で重要な資料となるであろう。

奈良・平安時代：奈良時代前半には古墳での再葬、もしくは再利用による埋葬が行なわれている。その後、古墳での埋葬行為は確認されず、竪穴住居址が出現し、平安時代へと続く。古墳時代から奈良時代初頭までは墓域であった地区に存在する住居はどのような意味をもつのであろうか。時代の変改と土地利用の変化を考える上で興味深い事例である。

以上のように多岐にわたる資料と課題が示された。発掘調査から10年を経てようやく報告書の刊行に至ったものであり、十分でない点も多々あるものの、善光寺平の歴史を語る上で重要な遺跡であると考えている。本書では遺跡内における観察と検討を重視し、周辺遺跡との関わりについては殆ど触れることができなかった。近年、千曲川東岸の近接した遺跡の調査が進んでおり、各時代を通して、遺跡群としての詳細な検討をすべき研究の段階にきていると思われる。今後の調査研究が進む中で、村東山手遺跡の再評価を行ないたいと考えている。

最後に、発掘調査から報告書の刊行にいたるまでお世話になった皆様深く感謝申し上げますとともに、本書が多くの方々によって御活用頂くことを願うものである。

写 真 图 版



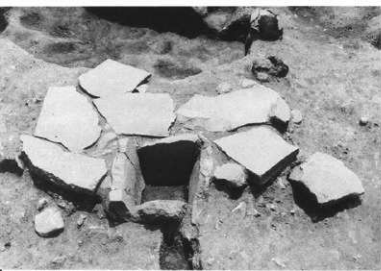
(昭和22年頃撮影)



遺跡遠景



左：S B05

右：S B05遺物出土
状況

左：S B06

右：S B07



S B08



左右：S B08主体部
遺物出土状況



左右：S B08張出部
遺物出土状況





SB09 (下部のSB
10の敷石が一部露
出)



左：SB09人骨
右：SB09^跡



左：SB10遺物出土
状況
右：同上



S B08とS B10
(手前S B10)

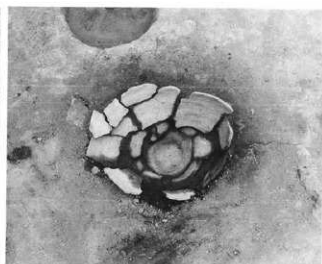


左：S B10遺物
出土状況
右：S B10⁹



左：S B11
右：S B12





左：SB11炉
右：SB11埋裏



左：SB12炉
右：SB12埋裏
(断面)



左：SB12埋裏
(平面)
右：SB13



左：SB13炉
右：SB14



左：SB15

右：SB16



左：SB16跡

右：SB16床面
土器集中



左：SK20

右：SK22



左：SK33

右：SK33断面



左：S K 47
右：S K 47遺物出土
状況



左：S K 52
中：S K 52骨出土状況
右：同上（顎骨）



左：S K 53骨出土状況
右：S K 63



左：S K 65
右：S K 66



左：SK77
右：同上



左：SH05
右：II S04埋甕？
出土状況



左：SF08
右：SF09



左：SF10断面
右：SF10



左：SM01-02
（弥生後期）

右：SM01鉄剣
出土状況



左：土器集中箇所

右：同上（弥生後期壺）



左：SB01（奈良時代）

右：SB01カマド



左：SB02（平安時代）

右：SB02カマド



左：S B03
(平安時代)

右：S B03カマド



左：SM04人骨
出土状況

右：同上

(古墳-奈良時代)



左：SM04 (石室)

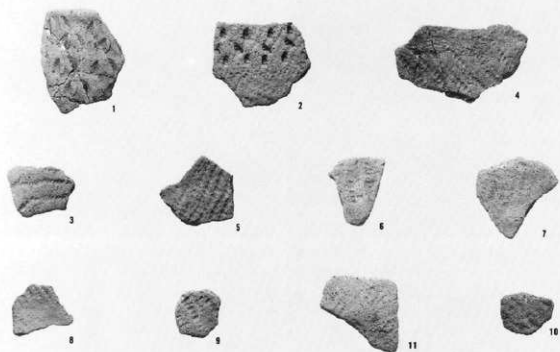
右：同上(古墳時代)



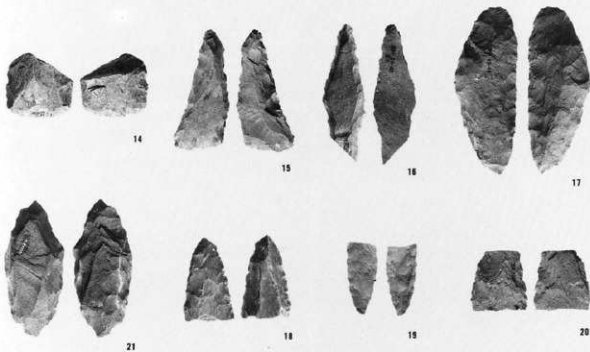
左：SM04墳丘断面

右：SM04全景





S 2/3



S 1/2



S 5/4

88
(SK28)



30



32



33



34



35



36



37



38



39



40

S 5/2